

別三十二律とある、

【題義】家安國は眉山の人、博學にして進士に擧げられ、第せず、諸公之を惜んで成都の教授に擧げらる、今其の教授と爲り赴くを送るのである、

【詩意】曾て君と別れて二十載となる、二十年の間に兩鬢の青を失ふ、吾道は艱難に屬するも、斯文は終に萬世の典刑である、進まんと欲して進まず宛かも鶴の如き状ではあるが、乾死の螢の如きの者となることは羞とする、余は一たび戎馬の間に奔走して、五たび春霜秋葉の零つるを見た、夜談にも空しく劍の利害を説き、春夢にも猶ほ經を横ふ、料らざりき新科は廢して忽ち舊貫に復し、童子等は先生に向つて智識を求むる、須らく凌雲の巨手君の如き人を煩はして、去つて入蜀の星と爲らしむ、蜀都の中蒼苔の生じたる處は高旻の室である、古柏の森森たる處は文翁の庭である、蜀の童子等は編簡の香の善を聞かされて、稍く鋒鏑の醒き惡を覺るであらう、岷山にも峨山にも雛鳳がある、梧竹を求めて其の修翎を養はんと思つて居る、君が教育法は音樂に譬ふれば、十二律を正しくして、飛舞して虞舜の廷に集まる樂みを爲すであらう、吾等も眉山は故郷なれば歸老して、亦以て吾が殘年を慰むることが出来る、

【餘論】武と文とを並記して、遂に文の善に歸宿する、題意に切なる此の如き詩は讚嘆せざるを得ないものである、

和吳安持使者迎駕

吳安持使者が迎駕に和す

小雪疎煙雜瑞光。

小雪疎煙瑞光に雜はる、

清波寒引御溝長。

清波寒うして御溝の長きを引く、

瞳瞳日色籠丹禁。

瞳瞳たる日色丹禁を籠め、

杳杳鞭聲出建章。

杳杳たる鞭聲建章を出づ、

鶴鷺偶叨陪下列。

鶴鷺偶々叨りに下列に陪し、

天閭聊啓望中央。

天閭聊か啓きて中央を望む、

歸來喜氣傾新句。

歸來喜氣新句を傾け、

滿座疑聞錦繡香。

滿座疑ふ錦繡の香を聞くかと、

【題義】吳安持は王荆公が婿である、元祐三年に都水使者の官となる、王駕を迎へる詩を作り示されたるを和したのである、

【詩意】小雪の降る中に疎煙が瑞光と雜はる、清波は寒色を呈して御溝を引くこと長く、忽ちにして瞳瞳たる日色が丹禁を籠めて、杳杳たる鞭聲は建章宮を出るのである、鶴鷺の身は偶々下列に陪隨するを叨にする、天閭即ち宮門は聊か啓きて中央を望むことが出来る、歸り來りて喜氣の餘り新句

【字解】一 瑞光 浩虚舟の賦

に、麗日焜煌、中合二瑞光一とある、

二 丹禁 宮闕を丹庭、丹堦、丹陛、丹禁と稱す、丹朱を以て地に塗るが故である、

を推敲して、滿座の人皆錦繡の香を聞くかと疑ふ、

【餘論】紀曉嵐の評に、此卷多冗雜潦倒之作、始知木天玉署之中、微逐交游、擾人清思不少、雖以東坡之才、亦不能於酒食場中、吐煙霞語也、坡公曰く、吾文如萬斛泉源、不擇地皆可出、在平地一日千里無難、及其與山石曲折、隨物賦形、而不自知也、公は文章に於て真に然るものなるも、詩に於ては必ずしも然らざるものかとも思はる、紀評を公が知るあらば、或は其れ知己と言ふべきか、

蘇東坡詩集 卷三十

古今體詩

和子由除夜元日省宿致齋三首

子由が除夜元日省宿して齋を致すに和す 三首

江湖流落豈關天。 江湖に流落する豈天に關せんや、

禁省相望亦偶然。 禁省相望むも亦偶然、

等是新年末相見。 等しく是れ新年未だ相見せず、

此身應坐不歸田。 此の身應に歸田せざるに坐すべし、

【題義】子由が除夜元日省中に宿直して齋戒し、七度江南自作年、去年初喜奉椒盤、冬來誤入文昌

昌省、連日齋居未許還、又、今歲初辛日正三、明朝風氣漸東南、還家強作銀幡會、雪底蒿芹欲滿籃、又、北客南來歲欲除、燈山火急萬人扶、欲觀翠輦巡游盛、深怯南宮鎖鑰拘の三首を示されたるに和したるものである、齋は散齋・致齋・清齋・潔齋などの名あり、神祭の前日には飲食を慎み、

心身を清潔に修むること、

【詩意】 江湖に定處なく流落するも天には關せざるものである、禁省に相望むのも亦偶然のものである、四海平等に新年なるも兄弟相見ることとは出來ぬ、それは此の身が歸田して自由の身とならざるに由る、

〔一〕

〔二〕

白髮蒼顏五十三。

白髮蒼顏五十三、

家人強遣試春衫。

家人強遣して春衫を試む、

朝回兩袖天香滿。

朝より回りにて兩袖天香滿ち、

頭上銀幡笑阿咸。

頭上の銀幡阿咸を笑ふ、

【字解】 〔一〕 五十三、坡公元祐三年戊辰、〔二〕 銀幡、銀にて製せる幡である、元日に高官の者に賜はる、〔三〕 阿咸、晉の阮籍が兄の子を阿咸と謂ふ、又唐の杜甫の従弟も阿咸と謂ふ、甫の詩に、守歲阿咸家とある、

【詩意】 白髮にして蒼顏年は早や五十三となる、家人は強遣して俗と同じく春衫を試みしむ、朝廷を退下して來れば兩袖に天香が滿ちてある、頭上の銀幡は阿咸の稚氣を笑ふ、

〔三〕

〔二〕

當年踏月走東風。

當年月を踏んで東風に走る、

坐看春闈鎖醉翁。

坐して看る春闈醉翁を鎖すを、

【字解】 〔一〕 醉翁、歐陽永叔を謂ふ、歐陽修が著はせる「歸田錄」に、嘉祐二年、余與韓子華、王禹玉、

白髮門生幾人在。
却將新句調兒童。

白髮の門生幾人かある、
却つて新句を將て兒童を調す、

春試進士、皆在南省中東廂、刑部有樓、甚宏壯、旁視宣德門、直抵州橋、鎮院、每以正月五日、至元夕、未引試、考官往往竊登樓、以望御路燈火之盛、宋宣獻詩、有還勝南宮假宗伯、重扉深鎖暗登樓之句、蓋謂此、嘉祐中、歐陽知舉、梅聖俞、作英登樓詩、相與唱和、遂爲禮闈盛事とある、朱竹垞の「日下舊聞」に就て高宗が命じて編纂せしめし「舊聞考」に、雅坪散錄云、宋解試、諸路並以八月五日、鎮院、而福建則用七月、川廣則用六月、以道遠故也、謂封鎖院門以試士也、故亦稱試院爲鎖院とある、

【詩意】 當年は我も試を受けん爲め月を踏んで東風に走る、其の時は坐して看る春闈に醉翁を鎖すを、今日白髮となつて門生が幾人存在するや、其の門生が今日は教授と爲り新句を將て兒童を試調する役を勤む、

【餘論】 紀曉嵐は、等是新年の二句を評して、意曲折而語自然と曰ひ、白髮門生の二句を評して、太輕薄と曰ふ、東坡先生は此の位の事は容易に言ふ人であると知らば、輕薄などと稱するものは却つて輕薄である、

次韻答張天覺二首

次韻張天覺に答ふ 二首

車輕馬穩轡銜堅。
但有蚊蟲喜撲緣。

車は輕く馬は穩か轡銜は堅し、
但蚊蟲の撲緣を喜ぶ有り、

【字解】 〔一〕 車輕、淮南子に、車輕馬良とある、樂天の詩に、馬穩人攜轡とある、〔二〕 蚊蟲、カと

截斷口前君莫問。口前を截斷して君問ふこと莫かれ、

人間差樂勝巢僊。人間の差樂は巢僊に勝る、

撲縁、而拊之不時、則缺、衝毀、首碎、骨、意有所至、而愛有所亡、可レ不レ慎邪とある、【三】撲縁、羣集して撲つこと、【四】截斷、韓退之が記夢詩に、口前截斷第二句、緯虐願我顔不レ歡、乃知神仙未レ賢聖、謹レ短憑、愚邀我敬、我寧屈ニ曲身世間、安能從ニ汝巢神仙とある、【五】差樂、上流は上流、下流は下流、各の等差はあるも、分相應に樂みあるを謂ふ、

【詩意】君が乗る所の馬車は車は軽く馬は穩かにて轡銜は堅固である、但注意すべきは蚊蠅の類が喜んで撲縁することあるを、余が願ふ所は口前を截斷して君は問うて呉れるな、人間は分相當に樂むあれば巢僊に勝るものである、

【二】

【二】

馭風騎氣我何勞。風に馭し氣に騎る我何ぞ勞せん、

且要長松作土毛。且く要す長松土毛を作すを、

亦如訶佛丹霞老。亦たかぶつ佛の丹霞老の如く、

却向清涼禮白毫。却つて清涼に向つて白毫を禮す、

如く、之を放てば光明を發す、「大殿若三十一」に、世尊眉間有白毫相、右旋柔軟、如觀羅縣、鮮白光淨、踰珂雪等、是三十一とある、「清涼志」に、無盡居士張商英、除河東提點刑獄、至清涼山、清輝閣、文殊所化宅也、良久北山雲起、于白雲中、現大寶燈、

【字解】【二】作土毛 張華の「博

物志」に地以草木爲之毛とある、

【三】丹霞老 前に辨ぜり、【三】

白毫 佛陀が三十二相の一、佛陀の

眉間に白色の毫相ありて、右方に旋

ぐりて宛轉すること目の正中せるが

白雲既收、復現大白圓相、如明月輪、明日至東臺、五色祥雲見、白圓光從地湧起、如車輪百旋、商英以レ傷讚之とある、

【詩意】仙人の如く風に馭し又氣に騎るの術は我何ぞ勞せんや、且く長松が毛の如く庭上に枝を張るを見るがよろしい、亦佛陀は本來偶像ではないとて之を燒棄した丹霞の解脱せる如くでもあるが、却つて清涼山に向つて白毫を禮する眞實味もある、

【餘論】紀曉嵐は前首を評して湊泊之痕不化と曰ふ、學問を以てせざれば、詩重からずとの考が公の根柢を爲す、痕の不化なるは坡公としても自ら之を知るのである、又後の結末二句の如き却の一字にて全首の活きるのを見る、若し却の字無きときは殆んど詩にならずと思ふのである、

次韻黃魯直畫馬試院中作

黃魯直が畫馬試院中の作に次韻す

少年鞍馬勒遠行。少年鞍馬遠行を勒す、

臥聞齧草風雨聲。臥して聞く草を齧む風雨の聲、

見此忽思短策橫。此を見て忽ち思ふ短策の横はるを、

十年髀肉磨欲透。十年髀肉磨して透らんと欲す、

那更陪君作詩瘦。那ぞ更に君に陪して詩瘦と作らん、

【字解】【一】齧草 石林云、黃魯直嘗得句云、馬齧枯莖、喧午枕、誤驚風雨浪翻江、自以爲工、以語

舅氏無咎、舅氏不レ解、風雨翻江之意、

一日類、於逆旅、聞有聲如風浪之

歷、船者、起視、乃馬食於槽水與草、

齧齧而爲此聲、乃悟と、【二】短策

古今體詩 次韻黃魯直畫馬試院中作

不如芋魁歸飯豆。 如かず芋魁飯豆に歸するに、

門前欲嘶御史驄。 門前嘶かんと欲す御史の驄、

詔恩三日休老翁。 詔恩三日老翁を休せしむ、

羨君懷中雙橘紅。 羨む君が懷中の雙橘紅なるを、

【自注】黃有老母。

「左傳襄公十七年」に、左師爲己短策と、短策は馬撻である、「三」詩。瘦。崔浩愛吟詠、一日病起、友人戲之曰、非子病如也、乃子苦吟詩瘦也、後遂爲口實と、「四」芋魁。「漢書」に、汝南舊有鴻隙大陂、郡以爲饑、成帝時、關東數水、陂溢爲害、翟方進字子威、爲相、與御史大夫孔光、共遣掾行視、以爲決去陂水、其地肥美、省隄防費、而無水憂、遂奏罷之、及翟氏滅、鄉里歸惡言、方進請陂下良田、不得、而奏罷陂云、王莽時、常枯旱、郡中遺怨、有童謠、壞陂誰、翟子威、飯我豆食、羨芋魁、反乎覆、陂當復、誰云者、兩黃鵠とある、此の謠は食と鵠とが韻である、「五」御史驄。桓典、拜侍御史、常乘驄馬、京師畏憚、後漢書に在り、山谷試院題名記云、是日侍御史、日晏不來、蓋奏號之後、必待御史至、然後拆卷故云、「六」三日。「咸淳臨安志」に、本朝考試官、出院給歇泊假三日、周必大の詩に、會待詔恩三日沐、湖山尋勝任舟輿とある、「七」雙橘紅。「吳志」、陸績年六歲、袁術を見る、術橘を出だす、績三枚を懷にして去る、拜辭して地に墮つ、術謂つて曰く陸郎賓客と作つて橘を懷にするや、答へて曰く、歸りて母に遺らんと欲すと、術大に之を奇とす、

【題義】元祐三年正月、貢舉の事を領し、李伯時を辟して考校官と爲す、三月初に考校が既に畢り、諸廳の參會を待つ、伯時は水悴に苦み、驥馬（ころぶ馬）を作り以て悶を排せんと欲す、山谷詩先づ成る、坡公が乃ち次韻したるものである、

【詩意】少年の時は鞍馬して遠行に勸御したものである、旅寓舎に在つては馬が草を乾むに風雨の聲の如くなるを聞いた、今日は君が此の詩を見て忽ち短策の横ふを思ひ出す、十年も馬に乗らず髀肉の歎も消磨して透らんとする、那ぞや更に君に陪して詩瘦と作るをや、芋魁飯豆と謠はれた人の如くならず、門前には將に嘶かんと欲する御史の驄馬が來るに、幸に詔恩を蒙りて三日も休課を老翁に賜はる、羨む君が家には老母が在まして君が雙橘を懷中して歸るを待つや、

【餘論】八句の中、不如芋魁の十四字は意義が徹底せざるやの感がある、但し山谷の詩の體隨分と奇怪の句を吐く、坡公も應酬の禮として其の體を摸せるものによ、「漁隱叢話」に曰ふ、此格謂之之促句換韻、其法三句一換韻、三疊而止と、紀曉嵐は曰ふ、和黃即似黃體、此格本之嘉州走馬周詩、嘉州又本之嶧山碑、但碑四言耳と、平聲八庚にて三句、去聲二十六宥にて三句、平聲一東にて三句、

余與李廌方叔相知久矣。領貢舉事。而李不得第。愧甚。作詩送之。

余李廌方叔と相知たる久し、貢舉の事を領して、李第するを得ず、愧づる甚し、詩を作りて之を送る

與君相從非一日。 君と相從ふ一日にあらず、
筆勢翩翩疑可識。 筆勢翩翩可識かと疑ふ、

【字解】「筆勢」南史蕭引傳に、引善書、宣帝嘗指引署名、曰、此字筆趣翩翩とある、「三」可。

古今體詩 余與李廌方叔相知久矣領貢舉事而李不得第愧甚作詩送之

平生謾說古戰場。

平生謾に説く古戰場、

過眼終迷日五色。

過眼終に迷ふ日五色、

我慚不出君大笑。

我慚ちて出でず君大に笑ふ、

行止皆天子何責。

行止は皆天子何ぞ責めん、

青袍白紵五千人。

青袍白紵五千人、

知子無怨亦無德。

知る子が怨無く亦徳無きを、

買羊酤酒謝玉川。

羊を買ひ酒を酤うて玉川に謝す、

爲我醉倒春風前。

我が爲に醉倒す春風の前、

歸家但草凌雲賦。

家に歸り但草せよ凌雲賦を、

我相夫子非癯仙。

我夫子を相するに癯仙にあらず、

也、於陵曰、苟如此侍郎已遺賢矣、乃李程所作、亟命取李程所納、面對不差一字、主文因致謝於陵、於是請擢爲狀元とある、
【五】五千人 「山谷試院題名記」に、元祐三年正月試禮部進士四千七百三十二人、今五千人は大數を擧げて言ふ、【六】無怨 「左傳成公三年」に、知罃對楚王曰、無怨無徳、不知所報とある、【七】買羊 韓退之の詩に、買羊酤酒謝不敏とある、

【題義】 李方叔の父を李憲仲と曰ふ、坡公と同年の友である、従つて其の子の方叔とも知る、坡公方叔の才敏なるを知つてゐた、坡公が貢舉の進士の試験官となり、李は試験を受けたが、及第せずして自らの之を愧と爲し郷に歸るに依つて之を送る詩を作る、方叔が乳母は年七十、方叔が不第を聞いて門を閉ぢ、自ら縊れたのである、

【詩意】 君と相從遊すること随分久しい、君が善書にして筆勢の翩翩たるは可識かと疑はる、我輩も平生は古人の書きし古戰場を弔する文字の善惡を説く、過眼の寸間に自分の物である白きか黒きかに迷ふ、我は我が不明を慚ちて門を出ない君は大に笑うてよい、第も落も行も止も皆天である君は責むる所は無い、今次の貢舉に試せらるるの青袍白紵の士五千人に近くあつた、知る子は怨む無く唯我は徳の無きを愧づ、羊を買ひ酒を酤うて彼の不第せずして歸る玉川に謝する、今日の玉川たる君は我が爲に春風の前に醉倒し玉へ、而して家に歸れば但凌雲の雄賦を作るがよい、我は君の人相を知つて居る決して癯仙人と爲る人ではない、

【餘論】 此れ第二換韻の詩である、過眼終迷日五色、坡公に於て天下迷ふべき文は無い、李が自ら言ふべき語である、然るを李に代つて自ら言ふ、良工の苦辛を見る、李にして此の良工の苦辛を知るを得ば、登第の人となることを疑はない、嗚乎、

和宋肇遊西池次韻

宋肇が遊西池の次韻に和す

漢皇慈儉不開邊

漢皇慈儉にして邊を開かず、

【字解】 漢皇 哲宗を言ふ、

古今體詩 和宋肇遊西池次韻

尙教千艘下瀨船。 尙ほ教ふ千艘下瀨の船、
 貪看艨艟飛鬪艦。 貪看す艨艟の鬪艦を飛ばすを、
 不知鼉鳳舞鈞天。 知らず鼉鳳の鈞天に舞ふを、
 故山西望三千里。 故山西望すれば三千里、
 往事回思二十年。 往事回思すれば二十年、
 自笑區區足官府。 自ら笑ふ區區官府足る、
 不如公子散神仙。 如かず公子が散神仙、

を用ふる大なるとの二意ある、今は巨龜の意、【六】散神仙 前に辨せり、

【題義】巫山の令たる宋肇が昆明池に遊び、人の詩に次韻したるものを坡公が和したのである、

【詩意】天子は慈と儉との心を以て居らるるから塞外と戦争はしない、が平時にも遊として千艘を操る術を講ずる、人は飽くまで看る艨艟が鬪艦を飛ばすの状を、鼉鳳が鈞天に舞ふの態を知らざるや、故山を西望すれば三千里の遠き方に在る、往事を回思すれば二十年も経過して居る、自ら笑ふ區區と官府に満足するは、公子が散神仙と稱したるだにも如かずと思ふ、

僕領貢舉未出錢穆父雪中作詩見及三月二十日同遊金明池始見其詩次韻爲答

僕貢舉を領し未だ出でず、錢穆父雪中詩を作りて及ばる、三月二十日、同じく金明池に遊び、始めて其の詩を見る、次韻、答を爲す

雪知我出已全消。 雪は我出づるを知つて已に全く消し、
 花待君來未敢飄。 花は君が來るを待つて未だ敢て飄らず、
 行避門生時小飲。 行くゆく門生を避けて時に小飲し、
 忽逢騎吏有嘉招。 忽ち騎吏に逢うて嘉招有り、
 魚龍絕技來千里。 魚龍の絶技千里より來り、
 斑白遺民數四朝。 斑白の遺民四朝を數ふ、
 知有黃公酒壚在。 知る黃公酒壚の在る有るを、
 蒼顏華髮自相遙。 蒼顏華髮自から相遙なり、

朝、【六】黃公酒壚 「世説」に、王戎過黃公酒壚、謂客曰、吾與嵇叔夜、阮嗣宗、酣飲此壚、自嵇阮既亡、視此壚近、逸若山

古今體詩 僕領貢舉未出錢穆父雪中作詩始見其詩次韻爲答

【字解】【一】已全消 杜甫の詩

に、今年臘日凍全消とある、【二】

避門生 梅聖俞の詩に、已是瓊林芳

卉晚、不順游處避門生とある、

【三】騎吏 「漢韓延壽傳」に、騎吏

一人後至とある、【四】魚龍 宋葉

夢得の著なる「石林燕語」に、昆明池

水戰後不復習、而諸軍猶爲鬼神戲、

謂之旱教とある、又「蘇詩王注」に、

昆明池設水戲、作魚龍鳧雁之戲、

設機于内、皆如眞焉とある、【五】

四朝 仁宗と英宗と神宗と哲宗の四

朝、仁宗と英宗と神宗と哲宗の四

朝、仁宗と英宗と神宗と哲宗の四

朝、仁宗と英宗と神宗と哲宗の四

朝、仁宗と英宗と神宗と哲宗の四

【題義】 僕は貢舉を領してゐたので外に出でず、錢穆父は雪中の詩を作られたるも之を知らず、三月二十日に金明池に同游して始めて嚮に作られたる詩を讀み次韻して答を爲すのである、

【詩意】 雪は我が外出するを知るが故に全く消滅する、花は君が来るを待つが故に未だ敢て飛飄しない、隨行せる門生を避けしめて、時に小飲を試む、忽ち君の使者たる騎吏が來りて我を招致し玉ふ、魚龍の絶技は千里より來る如く巨景である、斑白の遺民は四朝に歴仕して今日に至る、幸に舊游せし黄公酒壚の猶ほ在る、蒼顔華髮自ら先きが短からざるを喜ぶ、

【餘論】 紀曉嵐評して曰く、清逸と、余案するに、雪知、知有、吏有、君來、技來、刊本の誤ならんと思へども、東坡に此作法ありなぞと藉口する人或は無しと斷ずるを得ない、曉嵐が此の詩を讀みしとき漫然と讀過せしものである、

書艾宣畫四首

艾宣が畫に書す 四首

竹鶴

竹鶴

此君何處不相宜。 此君何の處か相宜しからざらん、

況有能言老令威。 況んや能言の老令威有るをや、

誰識長身古君子。 誰か識らん長身の古君子、

【字解】 〔一〕 此君 晉の王徽之が何可一日無此君の語ありしより千載以て竹の異名と爲る、〔二〕 老令威 漢の丁令威は遼東人、搜神

猶將緇布緣深衣。

猶ほ緇布を將て深衣に緣とる、

後記に、丁令威、學道於靈虛山、後化鶴歸遼東、集華表柱云、有地不相宜とある、〔四〕 深衣 「禮記深衣篇第三十九」に、具父母大父母、衣純以纁、具父母、衣純以青、如孤子、衣純以素、純袂緣、純邊廣寸半とある、古代の制服、衣裳相連なり、體を被ふこと深遠なれば之を深衣と謂ふ、

【題義】 艾宣は金陵の人、建隆より熙寧間、花卉翎毛を工にし、崔白と名を齊しうす、今其の畫に讚を書せしものである、

【詩意】 此君は處を擇ばず何の處にあるも宜し、況して之に添ふるに鶴を以てするをや、誰か識るや長身古君子の狀を、白毛の深衣の緣を取るに緇黒を以て飾りたるを、

黃精鹿

黃精鹿

太華西南第幾峰。

太華西南第幾峰、

落花流水自重重。

落花流水自から重重、

幽人只取黃精去。

幽人只黃精を取つて去る、

不見春山鹿養茸。

見ず春山に鹿茸を養ふを、

【字解】 〔一〕 黃精鹿 黃精は草の名、多年生の草、莖高さ一二尺、葉は百合に似、夏初葉腋花開く、下に垂れて小鈴の如し、色澹綠、花後に黒實を結ぶ豆の如し、根は管狀を爲す、色白にして青、根莖は藥に製す、〔二〕 鹿茸 鹿の角初生は芽の如し、皮あり之を覆ふ、皮上に腫處あり、狀は葇蓋の未だ開かざるが如し、之を鹿茸と謂ふ、漢土

の特産と爲す、東三省最も著名、之を關東鹿茸と謂ふ、是も亦藥に製す、近來露人、鹿を西伯利亞の地方に養ひ、専ら茸を取る爲と稱す、黃精の異名を鹿竹と謂ふ、

【詩意】太華山の西南の第幾峯である、落花が流水に從つて飛片は自から重重である、幽人は只徒らに黃精のみを採り去つて、春山に鹿が茸を養ふことを見ない、

杏花白鷗

杏花白鷗

天公剪刻爲誰妍。

天公剪刻誰が爲に妍たる、

抱蕊游蜂自作團。

抱蕊游蜂自から團を作す、

把酒惜春都是夢。

酒を把つて春を惜む都是れ夢、

不如閒客此閒看。

如かず閒客の此に閒看するに、

孔雀を南客と名づけ、鸚鵡を離客と名づく、

【詩意】天公が花を剪刻するは誰が爲に妍を示すのであるか、抱蕊して游蜂が自から團を作すのみである、酒を把つて以て春の逝くのを惜むは都是れ夢である、閒客が此に久しく閒看するに人は及ばぬ、

【字解】(一) 白鷗 山雞に似て

羽色白し、江東には白輪と名づく、

鷗は輪の轉化、(二) 閒客 唐の李

昉國相を以て致仕し、居る所五禽を

貯へ、白鷗を閒客と名づけ、鸚鵡を

雪客と名づけ、鶴を仙客と名づけ、

蓮龜

蓮龜

半脫蓮房露壓敲。

半脫するの蓮房露は壓敲す、

綠荷深處有游龜。

綠荷深處游龜有り、

只應翡翠蘭苕上。

只應に翡翠蘭苕の上、

獨見元夫曝日時。

獨り元夫日に曝す時を見るなるべし、

身青黄色、雄は曾前と翼後に赤色の毛あり、【四】蘭苕、蘭と苕とである、杜甫の詩に、爭看翡翠蘭苕上、未掣鯨魚碧海とある、

【五】元夫、沈懷遠の「南越志」に、宋元君、夢三元元大夫神之龜とある、

【詩意】半ば脱したる蓮房は露の爲に壓敲せらる、綠荷の深處には游龜がある、只應に翡翠蘭苕の上

に、獨り元元大夫が甲を日に曝す時を見るべきである、

【餘論】四首共に後世謝瞿輩の詠物と異なりて、氣魄に富むことを喜ぶ、殊に第一首の如き、經語を運用して全く詩語と化せしめたる伎に至りては、名匠良工の苦辛を認めるのである、紀曉嵐は第一を評して太著相と謂ひ、第二を評して跳出題外一作烘染、用筆靈妙盡意、放言外一見之と謂ひ、第三を評して綰合大雅と謂ひ、第四を評して、與黃精鹿詩、同一用意、而此用直筆、其味減矣と、

【字解】(一) 蓮龜 張南世の

「炙龜論」に、龜老則神、年至八百、反

大如錢、夏則游于香荷、冬則藏于

藕節とある、(二) 蓮房 蓮實の

外包を謂ふ、(三) 翡翠 カハセミ、

水邊に棲む小鳥、翡翠は雄、翠は雌、總

次韻子由五月一日同轉對

子由が五月一日同轉對に次韻す

跪奉新書笏在腰。

跪いて新書を奉じ笏は腰に在り、

【字解】〔一〕新書 漢の賈誼著

談王正欲伴耕樵。

王を談じて正に耕樵に伴はんと欲す、

はす所、十卷原本五十八篇、今其の

晉陽豈爲一門事。

晉陽は豈一門の事の爲ならん、

三篇を佚す、多く説が本傳の文を取

宣政聊同五月朝。

宣政聊が同じ五月の朝、

る、章段を割裂し、次序を顛倒す、

【自注】貞元中詔曰。自今後五月一日。御宣政殿。與文武百僚相見。

而して加ふるに標題を以てす、原書

憂患半生聯出處。

憂患半生聯り出づる處、

所のもの、事あるときは上書す、

歸休上策早招要。

歸休上策早く招要、

【二】笏 朝見の時執る

後生可畏吾衰矣。

後生畏る可し吾は衰へぬ、

【三】談王 揚雄が「長楊賦」に士有

刀筆從來錯料堯。

刀筆從來錯つて堯を料る、

不談王道者、則樵夫笑之とある、

有宣政殿、唐以宣政爲前殿、謂之正衙とある、自注に、貞元中詔して曰く、今より後五月一日、宣政殿に御し、文武百僚と相見せんと、〔六〕出處 杜甫の詩、詩人出處同とある、〔七〕後生 論語の語、〔八〕刀筆 書吏の案牘を掌る者、之を刀筆吏と謂ふ、前漢書趙堯、爲符璽御史、趙人方與公、謂周昌曰、君之史趙堯年雖少、然奇士、君必異之、是且代君之位、昌笑曰、堯年少、刀筆吏耳、何至是乎、居頃之、昌爲趙相、既行、久之、高祖持御史大夫印弄之曰、誰可爲御史大夫者、熟視堯曰、無以易堯、遂拜焉とある、「君漢詩話」に、周昌謂趙堯爲刀筆吏、後果無能爲、所料信不錯、而云錯料堯、亦以涉譏諷倒用耳とある、

【題義】元祐三年五月一日に公は翰林學士知制誥兼侍讀の職を以て轉對條上三事を奏して大に時弊を論じたのである、時に趙挺之と云ふ者が貢擧を行ふに三經新義を以て人を取る、公は之を排斥したのである、子由が詩其の事を歌ひ、公乃ち和したものである、

【詩意】闕下に跪きて以て新書を奉じ笏は正しく腰に在る、王道を談ずる口を以て正に耕樵に伴はんとするは彼等に笑はるであらう、晉陽は豈一門の事を思ふ爲のみではない、宣政殿にては聊か五月の朝謁を同じうする、内外の憂患は半生君も僕も聯りて出づる處である、一身の歸休は上策なりと早く招要せらる、後生は畏るべきである吾は已に衰へたるを哀む、畏るべき刀筆の吏は錯つて認めたる趙挺之である、

【餘論】碧溪詩話に結句を評して倒用と謂ふ、古は趙堯も國策を錯り、今日は趙挺之も國策を錯る、趙姓は同じければ之を用ふ、半生と後生是も刊本の誤か、

韓康公挽詞三首

韓康公の挽詞 三首

故國非喬木。興王有世臣。

故國は喬木にあらず、興王世臣あり、

嗟余後死者。猶及老成人。

嗟余後に死する者、猶ほ及ぶ老成人に、

德業經文武。風流表搢紳。

德業文武を經、風流搢紳を表す、

古今體詩 次韻子由五月一日同轉對 韓康公挽詞三首

空餘行樂地。處處泣遺民。

空しく行樂の地を餘し、處處遺民を泣かしむ。

【字解】 故國。「孟子梁惠王章句下」に、孟子見齊宣王曰、所謂故國者、非謂有喬木之謂也、有二世臣之謂也、王無親臣矣、昔者所進、今日不知其亡也、也とある、【二】後死者。「論語子罕第九」に、天之將喪斯文也、後死者、不與於斯文也とある、【三】老成人。「詩」に、雖無成人、又「世說賞與上」に、吳府君、聖王之老成とある、【四】德業。「周易」に、可久則賢人之德、可大則賢人之業とある、【五】搢紳。「字書」に、插、笏帶間也とある、古の仕者は紳を垂れ、笏を搢む、故に官族を稱して搢紳と曰ふ、搢紳に作る者は誤る、

【題義】 元祐三年戊辰に國の重臣韓絳卒し、廢朝の令も下る、坡公乃ち之が挽詩を作る、

【詩意】 故國は喬木有るが爲め貴きものではない、明王を扶け興す世臣あるが爲め貴いのである、余輩は後に死する未だ年の弱き者である、幸に公が如き老成人に追及するを得た、公が德業は文武を經緯する、公が風流は搢紳を代表する、今や公や去つて空しく生前行樂の地を餘すのみ、公が德を想うて處處に遺民は泣く、

【二一】

【二二】

再世忠清德。三朝翊贊勳。

再世忠清の德、三朝翊贊の勳、

功成不歸國。就訪敢忘君。

功成つて國に歸らず、就訪敢て君を忘れんや、

舊學嚴詩律。餘威靖塞氛。

舊學詩律に嚴、餘威塞氛を靖む、

何當繼韓奕。故吏總能文。

何か當に韓奕に繼ぎ、故吏總て文を能くすべき、

【字解】 【一】再世。父の韓億と子の絳即ち康公の二代、【二】三朝。英宗と神宗と哲宗、【三】功成。「老子」に、功成名遂身退、天之道也とある、【四】不歸國。康公は相を罷めて後、潁昌に卜居す、故に云ふ、【五】就訪。「史記魯世家」に、武王封周公于曲阜、是爲魯公、周公不就封、留佐武王、武王崩、周公相成王、使其子伯禽代就封于魯、周公將歿曰、必葬我成周、以明吾不敢離成王とある、【六】韓奕。周の宣王の賢臣、尹吉甫と誠忠を齊くす、【七】故吏。「漢書尹翁歸傳」に、田延年悉召故吏五六十人ことある、【八】總能文。杜甫の詩に、將軍不好武、穉子總能文とある、

【詩意】 公が家は二代忠清の德を施し、公は三朝に歴仕して翊贊の勳績を垂れらる、而かも功成つて郷里に歸るの逸を求めない、封(訪)に就くとも敢て君國を忘るることはいはない、舊くより文を學ぶ道は詩律に於て精嚴である、武に於ては餘威猶ほ塞氛を靖むる力がある、公をして長生ならしめば正に韓奕に繼ぐの名を成して、故吏も總て皆能文のものとなるであらう、

【二一】

【二二】

西第開東閣。初筵點後塵。

西第に東閣を開き、初筵に後塵を點す、

笙歌邀白髮。燈火樂青春。

笙歌白髮を邀へ、燈火青春を樂む、

扶路三更罷。回頭一夢新。

路を扶けて三更罷み、頭を回らせば一夢新なり、

賦詩猶墨溼。把卷獨沾巾。

詩を賦して猶ほ墨溼ふ、卷を把つて獨り巾を沾す、

【字解】〔一〕西第「後漢馬融傳」に、爲寶憲作西第頌とある、〔二〕東閣「漢書宏孫宏傳」に、起徒步數年、至宰相封侯、於起是起客館、開東閣、以延賢人とある、〔三〕初筵「詩」に、賓之初筵、左右秩秩とある、〔四〕後塵「前漢書」に、扶路「晉謝安傳」に、羊曇嘗因石頭大醉、扶路唱樂、不覺至西州門とある、〔五〕墨溼「白樂天の詩」に、素屏有楮書、墨色如新乾とある、〔六〕獨活巾「杜甫の詩」に、鳴咽淚沾巾とある、〔七〕蒼溪叢話「子華（韓の字）以辰辰辰辰辰辰辰辰辰辰、故陸農師挽詩云、非關庚子曾占鵬、自是辰年並值龍とある、

【詩意】西第に於て東閣を開くは何の爲である、初筵を設けて後塵を點する爲である、而して笙歌し、白髮の老人をも邀へ、燈火は燦として青春の諸生をも樂ましむ、醉うて歸る者の爲には路を扶けて三更までに至る、今にして其の事を想へば已に一夢新なるのみである、挽詩を作りて紙に書す字が猶ほ溼うてある、詩就つて巻をばれば涙が獨り巾を沾す、

【餘論】五律として上乘の作「瀛奎律髓」に、陳后山の丞相溫公挽詞三律を採つて、此の三律を忘る、后山の三律真に刻意の作ではあるが、此の三律の上には思へず、起句對法を以て起すは、所謂整整堂堂、良に詩律に嚴なるもの、公の宗派を歸命頂禮する人は、必ず此等の法を遵奉すべきである、

次韻子由題憩寂圖後

子由が憩寂圖後に題せるに次韻す

東坡雖是湖州派。

東坡は是れ湖州派と雖も、

竹石風流各一時。

竹石風流各の一時、

前世畫師今姓李。

前世の畫師今の姓は李、

不妨還作輞川詩。

妨げず還た輞川の詩を作るを、

【題義】杜甫の詩に、松根胡僧憩寂寞とあるに依つて李伯時が其を寫して圖を作る、子由が其の畫に題して、東坡自作蒼蒼石、留取長松一待伯時、只有兩人嫌未足、兼收前世杜陵詩と書し東坡に示さる、乃ち之に次韻したものである、

【詩意】東坡が畫に於けるは湖州派に屬して居るが、湖州派でも徐州派でも、竹石に於ける風流は各の一時である、前世の畫師今の姓は李、妨げはない還つて輞川の詩を作るを、

【餘論】紀曉嵐曰く、似老筆實是率筆、老手類唐往往有此、讀者勿爲重名所壓と、紀評の如く坡公としても、一時興到の作、公の靈は甘んじて紀評を受けるであらう、

慶源宣義王丈以累舉得官爲洪雅主簿雅州戶掾遇吏民如家人人安樂之既謝事居眉之青神瑞草橋放懷自得有書來求紅帶既以遺之且作詩爲戲請黃魯直秦少游各爲

古今體詩 次韻子由題憩寂圖後 慶源宣義王丈以累舉得官爲洪雅主簿

賦一首爲老人光華

慶源宣義王丈、累擧を以て官を得、洪雅の主簿、雅州の戸掾と爲る、吏民を遇すること家人の如し、人之に安んじ樂む、既に事を謝し、眉の青神瑞草橋に居る、放懷して自得す、書の來るあり、紅帶を求む、既に以て之に遺る、且つ詩を作り戲を爲す、黄魯直、秦少游に請うて、各の爲に一首を賦せしめ、老人の光華と爲す

青衫半作霜葉枯

青衫半は霜葉と作りて枯る、

遇民如兒吏如奴

民を遇する兒の如く吏は奴の如し、

吏民莫作官長看

吏民は官長の看を作す莫し、

我是識字耕田夫

我は是れ字を識る耕田の夫、

妻啼兒號刺史怒

妻啼き兒號び刺史怒る、

時有野人來挽鬚

時に野人の來りて鬚を挽く有り、

拂衣自注下下考

衣を拂うて自ら注す下下の考、

芋魁飯豆吾豈無

芋魁飯豆吾豈無からん、

歸來瑞草橋邊路

歸來瑞草橋邊の路、

【字解】 〔一〕妻啼 韓退之の「進學解」に、冬暖而兒號寒、年豊而妻啼飢、頭童齒豁、竟死何裨とある、〔二〕挽鬚 前の送宋樞詩に辨ぜり、〔三〕拂衣 「左傳襄公二十六年」に、叔向拂衣從之とある、「後漢書楊彪傳」に、明日便當拂衣而去とある、〔四〕下下考 「唐書選舉志」に、流外官、以能功過、爲四等、清謹勳公爲上、執事無私爲中、不勤其職爲下、貪濁無狀爲下下、凡考中以上、每進一等、加祿一季、中中守

獨游還佩平生壺

獨游して還た佩ぶ平生の壺、

慈姥巖前自喚渡

慈姥巖前自ら渡を喚ぶ、

青衣江畔人爭扶

青衣江畔人爭ひ扶く、

今年蠶市數州集

今年蠶市數州より集る、

中有遺民懷袴襦

中に遺民有り袴襦を懷ふ、

邑中之黔相指似

邑中の黔相指似す、

白髯紅帶老不癯

白髯紅帶老いて癯せず、

我欲西歸卜鄰舍

我西歸して鄰舍を卜せんと欲す、

隔牆拊掌容歌呼

牆を隔て掌を拊つて歌呼を容れん、

不學山王乘駟馬

學ばず山王が駟馬に乗るを、

回頭空指黃公壚

頭を回らして空しく指す黃公の壚、

襦はハダギである、〔八〕黔 民衆を謂ふ、冠を著けず、黒巾頭を覆ふ、〔九〕卜鄰舍 「左傳昭公三年」に、晏子辭宅曰、先卜鄰矣とある、〔一〇〕山王 次公曰、山濤王戎也と、「世説」に、王戎爲尙書令、著公服、乘軺車、經黃公酒壚とある、

【題義】 王慶源と稱する丈人が累擧を以て官を得、洪雅の主簿、雅州の戸掾となる、吏民を遇すること

本祿、中下以下、每退一等、奪祿一季、中品以下、四考皆中中者、進一階、一中上考、復進一階、云云とある、又「唐陽城傳」に、爲道州刺史、觀察使、數加誚讓、上考功第、城自署曰、撫字心勞、微科政拙、考下下とある、〔五〕芋魁 前に辨ぜり、

〔六〕慈姥巖 王次公曰、慈姥巖、青衣江、皆在青神縣とある、又「吳船錄」に、發眉山六十里、至中巖、號西川林泉最佳處、相傳第五羅漢道場、又爲老慈姥龍所居、凡五里、至慈姥巖、巖前即寺、自眉至嘉州、百二十里、中巖其半途也とある、〔七〕袴襦 「禮記内則」に、衣不帛襦袴とある、袴はモモヒキ、

と家人を愛する如くす、人人皆之を樂む、既にして職を辭し、眉州の青神瑞草橋畔に居をトして、悠
悠自得する、書を坡公に寄せて以て紅帶を求む、公は之を贈り、且つ詩を作りて戲と爲し、黃山谷と
秦少游にも各の詩を作らしめ、以て老人の名譽と爲さしむ、

【詩意】青衫の學徒半は志を得ず霜葉の枯と同じく朽ちる、君は志遂げて一縣の知事と爲り縣民
を兒の如く遇し部下の吏を奴の如く愛する、是の故に吏も民も官長の看をして陽服陰罵の聲はない、
所で君は言ふ我は是れ耕田夫の字を識る人間に過ぎない、貧の爲に兒は號び妻は啼き刺史の爲には怒
らる、時には野人が來りて鬚を挽くの狀態である、衣を拂うて官を去るが一番上策と思ふ、官に居り
ても自ら下下考であるを知る、而かも芋魁と飯豆とは吾豈無からんや、官を去つて歸來する瑞草橋邊
の路を、而して獨游するに平生慣用する壺酒を佩びて往く、慈姥巖前に自ら渡を喚び、青衣江畔には
人の我を扶けて渡を争ふの人がある、今年の蠶市には數州より人が來集する、中に遺民ありて其の服
装は舊時の袴襦である、邑中の人は彼は誰であると相指似する、白髯にして紅帶老いて體軀は猶ほ癯
せない、我も西歸して君と鄰舍をトし、牆を隔て掌を拍つて歌呼せんと欲する、山濤や王戎が陽隱
陰出の愚劣を學ばずに、頭を回らして眞に黃公壚を指さんと思ふ、

【餘論】「蘇詩擇粹」に、紀曉嵐、青衫以下の數語を評して曰く、寫三出循吏形神と、青衣江畔人爭扶
の七字を評して句外句と曰ふ、坡公謂ふ、論詩必此詩、定非不知詩人、

次韻許冲元送成都高士敦鈴轄

許冲元が成都の高士敦鈴轄を送るに次韻す

移中老監本虛名。

移中老監本虛名、

懶作燕山萬里行。

燕山萬里の行を作すに懶し、

坐看飛鴻迎使節。

坐して飛鴻を見て使節を迎へ、

歸來駿馬換傾城。

歸來駿馬傾城に換ふ、

高才本不緣勳閥。

高才本勳閥に緣らず、

餘力還思治蜀兵。

餘力還た思ふ治蜀の兵、

西望雪山烽火盡。

西望雪山烽火盡く、

不妨尊酒寄平生。

妨げず尊酒平生を寄するに、

【四】勳閥「漢書車千秋傳」に、無閥功勞とある、【五】雪山杜甫の詩に、雪山斥埃無兵馬とある、【六】寄平生樂天の詩に、
勿輕一杯酒、可三以話平生とある、

【題義】許冲元が成都の高士敦の鈴轄と云ふ官を以て赴くを送る詩に次韻したものである、鈴轄と云

【字解】〔一〕移中 廐の名、漢

蘇武傳に、以父任爲郎、稍移至移中廐監とある、〔二〕懶作 公の自注に、余昔高君と同じく、使を契丹に奉ず、辭免して行かずと、續通鑑長編に、元祐元年八月、中書舍人蘇軾、皇帝の爲め遼國生辰を賀し、西京に使す、左藏庫副使、兼閤門通事舍人高士敦副之、軾辭行とある、〔三〕傾城 次公曰く、言以爲使所得之馬置妾、此の注の如くなれば太陋に似たるも換の字よりすれば、誰が讀んでも否定は出來ぬ、

四〇四
武官は宋に始めて置きし官、一州又は一路又は兩路に一員を置き、之を鈐轄都監と稱す、文官もあり

【詩意】 移中の廐監は本より虚名である、僕は燕山萬里の行を作すを懶く思ふを以て之を辭したのである、坐ながら飛鴻を見て使節を迎へ、歸り來れば駿馬を以て傾城に換へんとするのである、高才の者は本は勳閥に關係ない、餘力還た思ふ治蜀の兵を、西方の遠き雪山を望めば今や烽火は盡きぬ、妨げはない罇酒を以て平生を安寄するに、

【餘論】 此は律體であるが、同字の多きに驚くの外ない、監本、才本、不縁、不妨、燕山、雪山、且つ懶作とか換傾城とか、到底快意を以て讀むことは出来ない、

次前韻送程六表弟 前韻に次して、程六表弟を送る

君家兄弟眞連璧、君が家の兄弟眞に連璧、
門十朱輪家萬石、門は十朱輪家は萬石、
竹使猶分刺史符、竹使猶は分つ刺史の符、
上方行賜尙書寫、上方行賜す尙書の寫、
前年持節發倉廩、前年節を持して倉廩を發し、

【字解】 (一) 連璧、晉書「夏侯湛美姿容、與潘岳、友善、每行止、同與接、賓、京都謂之連璧」とある、

(二) 十朱輪、劉禹錫の詩に、一家何啻十朱輪とある、(三) 竹使、漢書文帝紀に、初與郡守、爲銅虎符、竹使符、顏師古曰、與郡守、

到處賣刀收繭栗、到處の處刀を賣つて繭栗を收む、
歸來閉口不論功、歸來口を閉ちて功を論せず、
却走渡江誰復惜、却走江を渡る誰か復た惜まん、
君才不用如澗松、君が才用ひられず澗松の如し、
我老得全猶社櫟、我老いて全きを得るは猶ほ社櫟、
青衫莫厭百僚底、青衫厭ふ莫かれ百僚の底なるを、
白首上有千薪積、白首も上に千薪の積む有り、
憶昔江湖一釣舟、憶ふ昔江湖一釣舟、
無數雲山供點筆、無數の雲山點筆に供す、
未應便障西風扇、未だ應に便ち西風を障ふる扇ならず、
只恐先移北山檝、只恐る先づ移す北山の檝、
憑君寄謝江南叟、君に憑つて寄謝す江南の叟、
念我空見長安日、念ふ我が空しく見る長安の日、
浮江泝蜀有成言、江に浮んで蜀に泝る成言有り、

爲符、謂各分其半とある、(四) 發倉廩、漢書汲黯傳に、河内失火、燒千餘家、上使黯往視之、還報曰、家人失火、屋比延燒、不足憂、臣過河内、河内貧人、傷水旱、萬餘家、或父子相食、臣謹以便宜持節、發河内倉粟、以振貧民、上賢而釋之とある、(五) 閉口、漢書丙吉傳に、絶口不道前恩、故朝廷莫能明其功とある、(六) 如澗松、晉左太冲の詩、鬱鬱澗底松、離離山上苗、以彼徑寸莖、蔭此百尺條、世胄躡高位、英俊沈下僚、地勢使之然、由來非一朝とある、(七) 社櫟、莊子人間世篇に、匠石之齊、至乎曲轅、見櫟社樹、其大蔽牛、絜之百圍、其高臨山、十仞而後有枝、其可爲舟者旁十數、觀者如市、匠伯不顧、遂行不輟とある、(八) 百僚底、杜甫

江水在此吾不食。 江水此に在り吾は食まず。

庾亮雖居外鎮、而執朝廷之權、趨向者多歸之、導內不能平、嘗遇西風塵起、舉扇自蔽、徐曰元規塵汙人、元規亮之字也、時
【一〇】 北山檄 齊書周彥倫、隱鍾山、後應詔出仕、將過北山、孔稚珪乃假山靈之意、移文以卻之、名曰北山移文、【一一】 吾不食
晉書桓玄曰、江水在此、朕不食言、後漢岑彭傳、光武曰、河水在此、吾不食言也、

【題義】 前に詩を作り其の韻を再び用ひて程六表弟を送る、程之元字は德孺である、

【詩意】 君が家即ち程氏兄弟は甲乙無き壁である、其の門には十朱輪を入れた家には萬石を貯ふ、官吏
としては竹使相互に刺史の符を分つの高官である、更に進んで尙書の寫を賜ふものであらう、前年災
厄の際は身を挺して倉廩を發するの擧を見る、到る處に刀を賣つて藟粟を收むる、歸り來りて口を閉
ぢて功を論じないのみならず、却き走りて江を渡る誰か復た惜まざらんや、君が才は到底涸底の松の
如きものではない、我（坡公）は身體のみ全きを得るも社稷と同然である、青衫の人は百僚の下底に
在るを厭うてはいかぬ、老人ですら上には上がある、舊き薪は新しき薪の下に積まるる例もある、憶
ふに昔日は江湖に一釣舟を泛べて、無數の雲山を一點筆に供したる時があつた、まだまだ扇を以て西
風の塵を障へるには至らないが、只恐る先づ北山の移文を贈られて我の歸らざるを罵らるるを、君を
送る序を以て依頼するが江南の叟に傳へて呉れ玉へ、東坡は空しく長安の日を見て居るが、江に浮ん
で蜀に沂る志は有ると言うた、江水が此に在つて我が言うた事を證明して居る、吾は必ず食言は
しない。

【餘論】 紀曉嵐は起句を評して、出得突兀と評したるのみで、他に片言もない、紀は定めし尋常一様
の詩と見たのであらう、要するに坡公の詩は、諸子百家胷中に充滿して、言はんと欲する時は史漢莊
老口を衝いて出づ、是の故に風韻は少く、格力を以て其の宗を建立せるものである、坡詩を讀む者、
意を茲に置くべきである、

虚飄飄

虚しく飄飄

虚飄飄

虚しく飄飄

畫檐蛛結網。

畫檐蛛網を結び、

銀漢鵲成橋。

銀漢鵲橋を成す、

塵漬雨桐葉。

塵を漬して雨は桐葉、

霜飛風柳條。

霜は飛んで風は柳條、

露凝殘點見紅日。

露は殘點を凝らして紅日を見、

星曳餘光橫碧霄。

星は餘光を曳いて碧霄に横はる、

虚飄飄

虚しく飄飄

【字解】 【一】 鵲成橋 「淮南子」

に、烏鵲填河成橋、而渡織女」と
ある、【二】 碧霄 太白の詩に、登
嶺宴碧霄」とある、

比浮名利猶堅牢。 浮名利に比すれば猶ほ堅牢、

【題義】 虚飄飄は樂府の遺響である、黃山谷が虚飄飄、花飛不到地、虹起漫成橋、入夢雲千疊、游空絲萬條、蜃樓百尺橫滄海、雁字一行書絳霄、虚飄飄、比人身世猶堅牢、又秦少游の詩に、虚飄飄、風寒吹絮浪、春水暖冰橋、勢緩靈垂線、聲乾葉下條、雨中漚點隨流水、風裏彩雲橫碧霄、虚飄飄、比時富貴猶堅牢と、坡公と三人が唱和したものである、

【詩意】 虚しく飄飄として畫檐には蜘蛛が網を結んで居る、天を望めば銀漢には鵲が橋を成して居る、塵を漬して雨は桐葉を沾すを見、霜は飛んで風は柳條を動かす、露は殘點を凝らして紅日を見る、星は猶ほ餘光を曳いて碧霄に横はるを見る、皆是れ飄飄として或は一朝或は一夕のものであるが、猶ほ人間の浮名利の飄飄たるに較ぶれば堅牢のものである、

【餘論】 此等の文字は一種の游戲として讀むべきも、詩としての本色では無い、

題李伯時淵明東籬圖

李伯時が淵明東籬の圖に題す

彼哉嵇阮曹終以明白膏

彼なる哉嵇阮の曹、終に明を以て自ら膏す、

靖節固昭曠歸來侶蓬蒿

靖節固より昭曠、歸來して蓬蒿を侶とす、

新霜著疎柳大風起江濤

新霜疎柳に著き、大風江濤を起す、

東籬理黃菊意不在芳醪

東籬に黃菊を理す、意芳醪に在らず、

白衣挈壺至徑醉還游遨

白衣壺を挈げて至る、徑ちに酔うて還た游遨す、

悠然見南山意與秋氣高

悠然として南山を見る、意秋氣と高し、

【字解】 一、明白膏、漢書兩翼傳に、燕以香自燒、膏以明自銷とある、二、靖節、淵明の諡號である、三、芳醪、袁嶠之の詩に、漱水流芳醪とある、

【題義】 李伯時が畫ける陶淵明が東籬の下に菊を看る圖に題せる詩である、

【詩意】 彼は胡爲る者なる哉嵇康や阮籍の曹、終に明を以て自ら膏するに至る、陶淵明は固より彼等嵇阮の類と異なり昭曠なる人である、官を罷めてより歸來蓬蒿を侶として遊ぶ、新霜は已に秋の氣を表はし疎柳に著く、大風は江濤を捲き起して盛んである、(宋の兵が晉の兵と争ふことを言ふ)、靖節は獨り東籬の下に黃菊を采る、其の意は別に芳醪を求むるのではない、所が白衣を著けた人が酒壺を攜へて至る、之を飲んで徑ちに酔ひ還た游遨する、游遨し終れば悠然として南山を望見する、其の意氣は秋氣と同じく高い、

【餘論】 次の詩と此の詩との二首を紀曉嵐評して曰く、第二句不妄、況阮亦未嘗嬰疾と、又曰く、二詩非唯不似東坡、并不似能詩者所爲、後來書畫買人、僞作伯時之畫、因僞作東坡之詩、編詩者不能辨而誤收耳、大に當る、大に當る、余も必ず東坡の作にあらずと思ふ、

次韻黃魯直書伯時畫王摩詰

黃魯直が書せる伯時の畫王摩詰に次韻す

前身陶彭澤。後身韋蘇州。

前身は陶彭澤、後身は韋蘇州、

欲覓王右丞。還向五字求。

王右丞を覓めんと欲し、還た五字に向つて求む、

詩人與畫手。蘭菊芳春秋。

詩人と畫手と、蘭菊春秋芳ばし、

又恐兩皆是。分身來入流。

又恐る兩ながら皆是れ、分身來りて入流するを、

【字解】

【一】彭澤 陶淵明は彭澤令と爲る、【二】韋蘇州 韋應物は河南の人、性高潔、五言の詩に巧、貞元中蘇州刺史と爲る、

【三】王右丞 王維字は摩詰、官は尙書右丞と爲る、【四】入流 梵語の聲路多阿半那の譯語である、預流、又は入流と譯して小乘四果の第一果である、

【題義】

黃魯直が題書して李伯時が畫ける王摩詰の像に次韻したものである、

【詩意】

王摩詰の前身は陶彭澤である、王摩詰の後身は韋蘇州である、而して王右丞の面目を覓めんと欲する者は、還た五字の詩に向つて求むるがよい、詩人の詩と畫人の手と、彼は蘭此は菊と芳を春

秋に争ふ、又恐らくは詩人も畫人も兩ながら是れ、各の分身し來りて入流の位に入るならん、

【餘論】

紀曉嵐は又恐の十字を評して不成語と謂ふ、紀は入流の語が何事であるかを知らざるが故に此の語を吐く、完全に語を成して居る、然れども多く人の解せざる語を以て詩に入る、不成語と謂はるるも、已むを得ざるのである、況して小乗の位にて、大乘の位にあらざるの語、陶王韋李の四

家も甘んじて受け無いのである、

和王晉卿題李伯時畫馬

王晉卿が李伯時の畫馬に題せるを和す

督郵有良馬。不爲君所奇。

督郵良馬あり、君の奇とする所とならず、

顧收紙上影。駿骨何由歸。

紙上の影を顧收して、駿骨何に由つて歸る、

一朝見縈策。蟻封驚肉飛。

一朝縈策を見、蟻封肉の飛ぶに驚く、

豈唯馬不遇。人已半生癡。

豈唯馬不遇のみならん、人已に半生癡なり、

【字解】

【一】駿骨 王註師曰、取燕昭王以千金市駿骨、故駿馬不遠千里而至と、又「會稽典錄」に、孔融與曹公書曰、燕

君市駿馬之骨、非欲以騁道里、乃當以招絕足也とある、【二】蟻封 蟻冢である、易傳に、蟻封盤馬とある、【三】肉飛 「吳

越春秋」に、慶忌之勇、骨騰肉飛とある、【四】半生癡 「晉書」に、王湛字處冲、少有識度、少言語、初有隱德、人莫能知、兄弟

宗族、皆以爲癡、兄子濟輕之、濟嘗詣湛、見牀頭周易、請言之、湛因剖析玄理、微妙有奇趣、濟乃嘆曰、家有名士、三十年而不

知、濟之罪也、既而辭去、湛送至門、濟有從馬、絕難乘、濟問湛曰、叔頗好騎不、湛曰亦好之、因騎此馬、姿容既妙、迴策如

縈、善騎者、無以過之、又濟所乘馬、甚愛之、湛曰此馬雖快力薄、不堪苦行、近見督郵馬當勝、但勿秣不至耳、濟試養之、

當與己馬等、湛又曰、此馬任重、方知之、平路無以別也、於是當蟻封內試之、濟馬果踴、而督郵馬如常、濟益嘆異、還白其父曰、濟始得一叔、乃濟以上人也、武帝亦以湛爲癡、每見濟調之曰、卿家癡叔死未、濟常無以答、及是帝又問如初、濟曰、臣叔不癡、因稱其美とある、王渾と王濟を以て王晉卿に比して之に戲るのである、又「晉魏詠之傳」に、生而兔缺、醫視之曰、可割而補之、須百日不笑語、詠之曰、半生不語而有半生、亦當療之、況百日邪とある、

【詩意】督郵が乗る所の馬は良馬と稱せらるるも、君は一向に之を奇としない、所が顧みて紙上に收むる天馬の影、此の如きの駿骨は何に由つて歸るぞや、一朝にして繁策を見るときは、蟻封に當つて肉飛ぶの雄姿に驚くであらう、豈唯馬のみが不遇ではない、人が賢者でありながら半生も癡と稱せられて過ぎたではないか、

【餘論】紀曉嵐曰く、肉飛二字、雖出吳越春秋、然用來不雅、結尤不成語、坡公知るあらば、泉下に苦笑するであらう、

送錢穆父出守越州二首

錢穆父が出でて越州に守たるを送る 二首

簿書常苦百憂集

簿書常に苦む百憂の集まるに、

【字解】簿書、錢穀出納を記する簿籍である、「周禮」に、主計會之簿書とある、「三」百憂集、王筠が「行路難」に、百憂俱集斷人腸とある、「四」廣漢、「漢書趙廣義略同じ、

尊酒今應一笑開

尊酒今應に一笑開くべし、

記する簿籍である、「周禮」に、主計會之簿書とある、「三」百憂集、王筠が「行路難」に、百憂俱集斷人腸とある、「四」廣漢、「漢書趙廣義略同じ、

京兆從教思廣漢

京兆從教廣漢を思ふを、

【字解】簿書、錢穀出納を記する簿籍である、「周禮」に、主計會之簿書とある、「三」百憂集、王筠が「行路難」に、百憂俱集斷人腸とある、「四」廣漢、「漢書趙廣義略同じ、

會稽聊喜得方回

會稽聊か喜ぶ方回を得たるを、

【字解】簿書、錢穀出納を記する簿籍である、「周禮」に、主計會之簿書とある、「三」百憂集、王筠が「行路難」に、百憂俱集斷人腸とある、「四」廣漢、「漢書趙廣義略同じ、

漢傳に、廣漢以蕭望之勅下廷尉獄吏、民守關號泣者數萬人、或願代趙京兆死、使不得牧養小民、廣漢竟坐腰斬、廣漢爲京兆尹、廉明威制豪強、小民得職、百姓追思歌之至今とある、「五」方回、古の仙人、堯の時聘して閩士と爲す、雲母粉を鍊食す、夏啓の時宣士と爲る、人の劫する所と爲り、之を室中に閉づ、求道に従ひ、回化して去るを得、更に方回を以て、其の戸を印封す、時人言ふ、回が一泥丸を得て、門戸を泥塗にす、終に開くべからずと、今以て穆父に譬ふ、「晉書鄭超傳」に、楮在北府、徐州人多勁悍、溫恆云、

京口酒可飲、兵可御、深不欲惜居之、而惜暗於事機、遺賤詣溫、欲共榮王室、超取視寸毀裂、乃更作殘自陳、老病甚不堪人間、乞開地自養、溫得殘大喜、即轉楮爲會稽太守とある、

【詩意】簿書を檢閲する役吏は常に百憂集まるに耐へぬ、今は應に尊酒を悠悠と傾けて一笑開くべきである、京兆の人は廣漢を失うて哀しく思ふがそれは致し方がない、その代り會稽の民衆は方回の様なる人を得て喜ぶであらう、

【一】

【二】

若耶溪水雲門寺

若耶溪水雲門寺、

【字解】若耶溪、地志に、若耶溪在會稽縣東南二十八里とある、「三」雲門寺、晉の中書令王子敬が所居、淳化五年、改めて淳化寺と名づく、「三」賀監、賀知章、知

賀監荷花空自開

賀監荷花空しく自から開く、

【字解】若耶溪、地志に、若耶溪在會稽縣東南二十八里とある、「三」雲門寺、晉の中書令王子敬が所居、淳化五年、改めて淳化寺と名づく、「三」賀監、賀知章、知

我恨今猶在泥滓

我恨む今猶ほ泥滓に在るを、

【字解】若耶溪、地志に、若耶溪在會稽縣東南二十八里とある、「三」雲門寺、晉の中書令王子敬が所居、淳化五年、改めて淳化寺と名づく、「三」賀監、賀知章、知

勸君莫棹酒船回

君に勸む酒船を棹して回ること莫かれ、

【字解】若耶溪、地志に、若耶溪在會稽縣東南二十八里とある、「三」雲門寺、晉の中書令王子敬が所居、淳化五年、改めて淳化寺と名づく、「三」賀監、賀知章、知

荷花、李太白の對酒憶賀監詩に、勸賜鏡湖水、爲君臺沼菜、人亡餘故宅、空有荷花生、念此杳如夢、悽然傷我情とある、「五」在泥滓、杜甫の山水障歌に、若邪溪雲門寺、吾獨胡爲在泥滓、青鞋布襪從此起とある、

【詩意】若耶溪中の雲門寺は遊ぶべき寺である、唐の賀監が植ゑし荷花が今日も花は空しく開きてある、我は恨む今日も猶ほ歸老せずして泥滓の中に奔走する、君に勸むるは折角悠悠と遊べる酒船を棹して都へ再び回り玉ふな、

【餘論】二絶坡公の詩としては温藉に屬するものである、

戲書李伯時畫御馬好頭赤

戲れに李伯時が畫ける御馬好頭赤に書す

山西戰馬飢無肉

山西の戰馬は飢えて肉無し、

夜嚼長稽如嚼竹

夜長稽を嚼んで竹を嚼むが如し、

蹄間三丈是徐行

蹄間三丈是れ徐行す、

不信天山有坑谷

信せず天山に坑谷有るを、

豈如廐馬好頭赤

豈如かん廐馬の好頭赤、

立仗歸來臥斜日

立仗歸來して斜日に臥す、

莫教優孟卜葬地

優孟をして葬地を卜し、

厚衣薪樵入銅歷

厚衣薪樵銅歷に入らしむる莫かれ、

【字解】(一) 長稽 「説文」に、稽

禾稟とある、外皮を取りしヲラを謂

ふ、(二) 蹄間三丈 「史記」に、張儀

説韓王曰、秦馬之良、戎兵之衆、探

前跡後、蹶開三尋騰者、不可勝

數とある、(三) 天山 一名は雪

山の境内より起り、西は葱嶺の烏赤別

里山に接し、延いて以て支那と俄羅

斯の界に至る、(四) 好頭赤 秦馬

の名、(五) 立仗 馬の名、「李林甫

傳」に、居相位凡十九年、因寵市

權、蔽欺天子耳目、諫官無敢言者、補闕杜璉、再上書言政事、斥爲下邳令、因以語動其餘曰、君等獨不見立仗馬乎、終日無聲

而飲三品芻豆、一鳴則黜之矣とある、(六) 優孟 「史記滑稽傳」に、優孟者、故楚之樂人也、長八尺、多辯、常以談笑諷諫、楚莊王

之時、有所愛馬、衣以文繡、置之華屋之下、席以露牀、啗以棗脯、馬病肥死、使羣臣喪之、欲以棺槨大夫禮葬之、左右爭

之、以爲不可、王下令曰、有敢以馬諫者、罪至死、優孟聞之、入殿門、仰天大哭、王驚而問其故、優孟曰、馬者王之所愛也、

以楚國堂堂之大、何求不得、而以大夫禮葬之、請以人君禮葬之、王曰何如、對曰、臣請以彫玉爲棺、文梓爲槨、椁風豫章爲題、發甲卒、爲穿塋、老弱負土、齊趙陪位於前、韓魏翼衛其後、廟食太牢、奉以萬戶之邑、諸侯聞之、皆知大王賤人而貴馬也、王曰寡人之過、一至此乎、爲之奈何、優孟曰、請爲大王六畜葬之、以壙竈爲槨、銅歷爲棺とある、(七) 樵 詩に、薪之樵之とある、薪を積んで燒く、祭天の式である、(八) 銅歷 銅にて製れる釜蓋である、

【題義】戲れに李伯時が畫く所の御馬好頭赤の圖に題せるものである、

【詩意】山西に赴いて征に従ふ戰馬は飢えて肉無きまで瘦せて居る、食料として嚼むところの長稽は竹を嚼むが如くである、蹄間三丈も是れ徐行して、信せず天山の險處に坑谷の險あることを、豈如かん廐に飼養せらるる好頭赤に、立仗も歸り來りて悠悠と斜日の下に臥して居る、優孟の如き人が今日に無しと限らない、其の優孟をして葬地を卜せしめて、厚衣薪樵の上銅歷に入つて葬らしむる愚事を爲してはいかぬ、

【餘論】戰馬を以て廐馬の對照として作れるが主旨である、戰馬の悲惨なる圖を畫くに於てはまたしもであるが、廐馬の如き天子の愛馬を畫きしとして、深く賞する價は無い、結局人を賤み、馬を貴ぶの愚となるを嫌ふ、戲書と題する所以である、紀曉嵐曰く、此亦不佳、然是東坡筆墨、益知前三詩之僞と、又曰く、寓刺太直、末二句尤爲激訐、均於三詩品有乖と、坡公の詩は往往詩品を卑うするものがある、是は宋人の弊、獨り坡公のみではない、

古今體詩 戲書李伯時畫御馬好頭赤

送程七表弟知泗州

程七表弟が泗州に知たるを送る

江湖不在眼。塵土坐滿顔。

江湖眼に在らず、塵土坐して顔に滿つ、

繫舟清洛尾。初見淮南山。

舟を繫ぐ清洛の尾、初めて見る淮南の山、

淮山相媚好。曉鏡開煙鬢。

淮山相媚好、曉鏡煙鬢開く、

持此娛使君。一笑簿領間。

此を持つて使君を娛ましむ、一笑す簿領の間、

使君如天馬。朝燕暮荆蠻。

使君は天馬の如く、朝には燕暮には荆蠻、

時無王良手。空老十二閑。

時に王良の手なく、空しく老ゆ十二閑、

聊當出毫末。化服狡與頑。

聊か當に毫末を出づべし、化服す狡と頑と、

勿謂無人知。古佛臨清灣。

謂ふこと勿かれ人の知る無しと、古佛清灣に臨む、

赤子視萬類。流萍閱人寰。

赤子のごとく萬類を視る、流萍人寰を閱す、

但使可此人。餘事眞茅菅。

但此の人に可ならしめば、餘事は眞に茅菅、

【字解】

〔一〕清洛 王註厚曰、汴渠舊引黃河、元豐中、始以洛水易之、謂之清洛、或謂之新洛とある、〔二〕淮南山 泗州に在る山、「茗溪漁隱叢話」に、淮北之地平夷、自京師、至汴口、竝無山、唯隔淮南方有南山、米元章謂爲第一山とある、〔三〕煙鬢 前に辨せり、〔四〕持此 「三國志魏鍾會傳」に、持此將安歸乎とある、〔五〕簿領 魏の劉公幹の詩に、沈迷簿領書とある、

〔六〕燕 南燕・北燕・前燕・後燕とあるが、單に燕と稱するは今の直隸省である、〔七〕荆蠻 南夷を稱する語、〔八〕十二閑 「周禮」校人掌王馬之政、天子十有二閑、馬六種、邦國六閑、馬四種、家四閑、馬二種とある、「詩秦風」に、四馬既閑とある、閑は馬屋の柱柝である、〔九〕毫末 「老子」に、合抱之木、生於毫末とある、「後漢楊震傳」に、天知、地知、人知、我知、何謂無知とある、

〔一〇〕古佛 韓退之が送僧澄觀詩に、僧伽後出淮泗上、勢到衆佛尤恢奇、清淮無波平如席、欄柱傾扶半天赤、火燒水轉掃地空、突兀便高三百尺、僧問經營本何人、道人澄觀名籍籍とある、〔一一〕可此人 「晉桓溫傳」に、嘗行經王敦墓、曰、可人可人と、〔一二〕餘事 王註師曰、泗州大聖塔、臨泗水、舟人往來、與居人一祈禱立應、詩云、郡政能可此人、則餘事等茅菅とある、

【題義】程七表弟が泗州に知事と爲つて赴くを送る詩である、泗州は今日は泗縣と名づく、安徽省淮泗道である、

【詩意】京師に在るときは江湖の山水が一向眼中にはない、但塵土が坐ながら顔面に滿つるのみである、所が今茲赴任せらるる處は舟を清洛水の終尾に繋ぎ、初めて淮南山が眼に入るのである、淮南山の清秀は相媚好にて、曉旦の泗水は鏡の如く清く山色の煙鬢を開き映す、一笑して簿領を檢閲する間に、使君は天馬の如く迅速に走り去りて、朝には燕に赴き暮には荆蠻に向ふ、世に王良があれば良馬を良馬として用ふるが、王良が無きときは良馬も空しく十二閑中に老いるのである、内閣大臣の識量ある君も、一縣の知事たるは君を認むる王良が無き爲である、君は聊かでも當に毫末を出すべきである、以て狡徒でも頑夫でも皆化服せしめ、其の功を人の知るなしと謂うてはならぬ、天と地と我と彼とは必ず知る、君が赴任する泗州には大なる佛像が清灣に臨んで立つて居る、其の慈顔は赤子の如くに萬類を平等に視る、又人寰が渾て流萍の如くなるを閱するごときである、我が言ふ所但此の人に

可ならしめば、餘事は眞に茅管に等しきものと思ふ、

【餘論】紀曉嵐の評に、忽從泗州一生情、善於搗虛、然是借發實理、不レ比小巧弄筆とある、

送曹輔赴閩漕

曹輔が閩漕に赴くを送る

曹子本儒俠、筆勢翻濤瀾。

曹子本儒俠、筆勢濤瀾を翻す、

往來戎馬間、邊風裂儒冠。

戎馬の間に往來し、邊風儒冠を裂く、

詩成橫槩裏、楯墨何曾乾。

詩は成る横槩の裏、楯墨何ぞ曾て乾かん、

一日事遠遊、紅塵隔嚴灘。

一日遠遊を事とす、紅塵嚴灘を隔つ、

平生羊炙口、竝海搜鹽酸。

平生羊炙の口、竝海鹽酸を搜る、

一從荔枝食、豈念苜蓿槃。

一たび荔枝を食ひしより、豈念はんや苜蓿の槃、

我亦江海人、市朝非所安。

我も亦江海の人、市朝は安んずる所にあらず、

常恐青霞志、坐隨白髮闌。

常に恐る青霞の志、坐して白髮の闌に隨ふ、

淵明賦歸去、談笑便解官。

淵明歸去を賦し、談笑便ち官を解く、

我今何爲者、索身良獨難。

我今何爲る者ぞ、索身良に獨り難し、

憑君問清淮、秋水今幾竿。

君は憑つて清淮を問ふ、秋水今幾竿ぞ、

我舟何時發、霜露日已寒。

我が舟何時にか發せん、霜露日に已に寒し、

【字解】(一) 儒俠、韓非子に、國平則養儒俠とある、弱者を扶け、強者を挫くを俠と曰ふ、(二) 筆勢、南史范曄傳に、筆勢縱放、實天下之奇作とある、(三) 戎馬間、杜甫の詩に、何知戎馬間、復接塵事屏とある、(四) 儒冠、杜甫の詩に、飄蕭覺素髮、涼欲衝儒冠とある、(五) 楯墨、北史に、荀濟潁川人、與梁武帝、爲布衣交、而負氣不服、謂人曰、會楯鼻上、磨墨作檄文とある、(六) 嚴灘、馮應榴曰、嚴灘當即指七里灘、又建溪亦多灘、不必專屬一處也、灘は水淺く石多くして、舟行の自由ならざる處、(七) 竝海、史記秦始皇紀に、竝海南至會稽とある、(八) 荔枝、蔡襄が「荔枝譜」に、閩中唯四郡有之、福州最多、而興化軍、尤爲奇特、漳泉時亦知名、又荔枝食之、有益于人とある、(九) 江海人、晉の謝靈運の詩に、韓亡子房奮、秦帝魯連恥、本自江海人、忠義感君子とある、杜甫の詩、終爲江海人とある、(一〇) 青霞志、南朝の江淹が「恨賦」に、鬱青霞之意、入修夜之不暘とある、青雲と同一義、(一一) 索身、白樂天の詩に、不病何由索得身とある、索居は寂寞を謂ふか、聊か異なる、自由にならざる身を謂ふ、

【題義】曹輔字は子方が元祐三年九月に福建の轉運判官と爲つて赴任するを送る詩である、今の福建省一帶は古の七閩の地である、

【詩意】曹子は本來儒者にして俠者である、筆勢が濤瀾を翻す如きを見て其の人の氣象が判る、戎馬の間に往來馳驅して、邊土の寒風が儒冠を裂かんと欲する概がある、詩は多く戎馬往來する間に成つて、楯上の墨が乾く時は無い、一旦國として最南端なる閩漕に赴きて、紅塵は嚴灘を隔つるに至る、平生羊炙に慣れたる口、今後は南海の鹽酸を喫することとなる、一たび荔枝の甘味を知りしもの

は、豈念はん馬の喜ぶ苜蓿の漿を、我も亦志は江海に在る人である、市朝の狭き處は安んずる所でない、而かも常に恐る青霞の志は、遂に遂げる能はずして愚圖愚圖して白髮の鬬たるに至る、陶淵明は歸去來辭を賦して、談笑の間に市朝を去つて江海の人と成る、我は要するに何を爲す者ぞや、自ら索身して自ら難儀する、君に依憑して清淮の狀を問ふ、秋水は今幾竿を投ずる人あるや、我が舟は何の時に發することである、考慮中に霜露は日日に逼りて寒くなる、

【餘論】坡詩としては倍屈の句少く、一氣貫通せる詩である、紀は竝海句費解、亦不成語と曰ふ、然らば紀の自解を求めたく思ふも、他人の解を非として、紀は自ら解を爲ない、紀一生の學皆此の筆法である、

次韻王郎子立風雨有感

王郎子立が風雨有感に次韻す

百年一俯仰、寒暑相主客。
 百年一俯仰、寒暑は相主客、
 稍增裘褐氣、已覺團扇厄。
 稍裘褐の氣を増し、已に團扇の厄を覺ゆ、
 不煩計榮辱、此喪彼有獲。
 煩はさず榮辱を計るを、此に喪へば彼に獲ることあり、
 我琴終不敗、無攫亦無醜。
 我琴は終に敗れず、攫も無く亦醜も無し、
 後生不自牧、呻吟空挾策。
 後生自ら牧せず、呻吟して空しく策を挾む、

擾苗不待長、賣菜苦求益。

苗を擾いて長するを待たず、菜を賣つて苦に益を求む、

此郎獨靜退、門外無行迹。

此の郎獨り靜退、門外行迹なし、

但恐陶淵明、每爲飢所迫。

但恐る陶淵明、毎に飢の迫る所と爲るを、

凄風弄衣結、小雪穿門席。

凄風衣結を弄し、小雪門席を穿つ、

願君付一笑、造物亦戲劇。

願はくは君一笑に付せよ、造物も亦戲劇、

朝來賦雲夢、筆落風雨疾。

朝來雲夢を賦す、筆落ちて風雨疾し、

爲君裁春衫、高會開桂籍。

君が爲に春衫を裁し、高會桂籍を開かん、

【字解】

〔一〕一俯仰 「莊子在宥篇」に、其疾俯仰之間、再拊四海之外とある、〔二〕裘褐 「後漢書梁鴻傳」に、吾欲下裘褐之人、可與俱隱深山者爾とある、〔三〕團扇厄 漢の班婕妤が失寵して秋扇詩を作る、〔四〕無攫 琴絃をつかむを攫と謂ふ、〔五〕無醜 美酒を醜と謂ふ、〔六〕不自牧 「周易」に、謙謙君子、卑以自牧也とある、〔七〕挾策 挾書と同じ、「莊子駢拇篇」に、臧與穀二人、相與牧羊、而俱亡其羊、臧則挾策讀書とある、〔八〕擾苗 「孟子」に、宋人有閔其苗之不長、而擾之者、芒芒然歸とある、〔九〕賣菜 「後漢書嚴光傳注」に、侯霸使西、曹蜀侯子道奉書嚴光、子道求報、光曰我手不能書、乃口授之、使者嫌少、可更足、光曰買菜乎求益也、〔一〇〕此郎 「唐房元齡傳」に、高孝基曰、僕觀人多矣、未有如此郎者とある、〔一一〕靜退 「晉謝安傳」に、妻見安靜退、乃曰丈夫不如此也とある、〔一二〕飢所迫 「淵明貧士詩」に、量力守故轍、豈不寒與飢とある、〔一三〕門席 「漢陳平傳」に、家貧負郭窮巷、以席爲門、然多長者車轍とある、〔一四〕筆落 杜甫の詩に、筆落驚風雨、詩成泣鬼神とある、〔一五〕裁春衫 北周庾信の賦に、青衫急手裁とある、〔一六〕桂籍 科第の名籍を謂ふ、

【題義】 王郎子立は坡公が弟子由の婿である、年三十五を以て卒するが、公は子立が得喪喜怒を色に示さざるを愛して之が教導を善くしたのである、此の詩は子立が風雨を聞いて感じたるを和したものである、

【詩意】 百年の過ぐるは一俯仰の間である、忽ち寒忽ち暑主と爲り客となる間である、稍や裘褐の氣を増すかと思へば、忽ちに團扇は無用と爲る秋が来る、榮であり辱であると計慮する煩はいらぬ、此に喪へば彼に獲ると聊か物が替るのみ、我が琴は終に未だ敗れてはをらぬが、攫援することも無い又飲むべき醒も無い、所で後生は自ら修牧も爲さずに、空しく呻吟し空しく挾策するのみ、苗の長ずるを待つ忍耐は無く之を握る、然るに眞の賢者は榮を賣つて自ら益を求むるのである、此の郎は何ぞや獨り靜退して、交游者も少ければ門外に行迹も無い、但恐る陶淵明たることは人品は高きに相違なきも、毎毎飢の迫る所と爲るを哀む、凄風は衣結を吹弄するのみでない、小雪は門席を穿ちて飛來する慘状である、願はくは君は總て一笑に付し玉へ、造物者は要するに戯劇をするのである、我は朝來雲夢を賦して、筆落ちて風雨の疾と同じ、請ふ君が爲に春衫を裁して、桂籍を開くの高會を爲さんと思ふのである、

【餘論】 紀曰く、有「吃力之態」と、謂ふに子立は短命にして死す、百年一俯仰の語は子立の爲め識を爲したものの如くである、哀しい哉、

次韻黃魯直嘲小德魯直子其母微故其詩云解著潛夫論不妨無外家

黃魯直が小德を嘲るに次韻す、小德は魯直の子、其母微なり、故に其の詩に云ふ、
潛夫論を著すを解す、外家無きを妨げず、

進饌客爭起小兒那可涯 饌を進めて客争ひ起つ、小兒那ぞ涯る可けん、

莫欺東方星三五自横斜 東方の星を欺く莫かれ、三五自から横斜、

名駒已汗血老蚌空泥沙 名駒已に汗血、老蚌空しく泥沙、

但使伯仁長還興絡秀家 但伯仁をして長せしめば、還た絡秀の家を興さん、

【字解】 一、進饌、「晉書」に、裴秀字季彦、少好學、有風操、叔父徽有盛名、賓客詣徽者、出則過秀、然秀母賤、嫡母宣氏不之禮、嘗使進饌於客、見者皆爲之起とある、二、可涯、張謂詩に、彼行安可涯とある、三、三五、「詩經召南」に、嘒彼小星、三五在東、召南の意は夫人が妬忌の行無く、惠は賤妾に及んで、君に進御せしむ、其の命を知つて、貴賤皆能く其の心を盡くすのである、四、老蚌、ドブカヒ、老いたる蚌が明珠を出すに喩ふ、「北齊書陸印傳」に、邢劭謂其父曰、吾以卿老蚌遂出明珠、子が親より優れたるを謂ふ、五、絡秀、「晉列女傳」に、周顛母李絡秀、少時在室、顛父浚、爲安東將軍、嘗出獵、遇雨止絡秀家、會其父兄不在、絡秀聞浚至、與一婢、於內宰猪羊、具數十人之饌、甚精辨、而不聞人聲、浚因求爲妾、父兄不許、絡秀曰、門戶疹悴、何惜一女、若連姻貴族、將來庶有大益矣、父兄許之、遂生顛及嵩謨、而顛等既長、絡秀謂之曰、我屈節爲汝家、作妾門戶計耳、汝不與我家、爲親親者、吾亦何惜餘年、顛等從命、由是李氏遂得爲方雅之族、顛字伯仁、

古今體詩 次韻黃魯直嘲小德魯直子其母微故其詩云解著潛夫論不妨無外家

【題義】 黃魯直が小徳を嘲つて作る詩に次韻したるものである、小徳は魯直が庶子である所より、父の魯直が詩に云ふ、潜夫論を著すを解す、外家無きを妨げずと、魯直が原作は、中年擧三兒子、漫種老生涯、學レ語春蟲聒、塗窗秋雁斜、欲嗔三王母惜、稍慧女兒誇、解著潜夫論、不妨無三外家、

【詩意】 饌を進むる其の人でなければ客が争うて起つ、小兒には那ぞ其の涯があらうぞ、東方の星を欺くこと莫かれ、三星も四星も自から横斜である、生める所の名駒は已に汗血馬である、老蚌は空しく泥沙に委ぬる、但伯仁をして能く生長せしむれば、伯仁は堂堂と絡秀の家を興す人である、

【餘論】 紀曉嵐曰く、奇節瓌然、語則少味、但覺三章咒氣二耳と、余は考ふ自分の子を嘲る詩も、餘りに感心はせぬが、次韻するに至りては尙更に感心はできぬ、

書黃庭内景經尾

黃庭内景經尾に書す

余既書黃庭内景經以贈葆光道師而龍眠居士復爲作經相其前而畫余二人像其後筆勢雋妙遂爲希世之寶嗟歎不足故復贊之曰。

【訓讀】 余既に黃庭内景經を書し、以て葆光道師に贈る、而して龍眠居士、復た爲に經相を其前に作り、而して余二人の像を其の後に畫く、筆勢雋妙、遂に希世の寶と爲る、嗟歎して足らず、故に復た之を贊して曰く、

太上虚皇出靈篇

太上虚皇靈篇を出す、

黃庭真人舞胎僊

黃庭真人胎僊舞ふ、

髯者兩卿相後前

髯者兩卿相後前す、

卯妙夾侍清且妍

卯妙の夾侍清にして且つ妍、

十有二神服銳堅

十有二神服銳堅し、

巍巍堂堂人中天

巍巍堂堂人中の天、

問我何修果此緣

我に問ふ何を修して此の縁を果す、

是心朝空夕了然

是の心朝空夕に了然、

恐非其人世莫傳

恐らくは其の人にあらずんば世傳ふる、

殿以二士蒼鶴騫

殿するに二士蒼鶴騫を以てす、

南隨道師歷山淵

南道師に隨つて山淵を歴、

山人迎笑喜我還

山人迎へて笑ひ我が還るを喜ぶ、

問誰遣化老龍眠

問ふ誰か老龍眠を化せ遣めん、

韻にて鳥の飛ぶ貌、故に鶯に改めて十三元を通韻に借用すると見れば可い、

【字解】 〔一〕 太上、禮に、太上貴徳とある、最尊極の辭、

〔二〕 虚皇、虚無の道を教ふる眞人の祖を謂ふ、佛教にて佛陀と云ふと同じ、

〔三〕 眞人は佛教で云ふ菩薩と同じ、

〔四〕 黃庭、道家の祖を稱して黃帝老子と謂ふ、故に道家の言を黃老と謂ひ、

〔五〕 髯者、其の場處を黃庭と謂ふ、

〔六〕 卯、兩卿、葆光と坡公の二人、

〔七〕 卯妙、卯は髮を束れて兩角の如き形、妙は稚童を謂ふ、

〔八〕 十有二神、十有三の誤である、髮神・腦神・眼神・鼻神・耳神・舌神・齒神・心神・肺神・肝神・腎神・脾神・膽神とである、

〔九〕 人中天、佛教にて佛陀を天中天と謂ふ、

〔十〕 蒼鶴騫、騫は一先の韻にて平聲カク、缺と虧の義、去聲十七霰にて躁進の貌、此處に使用出來ない、然らば鶯に作る、是は十三元の

【題義】黃庭內景經の卷尾に此の詩を書せるもの、以て道士の葆光に贈る、李龍眠は畫を以て天下に鳴る者、其の經の説相を畫き、且つ葆光と坡公と二人の坐せる所を描寫せしものである、

【詩意】太上虚皇は出世して黃庭經と稱する靈篇を述べ玉ふ、黃庭真人は歡喜の餘り胎僊は舞ひ躍る、髯者の兩卿は其の前後に對坐する、卯妙の稚童は仙人の左右に夾侍して且つ妍である、其の外に十有三神が銳を服して堅固に坐して居る、信に太上は巍巍堂堂として人中の天たる相を現す、太上は我に問ふ汝は何の善を修してか此の縁を果したるや、是の心は朝に虚無を觀じ夕に其の理の了然たるものがある、恐らくは此の如き眞理は其人にあらざれば世に傳ふことが出来ない、圖の最後に殿する二士は太上の眷屬として蒼鶴が鶩る勢である、我は願ふ此より南方道師に隨行して山淵を歴ん、然らば山人は我を迎へて笑ひ且つ喜ぶことであらう、問ふ誰か人間に在る老龍眠をも此で遣化せしめんと、

【餘論】此の篇は杜甫の八仙歌と同じく十三句皆一先の韻にて作る、

送蹇道士歸廬山

蹇道士が廬山に歸るを送る

物之有知蓋恃息。 物の知あるは蓋し息を恃む、
孰居無事使出入。 孰か無事に居して出入せしむる、

【字解】(一) 物之「莊子外物篇」に、物之有知者恃息、其不履非天之罪とある、(二) 孰居「莊

心無天游室不空。

心天游無くんば室空しからず、

六鑿相攘婦爭席。

六鑿相攘けて婦席を爭ふ、

法師逃入廬山。

法師人を逃れて廬山に入る、

山中無人自往還。

山中無人自往還す、

往者一空還者失。

往く者は一空還る者は失す、

此身正在無還間。

此の身は正しく無還の間に在り、

緜緜不絶微風裏。

緜緜絶えず微風の裏、

内外丹成一彈指。

内外丹は成る一彈指、

人間俛仰三千秋。

人間俯仰三千秋、

騎鶴歸來與子游。

鶴に騎つて歸來子と遊ばん、

陽龍陰虚、木液金精、二氣交會、鍊而成者、謂之外丹、令和二鍊藏、吐故納新、上口泥丸下注丹田、修運不息、朝於絳宮、採於玉石、以哺百神、此内丹也、

【題義】蹇道士名は拱辰字は翊之が京城に在つて人の病を治し、今や廬山に歸臥するを送るのである、廬山には寺宇と道觀とあり、一面は釋氏が領じて、一面は羽士が領地である、

子天運篇に、孰居無事、推而行是、孰居無事、淫樂而勸是、孰居無事、而披拂是とある、又「養生論」に、世人任自然而息至近、但其所利者、唯化食而已矣、若神能御氣、則口鼻不失息とある、(三) 天游「莊子外物篇」に、心有天游、室無空虛、則婦姑勃谿、心無天游、則六鑿相攘とある、(四) 緜緜「老子」に、緜緜若存、用之不勤とある、

(五) 内外丹 道家は金石を烹鍊するを以て外丹と爲し、龍虎胎息、故を吐き新を納るるを内丹と爲す、

(六) 彈指 大指と頭指と彈する寸時の間、又「修真秘訣」に、老君曰、

【詩意】物が各の其の知あるは息を恃むからである、孰か無事に居して出入せしむる者である、心が天外の空闊なるに遊ぶ者でなければ室も空ではない、六鑿相攘けて婦席を争うて喧囂である、法師は喧を嫌ひ人を逃れて今廬山に入る、山中は人が無ければ自由に往還することが出来る、往く者は一空となる還る者は一失と爲る、而して此の一身は正しく無還の間に存在する、縣縣として絶えざる微風の裏に、内丹も外丹も一彈指頃になる、人間が俛仰する三千秋、道侶は僅かに一日か二日を経過したと思ふ、其の間に鶴に騎つて歸來して子と遊ばんと思ふ、

【餘論】莊老を根基としての詩、空を擱むが如く、雲を捕ふるが如きもの、一貫せる意味は無きもの如くである、紀は評して少自在流出之妙と曰ふは當る、

次韻黃魯直戲贈

黃魯直に次韻し戲れに贈る

昨夜試微涼汗衾初退紅。

昨夜微涼に試む、汗衾初めて退紅、

我願偕秋風隨身入房櫳。

我願ふ秋風に偕し、身に随つて房櫳に入らんことを、

君王不好事只作好驚鴻。

君王は事を好まず、只作す好驚鴻を、

細看卷蠶尾我家眞栗蓬。

細看す卷蠶尾、我が家の眞栗蓬、

【字解】

【一】微涼、唐柳公權與太宗聯句云、薰風自南來、殿閣生微涼とある、【二】汗衾、「天寶遺事」卷下に、貴妃毎至夏月、常衣輕絹、使侍兒交扇鼓風、猶不解其熱、每有汗出、紅膩而多香、或拭之於巾帕之上、其色如桃紅とある、【三】驚鴻、魏の曹子建が「洛神賦」に、翩若驚鴻、婉若游龍とある、又唐の曹鄴が「梅妃傳」に、明皇與妃鬪茶、願諸王戲曰、此梅精也、賜白玉笛、作驚鴻舞、一座光輝、鬪茶今又勝我矣とある、【四】卷蠶尾、「毛詩」に、彼君子女、卷髮如蠶とある、蠶はサソリ、此の蠶は尾末捷然として、髮の曲りて上るが如き狀を作す、【五】眞栗蓬、馮應榴は「西溪叢話」を引きて曰く、杜甫詩、嘗果栗皺開、貫休詩、新蟬避栗皺、通雅、栗房破也、

【題義】黃魯直が作られた詩に次韻して戲れに贈るもの、元祐三年に魯直が德州に在つて、操行不良の聲が起る、魯直自ら其の誹議を辯護せる詩を作る、其の詩に次韻せるものであるから、戲贈と稱せしものである、

【詩意】昨夜は微涼でありしが故に、汗衾も初めて退紅せしものである、我は願ふ秋風と偕に、身に随つて房櫳の中に入らんことを、古の君王は祕事を好まない、只美人が驚鴻の若き容姿の好きを作すのみ、細かに佳人の卷蠶尾を看れば、此は是れ我が家の眞栗蓬の如き可憐なる者である、

【餘論】紀曉嵐は齊梁體と批評せるが、細かに此の詩意を察すれば溫柔郷語であつて、大雅の正詩ではない、漢士文人の弊として、賣笑女を御すること尋常喫茶飯と心得居るものの如くであるが、名教の罪人と稱せられても辨する餘地はない、

書林次中所得李伯時歸去來陽關二圖後

林次中が得る所の李伯時の歸去來と陽關の二圖後に書す

不見何哉唱渭城。見ずや何哉が渭城を唱ふるを、

舊人空數米嘉榮。舊人空しく數ふ米嘉榮、

龍眠獨識殷勤處。龍眠は獨り識る殷勤の處、

畫出陽關意外聲。畫き出す陽關意外の聲、

涼州意外聲、舊人唯數米嘉榮、近來時世輕先輩、好染髭鬚事後生とある、【三】龍眠 名は公麟字は伯時、龍眠居士と號す、舒城の人、熙寧中進士、官朝奉郎に至る、

【題義】右司郎中の官たる林次中が得たる李伯時の淵明歸去來圖と陽關との二圖に贊を書したるものである、唐の王右丞が元次を送る詩に、渭城朝雨挹輕塵、客舍青青柳色新、勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人とあるを、伯時が取つて以て畫題と爲したものである、乃ち人が旅程に上らんとする圖を寫せるものである、

【詩意】何哉が渭城の曲を唱ふる状を見ずして、舊人が空しく數ふ米嘉榮を、龍眠は唯獨り殷勤丁寧なる處を識る、故に陽關意外の聲を畫き出したのである、

兩本新圖寶墨香。兩本新に圖して寶墨香し、

尊前獨唱小秦王。尊前獨り唱ふ小秦王、

爲君翻作歸來引。君が爲に翻つて作る歸來の引、

不學陽關空斷腸。陽關を學ばず空しく斷腸、

【詩意】兩本の新圖は良に寶墨が新である、尊前に獨り唱ふ小秦王の曲を、君が爲に小秦王の曲を以て其の儘之を陽關引と爲す、然らば別に陽關を學ばざるも空しく斷腸するのである、

【餘論】紀曉嵐は此の二首を評して曰く、二詩皆有風韻、入之漁洋集中、殆不復別、乃知東坡非不能此種、特不下以此種爲安心立命處上耳と、歸去來にして淵明は管せざるもの如く、陽關にして右丞亦關せざるもの如く、公の才にあらざれば、何人も思ひ此に至らざるもの、公が絶句として三昧に入るもの、而して以心傳心なる者は其れ漁洋である、

次韻王夷仲茶磨

前人初用茗飲時。前人初めて茗飲を用ふる時、

煮之無問葉與骨。之を煮て葉と骨とを問ふこと無し、

古今體詩 書林次中所得李伯時歸去來陽關二圖後 次韻王夷仲茶磨

【字解】【一】小秦王 曲名、即ち陽關の遺聲、茗溪叢話に、唐初歌詞、多是五言或七言、初無長短句、此體所存者、瑞鷓鴣、小秦王二曲、小秦王一名古陽關とある、

【字解】【二】茗飲 「茶經」に、其名一曰茶、二曰檟、三曰護、四曰茗、五曰筴とある、郭璞云、早取曰

寢窮厥味白始用。
復計其初碾方出。
計盡功極至于磨。
信哉智者能創物。
破槽折杵向牆角。
亦其遭遇有伸屈。
歲久講求知處所。
佳者出自衡山窟。
巴蜀石江強鑄鑿。
理疎性軟良可咄。
予家江陵遠莫致。
塵土何人爲披拂。

寢く厥の味を窮めて白始めて用ふ、
復た其の初を計して碾して方に出す、
計盡き功極まりて磨に至る、
信なる哉智者は能く物を創す、
槽を破り杵を折りて牆角に向ふ、
亦其の遭遇伸屈あり、
歳久しく講求して處所を知る、
佳なるもの衡山の窟より出で、
巴蜀の石江強ひて鑄鑿す、
理疎性軟良に咄なる可し、
予が家は江陵遠くして致す莫し、
塵土何人か爲に披拂せん、

茶具十二圖、茶磨名石轉運、田衡山者佳とある、衡山は三處ある、一は五嶽の中の南嶽、一は會稽山、一は北極の山、今は湖南の南嶽を謂ふ、【九】披拂、樹葉が風に吹かれて分れる形容、今は茶具としての鳥羽を以て製せる拂末を謂ふ、

【茶、晚取曰者、】【二】白始用、「茶經」に、杵臼一曰碾、惟恆用者佳とある、【三】碾方出、碾はヒキウス、上下の二木又は二石を磨り合せて物を粉碎する具である、「茶經」に、以桶木爲之、次以梨桑桐柘爲之、内圓而外方、内圓備於運行也、外方制於其傾危也、内容墮而無餘、木墮形如車輪、不輻而軸焉、長九寸、闊一寸七分とある、【四】于磨「大明一統志」に、茶磨以石門山石爲之とある、【五】創物、「周禮考工記」に知者創物、巧者述之、世謂之工とある、【六】槽、四旁高くして中陥り桶の形をなせるもの、茶確を謂ふ、【七】牆角、カキネノスミ、白樂天の詩に、黃葉聚牆角、青苔圍樹根とある、【八】衡山窟

【題義】黃廉字は夷仲は黃山谷の叔父である、元祐の初、都大提舉成都府路權茶と爲る、政府專賣の茶を監督する役、此人の茶磨即ち「チャウス」の詩に次韻して作る、

【詩意】前人が初めて晩茶を飲むときは、之を煮て葉も骨も一所に煮る、寢く厥の味を窮め白を用ふるの善きを知つて來た、段段と進歩して其の初を計して碾を用ふるの愈よ善きを知つて來た、それより逾よ研究して磨と云ふ物を用ふるに至る、信なる哉智者は摸倣するのみならず發明するに至る、槽を破り杵を折つて牆隅に向つて棄てる、亦其の遭遇にも伸と屈とある、歲月の久しき研究の結果何處より出づる石が佳であると知つた、其の佳なる石は衡山窟より出づるものが佳い、巴蜀の石工は強ひて鑄鑿して、巴蜀が佳いと云ふが、巴蜀の石は理は疎にして性は軟良に咄咄たるものである、予が家は江陵なれば遠くして其の石を致すことが出來ぬ、塵土に何人か予が爲に披拂するものぞや、

【餘論】紀曰く、何其拙鈍乃爾と、

臥病逾月。請郡不許。復直玉堂。十一月一日鎖院。是日苦寒。

詔賜宮燭法酒。書呈同院。

臥病月を逾ゆ、請郡許されず、復た玉堂に直す、十一月一日鎖院、是の日寒に苦む、詔して宮燭法酒を賜ふ、書して同院に呈す

微霰疎疎點玉堂。

微霰疎疎として玉堂に點す、

【字解】【二】微霰、謝惠連の

詞頭夜下攬衣忙。詞頭夜下りて衣を攬る忙がし、

分光御燭星辰爛。分光の御燭 星辰爛たり、

拜賜宮壺雨露香。拜賜の宮壺雨露香ばし、

醉眼有花書字大。醉眼花あり書字大、

老人無睡漏聲長。老人睡る無うして漏聲長し、

何時却逐桑榆暖。何時か却つて桑榆の暖を逐ひ、

社酒寒燈樂未央。社酒寒燈樂未央ならざる、

「雪賦」に、微霰集、密雪下とある、
〔三〕詞頭 白樂天の「書寓直詩」に、
病對詞頭慙綵筆とある、又攬衣
中夜起とある、宋の程大昌が著はせ
る「演繁露」に、舊制凡有除授格、
當命詞者、皆即日命詞、詞出便給
告、故唐制五禁、稽緩居其一、「容齋
三筆」中書舍人、所承受詞頭、自
唐至本朝、皆只就省中一起草付
吏、迨于告命之成、皆未嘗越日、
故其職爲難、必欲速成一故也とあ

る、沈括の「夢溪筆談」に、故事堂中、設視草臺、每草制、則具衣冠、據臺而坐とある、唐の楊巨源の詩に、丹鳳詞頭供二妙、紫籟
殿角價三清とある、〔三〕星辰爛 「毛詩」に、子興視夜、明星有爛とある、〔四〕宮壺 歐陽永叔の詩に、宮壺日賜新撥醕とある、
〔五〕書字大 唐の張籍の詩、眼昏書字大とある、〔六〕老人 劉禹錫の詩に、老人無睡到天明とある、〔七〕桑榆 斜陽の日影
を謂ふ、更に老人の死期に迫るに用ふ、「唐書太宗紀」に、筋骨將盡、桑榆且迫とある、〔八〕社酒 李義山の詩に、旂高社酒香とあ
る、王昌齡の詩に、恩榮日月後天長、萬舞常春樂未央とある、

【題義】三十日も臥病するが故に、請郡するも許されず、復た玉堂翰林に宿直する、而して十一月
一日は院門を閉鎖するが、是の日甚だ寒し、詔して宮燭法酒を賜はる、其の夕此の詩を賦し、翌日
同院に示せるものである、

【詩意】微霰は疎疎と音がして玉堂に點する、詞頭は草を起草するを得ざるが爲に夜堂を下りて衣を
攬ること頗る忙がしい、光を分つの御燭は天上の星辰と共に爛爛としてある、拜賜せらるる宮壺の酒
は雨露と同じく香氣を放つ、醉眼には花を生ずるが故に書字は大となる、老人は睡ること無ければ漏
聲が如何にも長きかと覺ゆ、何の時にか却つて桑榆所謂殘年の暖きを逐うて、社酒も寒燈も樂未
だ央ならずと唱ふことが出来るや、

【餘論】紀曉嵐評して曰く、老手恃老、往往類唐、工部晚年亦不免此と、余輩は此の詩を類唐と
認むる能はざるが、紀は以て類唐と爲す、賦詩必此詩、定非知詩人、呵呵、

送周朝議守漢州

周朝議が漢州に守たるを送る

茶爲西南病 岷俗記二李

茶は西南の病を爲す、岷俗二李を記す、

何人折其鋒 矯矯六君子

何人か其の鋒を折く、矯矯たる六君子、

君家尤出力 流落初坐此

君が家尤も力を出す、流落初めて此に坐す、

謂當收桑榆 華髮看劍履

謂ふ當に桑榆に收むべしと、華髮劍履を看る、

【自注】謂二紀
與二稷也。

【自注】謂三思道與三姪正孺。張永徽。
吳醇翁。呂元鈞。宋文輔也。

胡爲犯風雪。歲晚行未已。

胡爲れぞ風雪を犯し、歳晩れて行未だ已まざる。

念歸誠得計。顧自爲謀耳。

歸を念うて誠に計を得たり、顧みて自ら爲に謀らんのみ、

吾聞江漢間。瘡痍有未起。

吾聞く江漢の間、瘡痍未だ起らざる有り、

莫輕龔遂老。君王付尺箠。

龔遂老を輕んずる莫かれ、君王尺箠を付す、

召還當有詔。挽袖謝鄰里。

召還當に詔あるべし、袖を挽いて鄰里に謝す、

猶堪作水衡。供張園林美。

猶ほ水衡と作るに堪へたり、供張園林美なり、

【字解】

【一】西南病。王註曰く、熙寧三年、朝廷依李杞李稷申請、權川茶、元豐五年十月、李稷傳云、初蜀茶額、歲三十萬、

至稷加爲五十萬とある、查注に案樂城集、子由論蜀茶五害狀云、孟氏據蜀始權茶、及藝祖平蜀、遂無禁、淳和間、因民間販賣、量行收稅、近歲李杞、初立茶法、禁民間私買、然所收之息、止四十萬貫、至劉佐清宗閱提舉茶事、取息太重、遠人始病、時呂陶奏乞改行長引、令民自販、茶每二貫、田錢一百、民間方有息肩、又却差孫迥李稷、入川相度始議、茶價隨時增減、取息依舊、由是息錢長引二說並行、稅等又益以販鹽布增額、可及六十萬貫、及引陸師閔等共事、又增額至一百萬貫、師閔又乞于額外、以百萬貫爲獻、于成都府置都茶場、客無現錢買、許以金銀折博、拘攔民間物貨入場、賤買貴賣、其害過于市易、茶法至今凡四變、每變取利益深とある、【二】折其鋒。後漢桓帝紀論に、屢折奸鋒、何奴傳、儒生欲說折其辭辨、少年欲刺折其氣とある、【三】矯矯。魯頌に矯矯虎臣とある、猛烈なる貌、高擧する貌、【四】六君子。公の自注に、思道と姪正孺・張永徽・吳醇翁・呂元鈞・宋文輔とを謂ふなりとある、【五】流落。杜甫の詩に、流落意無窮とある、【六】收桑榆。淮南子に、日經于東隅、是謂高春、日西垂、景在桑榆、謂之桑榆とある、後漢書馮異傳に、異破赤眉、光武賜異書曰、始雖垂翅回轡、終能奮翼濯池、可謂失之東隅、收之桑榆とある、【七】爲謀耳。莊子達生篇に、爲僞謀則去之、自爲謀則取之とある、【八】龔遂老。漢書龔遂

傳に、宣帝即位、久之渤海歲飢、盜賊並起、二千石、不能禽制、上選能治者、丞相御史、舉遂爲渤海太守、時遂年七十餘、召見形貌短小、宣帝望見、不測所聞、心內輕焉、謂遂曰、君欲何以息其盜賊、遂對曰、欲使臣勝之邪、將安之也、上答曰、選用賢良、固欲安之、遂曰治亂民、猶治亂繩、不可急也、願無拘臣以文法、得一切便宜從事、上許焉、至渤海、盜賊悉平とある、【九】尺箠。一尺の箠捶であるが、全權を付與する意味である、【一〇】挽袖。前に辨せり、【一一】水衡。龔遂傳に、爲渤海太守、徵還、上以遂年老、不任公卿、拜爲水衡都尉、水衡典上林苑、共張宮館、爲宗廟取牲、官職親近、上甚重之、以官壽卒とある、

【題義】周朝議が漢州、即ち今日の四川省廣漢縣の太守と爲つて赴くを送る詩である、朝議名は表臣、字は思道、

【詩意】茶が西南の病害と爲る久しい、岷中の俗は皆二李の醜名を知つて居る、而して何人かが悪吏どもの鋒を折くや、それは矯矯たる六君子である、六君子中尤も盡力したるものは君である、所が君は朝議の官より流落して此の縣の知事と爲る、が功を桑榆に收むる氣概を持つて居る、白髮猶ほ壯士の如く劍履を看、胡爲れぞ風雪を犯すを辭せんや、歳晩れて行く未だ已まざるに、蜀に歸を思ふは誠に其の計を得たものと思ふ、顧みて能く自ら謀を爲し玉へ、吾は聞く江州と漢州との間は、種種の瘡痍が未だ快起せざるのである、世の俗人や、州の愚民は決して龔遂老を輕んじてはならぬ、君王が尺箠を付し至權を託したる豪傑である、召還さるる詔の出づる近きに在ると思ふ、袖を挽いて鄰里郷黨に謝せ、老いたるも猶ほ水衡都尉と作る力はある、然らば供張園林の美を再賞するを得るであらう、

【餘論】周を以て龔に比して言ふ、周は權茶と盜賊を治むる二役がある、龔は單に征賊のみ、されど州民を服從せしめること同一なれば、比較其の宜しきを得たるものと思ふ、紀は曰く、題有ニ發揮、詩未ニ精采一とあるが、如何に作れば、精采あるのか、余に於て聊かも判らず、

木山

木山

吾先君子嘗蓄木山三峯。且爲之記與詩。詩人梅二丈聖俞見而賦之。今三十年矣。而猶子千乘又得五峯益奇。因次聖俞韻。使并刻之其側。【訓讀】吾が先君子、嘗て木山三峯を蓄ふ、且つ之が記と詩とを爲る、詩人梅二丈聖俞、見て之を賦す、今三十年なり、而して猶子千乘、又五峯を得益す奇、因つて聖俞の韻に次し、并に之を其の側に刻せしむ、

木生不願回萬牛。
願終天年仆沙洲。
時來幸逢河伯秋。
掀然見怪推不流。

木生れて願はず萬牛を回らすを、
天年を終へて沙洲に仆れんと願ふ、
時來りて幸に河伯の秋に逢ふ、
掀然怪を見推して流れず、

【字解】

〔一〕萬牛、杜甫の「古柏行」に、大廈如傾要梁棟、萬牛回首邱山重とある、〔二〕終天年、「莊子人間世篇」に、未終天年、而中道夭於斤斧、此材之患也とある、〔三〕蓬婆雪嶺、二山の名、杜甫の

蓬婆雪嶺巧彫鏤。
蟄蟲行蟻爲豪酋。
阿咸大膽忽持去。
河伯好事不汝尤。
城中古沼浸坤軸。
一林瘦竹吾菟裘。
二頃良田不難買。
三年檀木行可樞。
會將白髮對蒼巘。
魯人不厭東家邱。

蓬婆雪嶺巧に彫鏤す、
蟄蟲も行蟻も豪酋爲り、
阿咸大膽に忽ち持ち去る、
河伯好事汝を尤めず、
城中古沼坤軸を浸す、
一林の瘦竹吾が菟裘、
二頃の良田買ひ難からず、
三年檀木行くゆ樞可し、
會す將に白髮蒼巘に對せんとす、
魯人厭はず東家の邱、

詩に、已收滴博雲間成、更奪蓬婆雪外城とある、〔四〕豪酋、孟浩然の詩に、天地生豪酋とある、〔五〕大膽、「三國志」に、姜維死、膽如斗大とある、〔六〕坤軸、地軸と同じ、杜甫の詩に、殺氣南行動坤軸とある、〔七〕瘦竹、白樂天の「大林寺詩序」に、環寺多清流、蒼石短松瘦竹とある、〔八〕菟裘、魯國の邑名、泰山梁父縣の南、隱公の隱居せし地、後世以て隱栖の地の義とする、「左傳」に、隱公曰、使營菟裘、吾將老焉とある、〔九〕二頃、田二百畝である、「史記蘇秦傳」に、秦曰使吾有洛陽負郭田二頃、

吾豈能佩三六國相印乎とある、〔一〇〕檀木、杜甫の詩に、飽開檀樹三年大、爲致溪邊十畝陰と、三年ならざるに、大樹と爲るの木、〔一一〕可樞、「毛詩大雅」に、芄芄械樸、薪之樞之とある、〔一二〕會將、杜甫の詩に、會將白髮倚庭樹とある、會は要なれば「かならず」と訓むも可、偶の意義にて「たまたま」と訓むも可、〔一三〕蒼巘、劉禹錫の詩に、高殿呀然壓蒼巘とある、〔一四〕東家邱、「家語」に、魯人不識孔子聖人、乃曰彼東家邱者、吾知之矣とある、

【題義】木山は即ち木假山(ツキヤマ)を詠する詩である、先君子即ち老泉が蓄へて、梅聖俞が詩を作

り、更に坡公の猶子千乗が三峯の所へ五峯を持ち來りて、ツキ山が益す奇となる、乃ち其の事を詠じたるものである、

【詩意】 樹木の生るるは本萬牛を回らす程の大となるを願ふのではない、願ふ所は天年を全くして沙洲に仆れんことである、時節が來りて幸に河伯が威を逞しうする秋となる、が水神も掀然として怪木を見て推し流さない、況して蓬婆山も雪嶺も巧に自然の彫鏤をして居る、蟄伏する龍も行歩する蟻も豪會と爲る、阿咸は大膽にも忽ちに持ち去らんとす、河伯は好事の者を知つて汝を尤めない、城中の古沼は坤軸を浸す、一林の瘦竹は是れ吾菟裘の處である、又二頃の良田は買ふに難くは無い、三年の橙木は行くゆく櫛くべし、會すや白髪を將て蒼鬚に對向せんと思ふ、魯人は東家の邱を厭はない、故郷の人であるから、

【餘論】 紀曉嵐は起句を評して疎疎落落、押韻亦極自然と、又六句を評して會字押得倒、阿咸句粗と、又十三句を評して蒼鬚即指假山と、又結句を評して押三孔子諱、究非體と、余曰く杜甫の句に、孔邱盜跖俱塵埃とある、之を議する者固より多し、紀が始めて言ふのではない、余は謂ふ丘と記せば不可なるも、邱と書す、杜甫も東坡も後世の紀よりは心得て居るものである、詩體一韻、其の平仄法、翁覃溪先生論する所と聊か異なる、如何に此の詩を論するや、

送千乘千能兩姪還鄉

千乘千能兩姪が郷に還るを送る

治生不求富。讀書不求官。
譬如飲不醉。陶然有餘歡。
君看龐德公。白首終泥蟠。
豈無子孫念。顧獨貽以安。
鹿門上冢回。牀下拜龍鸞。
躬耕竟不起。耆舊節獨完。
念汝少多難。冰雪落綺紈。
五子如一人。奉養眞色難。
烹雞獨饋母。自饗苜蓿盤。
口腹恐累人。寧我食無肝。
西來四千里。敝袍不言寒。
秀眉似我兄。亦復心閒寬。
忽然舍我去。歲晚留餘酸。

我豈軒冕人。青雲意先闌。

我豈軒冕の人ならん、青雲意先づ闌なり、

汝歸蒔松菊。環以青琅玕。

汝歸りて松菊を蒔し、環らすに青琅玕を以てす、

橙陰三年成。可以挂我冠。

橙陰三年にして成る、以て我が冠を挂くべし、

清江入城郭。小圃生微瀾。

清江城郭に入る、小圃微瀾を生ず、

相從結茅舍。曝背談金鑿。

相從つて茅舍を結び、背を曝して金鑿を談せん、

【字解】

〔一〕 龐德公 東漢襄陽の人、峴山の南に居、未だ嘗て城市に入らず、劉表數ば延請するも屈する能はず、後其の妻子を攜

へて鹿門山に入り、藥を采つて返らず、〔二〕 泥蟠 泥塗に蟠居するを謂ふ、「班固文」に、故夫泥蟠而天飛者、應龍之神也とある、

〔三〕 上家 「三國志」に、司馬德操、嘗詣龐德公、值其渡河上家、德操徑入其室とある、〔四〕 牀下 「三國志」に、諸葛孔明、每

至德公家、獨拜牀下、德公初不令止とある、〔五〕 躬耕 「三國志」に、孔明躬耕隴圃之中とある、「漢龐公傳」に、釋耕于壟

上、而妻子耘于前とある、〔六〕 綺紉 中流以上生活者の著する衣服と見てよい、〔七〕 五子 千乘と千之と千能と千秋と千鈞とで

ある、〔八〕 色難 論語の語、〔九〕 烹雞 「後漢書郭太傳」に、茅容字季偉、陳留人也、時避雨樹下、危坐愈恭、林宗見之、而奇其

異、遂與共言、因請寓宿、且日容殺雞爲饌、林宗謂爲己設、既而以供其母、自以草蔬、與客同飯、林宗起拜之曰、卿賢乎哉、

因勸令學、卒以成德とある、〔一〇〕 無肝 「後漢書太原閔仲叔傳」に、客居安邑、老病家貧、不能得肉、日買豬肝一片、屠者不

肯與、安邑令聞、使吏常給焉、仲叔怪而問之知、乃嘆曰、閔仲叔、豈以口腹累安邑邪、遂去客沛、以壽終とある、〔一一〕 軒冕

卿大夫の車服を謂ふ、亦以て貴顯の通稱、「莊子」に、今之所謂得志者、軒冕之謂也とある、〔一二〕 青雲 有德にして盛名を負ふ者

を謂ふ、第二義として高位に在る者を謂ふ、〔一三〕 關 酏と和調同様用ふるが、酏は半を謂ふ、關は半を過ぎたるを謂ふ、〔一四〕

蒔 蒔植、種を植ふるのである、〔一五〕 金鑿 「舊唐書」、陸展字祥文、充翰林學士、拜中書舍人、嘗金鑿作賦、命學士和、展先成、

帝覽而嗟之とある、

【詩意】 治生の道は富を求むる爲ではない、讀書の志は官を求むる爲ではない、譬へば酒を飲んで

も酔はざるが如きも、陶然として餘歡あれば足る、君等看よ漢の龐德公の業を、白首に至るまで終に

泥土に蟠居したのである、決して子孫を愛する念が無いのではない、子孫には相當に安心する料を貽

せば足る、古の賢人は鹿門山に名士を訪うて敬意を表した、又高士の爲には英雄も牀下に拜した、而

して高士は貧に甘んじて躬耕して竟に濁世に起たない、而して耆舊となつて其の節を全うしたのであ

る、汝等が幼少の時を念へば多難であつた、冰雪が綺紉に落ちた中を行つたこともある、されど五子

は一人の如くに志は同じである、奉養することは聖人も色難しと述べて居玉ふ、雞を烹て獨り母に

獻じ、自分は疎末なる首蓐を食うて處るが古の孝子の道である、餬口の道を以て人を累はすは忍びな

い、我に於ても豬肝一片位は無いのではない、西より來ること四千里、敝れたる袍を着て寒を口に言

はない、秀眉は極めて我兄の不欺に似て居る、秀眉のみが似て居るのではない心 閒寛たるも似て居

る、忽然として我を捨てて今や去る、歲晩に及んで餘酸を留むるのみ、我も元來軒冕の人ではない、

青雲の志などは已に過去に屬す、汝が歸りし後は宜しく松菊を蒔植せよ、其の周圍は竹の青青たる

を植ふるよ、橙陰は三年にして鬱鬱と成るから、以て我は冠を挂くべしと思ふ、清江の水も城郭に入

る、小圃は従つて微瀾を生ずるであらう、此に相與に茅舍を結び、背を南軒に曝して金鑿の浮美なる

を談せんか、

【餘論】 紀曉嵐曰く、鹿門以下四句冗贅可刪と、奉養句不妄と、烹雞一段亦曼衍と、此の紀評には

古今體詩 送千乘千能兩姪還鄉 四四三

余も亦大に贊するものである、龐徳公の故事やら、孔明の典據やらは、所謂提燈に釣鐘の感がある、一代の英雄や、千古の高士を拉し來りて千乘千能など公の詩が無きときは名も亦無き人に比するは當を失して居る、紀が冗贅可刪の語は余其の識見に服するものである、

送周正孺知東川

周正孺が東川に知たるを送る

得郡書生榮。還家昔人重。

郡を得るは書生榮とす、家に還るは昔人重んず、

而況東西川。千騎許上冢。

而かも況んや東西川、千騎上冢を許すをや、

里門下車入。父老自驚聳。

里門車を下りて入り、父老自ら驚聳す、

端如何武賢。不事長卿寵。

端は何武の賢の如く、事とせず長卿の寵、

清時養材傑。杞梓方培擁。

清時材傑を養ふ、杞梓方に培擁、

未應遺合抱。取用及把拱。

未だ應に合抱に遺らざるも、取りて用て把拱に及ぶ、

如君尙出麾。顧我宜耕壟。

君が如きは尙ほ出麾、我を顧みて宜しく壟に耕すべし、

告歸謝先手。求去悔不勇。

歸を告げて先手を謝す、去るを求めて悔ゆるは勇ならず、

豈云慕廉退。實自知衰冗。

豈云はんや廉を慕うて退くと、實に自ら衰冗を知る、

爲君掃棠陰。畫像或相踵。

君が爲に棠陰を掃ひ、像を畫きて或は相踵がん、

【自注】蜀中太守無不畫像者。

【字解】

【一】得郡 韓退之の「贈崔復州序」に、大丈夫官至刺史亦榮矣とある、【二】還家 「漢書」に、武帝謂朱買臣曰、富貴不歸故郷、如衣繡夜行、乃以買臣爲會稽太守とある、【三】東西川 宋の歐陽恂が撰せる「輿地廣記」に、梓州路、梁末置新州、隋改爲梓州、唐乾元後、升爲劍南東川節度、皇朝乾徳四年、改靜戎軍とある、又「名勝志」に、唐至徳二載、分爲劍南東川西川とある、【四】千騎 「古樂府」に、東方千餘騎、夫婿居上頭とある、【五】里門 「高士傳」に、商容嘗謂李耳曰、過故郷而下車、子知之乎と、「漢石奮傳」に、萬石君少子内史慶、醉歸入外門不下車、萬石君、聞之不食、慶肉袒謝罪、萬石君曰、内史貴人、入閭里中、長老皆走避、而内史坐車中自如、固當適謝、罷慶、後慶及諸子入里門、趨至家とある、【六】端如 端は端正の謂ひ、【七】何武 次公曰く、案何武傳、武之美事甚多、爲九卿時、多所舉奏、號爲煩碎、不稱其賢、公功名略比薛宣、而其材不及也、而經術正直過之、恐別有載稱武賢一字、以俟博聞と、施注に、漢何武傳、蜀郡郫縣人、弟顯家有市籍、租常不入縣、課畜夫求商、捕辱顯家、武曰以吾家租賦繇役、不爲衆先奉公吏、不亦宜乎、卒白太守、召商爲吏、州里皆服焉と、【八】長卿 司馬相如が蜀の太守と爲りて、蜀人が以て寵と爲したること、【九】杞梓 杞は柳に似て葉麤にして白色、梓は楸に似て喬木、杜甫の詩に、楚材擇杞梓とある、【一〇】把拱 「莊子人間世篇」に、宋有判氏者、宜楸柏桑、其拱把而上者、求狙猴之杙者斬之とある、ひとかかへ、ひとにぎりである、【一一】告歸 「尙書」に、伊尹既復政厥辟、將告歸とある、

【題義】周正孺名は尹、周思道の姪である、蜀茶の事を論じて正正の説を主張せし人、東川の知事と爲つて赴くを送る詩である、

【詩意】一郡の長と爲るを得るは書生の榮とする所である、家に還るは昔人も重んぜられた事がある、而かも君は東西の兩川に涉りて領する所が大なるに於てをや、千餘騎を隨へて上冢するを許され、

里門りもんに入るには車くるまより下りて入る謙讓けんじやうの徳とくを守る、父老ふらうも自ら驚聳みづかする所以ゆゑんである、其の端正たんせいなること古いにしへの何武かぶの如くである、されど司馬長卿しはちやうけいの寵ちゆうとせられた事は君きみに於ては事こととしな、清時せいじに際會さいくわいして自分の力ちから限り材傑さいけつを養やしなはんと思ふのみ、杞梓きしも今は方に培擁はいようしたるのみ、未だ合抱がふほうするまでには至らない、況いはんや取つて用て把拱はきゆうするには尙なほ至らない、君きみの如きは尙なほ出でて一縣けんを指揮しきする力を具す、顧かへりみるに我輩わがはいは宜よろしく退しりぞいて壘上りゆうじやうに哂わらすべきである、歸きを告ぐるには宜よろしく先手せんしゆに謝しゃし、求め去つて而して後悔のちくゆるは遂つひに勇者ゆうしやでない、豈あに云はんや廉潔れんけつを慕したふが爲ために退しりぞくと、本心ほんしんを言はば自ら我身の衰冗すゐじゆうを知るからである、然らば君きみの歸來きらいまで棠陰たういんを掃はらうて待つであらう、君きみは州民しゅうみんの信しんを得て畫像がざうにせらるるを期きすべきである、

【餘論】紀曉嵐きけうらん曰く、話自挺拔たつていぱつと、查慎さしんは十一句の未應みえい以下を評して曰く、一篇正意いつぺんせいぎ在此、或曰尙一磨いちば、或曰尙出守しゆうしゆう、皆妥たふ、惟割裂わいかりつ爲三出磨さんしつば則不すなは妥と、坡公はこうの才さいと雖いへども、造語ぞうごは佳かならざるもの、往往わうわう此の誹そりを招まねくのである、

題李伯時畫趙景仁琴鶴圖二首

李伯時が畫く趙景仁琴鶴の圖に題す 二首

清獻先生無一錢せいけんせんせい せんも無し、

【字解】 一 清獻 景仁の追號

故應琴鶴是家傳こに應に琴鶴は家傳

故に應に琴鶴は家傳に傳ふるなるべし、

である、(二) 琴鶴 「本集神道碑」に、公諱并、字閔道、衛之西安人、

誰知默鼓無絃曲たれか知らん黙鼓無絃の曲

誰か知らん黙鼓無絃の曲、

景祐元年進士、曾公亮、以臺官薦、召爲侍御史、號鐵面御史、後知成

時向珠宮舞幻僊ときしゆくきうむかへん

時に珠宮に向つて幻僊舞ふ、

都、神宗即位、召知諫院、上謂曰、

開卿かいけい西馬入蜀、以一琴一鶴自隨、爲政簡易、亦稱是耶、居三月擢諫議大夫、參知政事、再知樞、元豐二年、加太子太保、致仕、退居于衛東南、高士多從之游とある、【三】 無絃 「昭明太子陶潛傳」に、淵明不解音律、而蓄無絃琴一張、每酒適輒撫弄以寄其意とある、【四】 珠宮 「黃庭內景經」に、太上大道玉宸君、開居瑩珠宮、作七言琴心三疊とある、【五】 幻僊 仙禽即ち仙家の鶴である、

【題義】李伯時が畫きて趙景仁が所藏する琴鶴の二圖に題したる詩である、

【詩意】清獻先生は清廉の人一錢の貯金も無い、但一琴と一鶴との名畫を家に傳ふるものである、誰も知ることとは出来ない黙して無絃の曲を鼓することを、時には珠宮に向つて幻僊の舞ふを見る、

【一】

【二】

醜石寒松未易親しうせきかんしょうみやす

醜石寒松未だ親み易からず、

【字解】 一 長人 鶴を謂ふ、

聊將短曲調長人いささたんきよくちやうじん

聊か短曲を將て長人を調す、

【三】 明眼 字の如く明眼は即ち智識の人と謂ふ意、【三】 傲傲 「毛詩」に、屢舞傲傲とある、醉舞の形容、【四】 爨薪 「後漢蔡邕傳」に、

乘軒故自非明眼けんに乗る故自から明眼にあらず

軒に乗る故自から明眼にあらず、

吳人有爨桐以爨者、邕聞火烈之

終日傲傲舞爨薪しうじつきききさんしん

終日傲傲爨薪を舞はす、

古今體詩 題李伯時畫趙景仁琴鶴圖二首

聲、知其良木、因請裁爲琴、果有美音、而其尾猶焦、故時人名曰焦尾琴とある、

【詩意】醜石と寒松とのみにては未だ親み易くはない、聊か短曲を將て長人を副へて調和する、懿公の如く軒に乗つて樂むは要するに明眼の人ではない、終日傲傲として樂を舞はすには及ばない、

次前韻再送周正孺

前韻を次し、再び周正孺を送る

東川得望郎。坐與西爭重。
高風傾石室。舊學鄙文冢。

東川は望郎を得たり、坐して西と重きを争ふ、
高風は石室を傾け、舊學は文冢を鄙む、

【自注】劉蛻文冢銘在梓州。

蜀人安使君。所至野不聳。

蜀人は使君に安んず、至る所野聳れず、

竹馬迎細侯。大錢送劉寵。

竹馬細侯を迎へ、大錢劉寵を送る、

遙知句溪路。老稚相扶擁。

遙に知る句溪の路、老稚相扶擁す、

看畫古叢祠。百怪朝幽拱。

畫を看る古叢祠、百怪朝に幽拱す、

牛頭與兜率。雲木蔚堆壘。

牛頭と兜率と、雲木蔚として堆壘、

醉鄉追舊游。筆陣賈餘勇。

醉郷に舊游を追ひ、筆陣餘勇を買ふ、

聊將詩酒樂。一掃簿書冗。

聊か詩酒の樂を將て、一掃せん簿書の冗を、

西風吹好句。珠玉本無踵。

西風好句を吹き、珠玉本踵なし、

【字解】

望郎 李義山の詩に、望郎臨古郡とある、衆望を負ふ此の郎の意、(一) 石室 國家堅固の意、又圖書室の意、又山中隱居の室、又冢墓の意、今は此の外に玉堂を譬ふ、(二) 文冢 名勝志に、劉蛻文冢在兜率寺内、蛻唐懿宗朝、爲左拾遺、爲文不忍棄其草、聚而封之、其銘曰、文乎文乎、有鬼神乎、風水惟貞、將利其子孫乎、(三) 不聳 左傳襄公四年に、邊鄙不聳とある、聳は懼と同じ、(四) 竹馬 兒童の遊戲、晉の桓温の少時、殷浩と共に竹馬に騎る、(五) 細侯 後漢郭伋傳に、字細侯、王莽時、爲并州牧、世祖十一年、又爲并州牧、前在并州、素結恩德、及後始至行部、到西河美稷、有童兒數百、各騎竹馬、道次迎拜、伋問何自遠來、對曰、聞使君到喜、故來奉迎と、(六) 大錢 後漢書劉寵傳に、拜會稽太守、郡中大化、徵爲將作大匠、山陰縣、有五六老叟、龐眉皓髮、自若邪山谷間出、人齎百錢、以送寵、寵爲人選一大錢受之とある、(七) 句溪 中江縣の西に在る、方輿勝覽に、句溪神廟、即天齊王祠、在中江縣治西、祀隋凱州守李直之、案直之字正叟、長安人、守凱州、化行俗美、後乞骸歸隱銅官山とある、(八) 叢祠 史記陳涉世家に、今吳廣之次近所旁叢祠中とある、(九) 牛頭 九域志と元和郡縣志に、牛頭山、一名華林山、在瀘州西南、上有長樂寺、爲一方勝槩とある、(一〇) 兜率 方輿勝覽に、兜率寺在南山、一名長壽寺、隋開皇時建とある、(一一) 醉郷 王績醉郷記に、昔黃帝氏、常獲游其都、阮嗣宗、陶淵明、十數人、並游于醉郷、没身不返とある、(一二) 賈餘勇 左傳成公二年に、齊高固、入于晉師、桀石以投人、禽之而乘其車、繫桑本焉、以徇齊郷、曰欲勇者、賈余餘勇とある、(一三) 珠玉 韓詩外傳に、蓋胥謂平公曰、珠出於海、玉出於山、無足而至者、君好之也、士有足而不至者、君不好也とある、

【詩意】東川の地は望郎を得た、坐ながら西川と重きを争ふに足る、君の高風は玉堂中を傾くべく、又君の舊學は古の文冢をも劣鄙なりと言ふ價值がある、蜀の人民は良二千石を得たるに安心する、蜀

中至る所人民は畏怖する者が無くなり、竹馬にて細侯を迎へる故事も君今是れである、老人も大錢を以て劉寵を懼迎するであらう、遙に知る句溪の路、老人も稚子も相扶け擁して君を迎へるに違ひない、且や古叢祠に馬を停めては古畫を壁上に見、古畫には種種の百怪が幽拱する様を見るであらう、牛頭寺と兜率寺とは、雲木が千年蔚として壘に堆積する、乃ち醉郷に於ては舊游と追交し、筆陣を張るときは餘勇を買ふであらう、聊か詩酒の樂を以て、簿書點閱の冗事を一掃する、今や西風が好句を吹くときで、珠玉の如き好句は必ず四方に傳至するであらう、

【餘論】紀曉嵐曰く、牽於韻脚、多不自然と、余曾て詩を作りて、千秋李杜吾師是、一代曾無二次韻詩と、宋人次韻を貴んで、和韻を貴ばない、樂天微之を以て祖とし仰ぐの失である、紀評は實に敬服する、

書王定國所藏煙江疊嶂圖

【自注】王晉卿畫。

王定國所藏の煙江疊嶂の圖に書す

【自注】王晉卿畫。

江上愁心千疊山

江上の愁心千疊の山、

浮空積翠如雲煙

空に浮ぶ積翠は雲煙の如し、

山耶雲耶遠莫知

山耶雲耶遠くして知ること莫し、

【字解】(一) 江上。唐の張説の「江上愁心賦」に、江上之峻山兮、鬱崎嶇而不極、雲爲峯兮煙爲色、歎變態兮心不識とある、李白の詩に煙

煙空雲散山依然
但見兩崖蒼蒼暗

煙空しく雲散し山は依然、
但見る兩崖蒼蒼として絶谷暗きを、

絶谷

中有百道飛來泉

中に百道飛來の泉有り、

縈林絡石隱復見

林を縈り石を絡み隠復た見、

下赴谷口爲奔川

下は谷口に赴き奔川と爲る、

川平山開林麓斷

川平かに山開き林麓斷つ、

小橋野店依山前

小橋野店山前に依る、

行人稍度喬木外

行人稍く度る喬木の外、

漁舟一葉江吞天

漁舟一葉江は天を呑む、

使君何從得此本

使君何くより此の本を得たる、

點綴毫末分清妍

點綴する毫末清妍を分つ、

不知人間何處有

知らず人間何の處にか此の境有る、

此境

波江上使二人愁とある、(二) 飛來泉。瀑布を謂ふ、(三) 縈林。林木を縈りする、(四) 絡石。石巖を絡纏する、(五) 點綴。工合よく取り交して飾る、張九齡の詩に、葉作參差發、枝從點綴新とある、(六) 樊口。今の湖北省壽昌縣の西北、果子湖が江に入る處、(七) 漠漠。暗くして廣き貌、(八) 娟娟。幽にして遠き貌、(九) 翻鴉。唐人の詩に、鴉翻楓葉一夕陽動、鷺立荷花秋水明とある、(一〇) 長松。杜甫の詩に、凍泉依細石、晴雪落長松とある、(一一) 桃花。李白の詩に、桃花流水杳然去、別有天地非人間とある、(一二) 神僊。韓退之の詩に、神仙有無何渺茫、桃源之說誠荒唐、世俗那知僞與眞、至今傳者武陵人とある、(一三) 去路。陶淵明の「桃花源記」に、武陵人既出、詣太守、説如此、

徑欲往買二頃田。
君不見武昌樊口幽絕處。

四五二
太守即遣人、隨其往尋、遂迷不復得路とある、〔四〕歸來 左太冲の「招隱詩」に、王孫兮歸來、山中兮不可久留とある、

東坡先生留五年。
春風搖江天漠漠。
暮雲卷雨山娟娟。
丹楓翻鴉伴水宿。
長松落雪驚晝眠。
武陵豈必皆神僊。
江山清空我塵土。
雖有去路尋無緣。
還君此畫三嘆息。
山中故人應有招

東坡先生留まること五年、
春風江を搖かし天漠漠、
暮雲雨を卷いて山娟娟、
丹楓鴉を翻して水に伴うて宿す、
長松雪を落して晝眠を驚かす、
武陵豈必ず皆神僊ならん、
江山は我塵土を清空にす、
去路有りと雖も尋ぬるに縁無し、
君に此の畫を還して三たび嘆息す、
山中故人應に我を招く歸來の篇あるべし、

我歸來篇

【題義】 王定國が所藏する煙江疊嶂圖即ち江上には煙が茫とし、江畔を繞る疊嶂が鬱としてある畫に書せるもの、

【詩意】 江上の愁心は千疊の如くである、空に浮ぶ所の積翠は漠として雲煙の如くである、山であるか雲であるか遠くして知ることが出来ない、煙は空と爲り雲は飛散すれば山のみは依然としてある、但見る兩崖が蒼蒼として絶谷は暗昧であるを、其の兩崖より落つる百道の飛來泉は明かに見ることが出来る、其の飛泉も或は林を縈り或は石に絡うて隱處と見處とがある、其の下は谷口に赴きて奔川と爲つて流るる、其の川面は平かに山面は開き林麓は斷つてある、小橋の傍に野店がある是は山前に依る、行人は稍く喬木の外を度るを見る、漁舟は一葉浮ぶの處江は天を呑むの状がある、使君は何くより此の本を得玉ふや、一點一綴の毫末も清妍を分ちて明白である、知らず何の處に人間に此の境があるを、若し此の境の如き處あらば徑ちに往いて二頃の田を買はんと思ふ、君は見玉はずや武昌樊口幽絶の處、東坡先生は五年間も其の地に住したのである、樊口の景も春風が吹くときは江を搖かして天漠漠である、暮雲が雨を卷くときは山娟娟と見ゆ、秋は丹楓が鴉と共に翻つて水禽は宿する、冬は長松に雪が落ちて晝眠を驚かすことがある、桃花流水の境は人世にも在る、武陵源のみが神僊の境界ではない、江山の清空なる我が塵土にて充分である、君に此の畫を返還して且つ三たび嘆息する、山中

の故人は應に招隱詩を賦して歸り來れと我を招くであらう、
 【餘論】此の篇は坡公集中に在つて特に有名なる作である、紀曉嵐曰く、奇情幻景、筆足以達之と、
 又曰く、竟是爲畫作記、然摹寫之妙、恐作記反不如也と、又曰く、節奏之妙、純乎化境と、查慎
 曰く、隨手開合、結構謹嚴と、余案するに翁覃溪が所謂第五字平則第四字必仄と、此の詩の如きは
 此の法を嚴重に守るものである、

王晉卿作煙江疊嶂圖僕賦詩十四韻晉卿和之詩特奇麗
 因復次韻不獨紀其詩畫之美亦爲道其出處契闊之故而
 終之以不忘在莒之戒亦朋友忠愛之義也

王晉卿煙江疊嶂の圖を作る、僕詩十四韻を賦す、晉卿之が詩を和す、特に奇麗、因
 つて復た次韻す、獨其の詩畫の美を紀せず、亦爲に其の出處契闊の故を道ふ、而
 して之を終るに忘れざるを以てす、莒に在るの戒は亦朋友忠愛の義なり

山中舉頭望日邊、
 長安不見空雲煙、
 歸來長安望山上、

山中頭を舉げて日邊を望めば、
 長安見え空しく雲煙、
 歸來長安に山上を望めば、

【字解】「日邊」唐詩に、不
 聞人自日邊來とある、「長
 安」李白の詩に、總爲浮雲能蔽日、
 長安不見使人愁とある、「上」

時移事改應澹然、
 管絃去盡賓客散、
 惟有馬埒編金泉、
 渥洼故自千里足、
 要飽風雪輕山川、
 屈居華屋啗棗脯、
 十年俛仰龍旂前、
 却因瘦病出奇骨、
 鹽車之厄寧非天、
 風流文采磨不盡、
 水墨自與詩爭妍、
 畫山何必山中人、
 田歌自古非知田、
 鄭虔三絕君有二、

時移り事改まり應に澹然たるべし、
 管絃去り盡して賓客散じ、
 唯馬埒編金泉有り、
 渥洼故自から千里の足、
 要す風雪に飽き山川を輕んず、
 華屋に屈居して棗脯を啗ふ、
 十年俛仰龍旂の前、
 却つて瘦病に因りて奇骨を出す、
 鹽車の厄寧ろ天にあらずや、
 風流文采磨すれども盡きず、
 水墨自から詩と妍を争ふ、
 山を畫く何ぞ必ず山中の人ならん、
 田歌古より田を知るにあらず、
 鄭虔の三絶君二有り、

馬埒 馬場の短き垣、「編金泉」
 「晉書王濟傳」に、性豪侈、洛京地貴、
 濟買地爲馬埒、編錢滿之、時謂
 爲金埒とある、編はあむのであ
 る、「渥洼」水の名、甘肅の安
 西縣に在る、黨河の支流、漢代に神
 馬を渥洼の水中より得たのである、
 【六】屈居「史記滑稽傳」に、楚莊
 王有愛馬、衣以文繡、置之華屋之
 下、席以露牀、啗以棗脯とある、
 ナツメの乾したるものを棗脯と曰
 ふ、「七」龍旂 交龍を畫き、端に
 鈴を挂けたる旗、「禮記」に、龍旂九
 旒、天子之旌也、詩周頌に、龍旂陽
 陽、和鈴央央とある、「八」瘦病
 「莊子盜跖篇」に、除病瘦死喪憂患、
 其中開口而笑者、一月之中、不
 四五日而已矣とある、「九」奇骨
 「晉書桓溫傳」に、生未期而溫嶠見
 之曰、此兒有奇骨とある、「十」

筆勢挽回三百年、

筆勢挽回三百年、

欲將巖谷亂窈窕、

巖谷を將て窈窕を亂さんと欲す、

眉峰修嫺誇連娟、

眉峰修嫺連娟に誇る、

人間何有春一夢、

人間何ぞ有らん春一夢、

此身將老蠶三眠、

此の身將に老いんとす蠶三眠、

山中幽絕不可久、

山中幽絶久しかる可からず、

要作平地家居仙、

作るを要す平地家居の仙、

能令水石長在眼、

能く水石をして長く眼に在らしむ、

非君好我當誰緣、

君我を好むに非ずんば當に誰に緣るべき、

願君終不忘在莒、

願はくは君終に莒に在るを忘れざれ、

樂時更賦囚山篇、

時を樂んで更に賦せん囚山の篇、

【自注】柳子厚
有囚山賦。

白の詩に、吳地桑樹綠、吳蠶已三眠とある、【二九】家居仙 白樂天の詩に、我往東京作地仙とある、【三〇】在莒 劉向の「新序」に、桓公與管仲・鮑叔・甯戚・飲、鮑叔奉酒而起曰、祝吾君無忘其出而在莒也とある、莒國は今日の山東濟寧道に當る、【三一】囚山篇 「柳子厚囚山賦」に、聖日以理兮、賢日以進、誰使吾山之囚、吾兮滔滔とある、

【題義】王晉卿が煙江疊嶂の圖を畫き、僕は十四韻の詩を賦した、晉卿も僕の詩に和して詩を作る、詩は奇麗である、因つて再び次韻したのである、獨其の詩畫の美を嘆稱するのではない、其の出處契闊の故を道ふ、詩の結尾に在莒の事を言ふは朋友忠愛の義からである、

【詩意】山中にて頭を擧げて日邊を望めども、長安は遠くして見えす空しく雲煙を見るのみである、歸來して長安より山上を望めば、時事は移り改まり涙の漣然と流るるを免れぬ、管絃の人も賓客も皆散じ去る、豪侈を極めし馬埒編金泉の蹤のみ残る、渥注の神馬は自から千里の駿足である、風雪の中に飽き山川の險も輕んずる概がある、然るに華屋の小なる處に棗脯を啗うて屈居して、十年間も俛仰する龍旂の前に、却つて瘦病の爲に奇骨を出すに至る、鹽車の厄は人事にあらすして天命である、風流文采は消磨し盡くすことは出来ない、乃ち天機を水墨と詩とに發して其の妍を争ふ、山を畫くは何ぞ必ず山中の人と言はない、田歌を唱ふるも古より田を熟知して居る人ではない、昔鄭虔は三絶を以て名あるも君は詩畫の二絶を有する、畫に於けるの筆勢は三百年を挽回する力を見る、巖谷の如き勢を以て窈窕たる姿を亂さんとする、眉峰修嫺自から連娟に誇るに足る、人間は要するに何者かあらん春一夢のみである、此の身も將に老いんとする蠶の三眠前路は短い、山中の幽絶は久しく留まるを許さない、平地に在つて家居仙と作るに若くはない、能く水石をして長く眼に在らしむ、君が我を好むにあらざれば更に誰に緣らんと思はぬ、願はくは君も終に故郷の莒に在るを忘れず、時を樂んで更に賦せんと思ふ囚山の篇を、

【餘論】紀曉嵐曰く、與三前詩、有二仙凡之別一と、又曰く、泉者錢也、然如レ此借替、勢必至三札闡洪休一と、札闡洪休は隱語である、宋景文が唐史を修する、好んで艱深の語を爲る、歐公之を諷せんと思ひ、其の扉に書して曰く、札闡洪休と、宋之を見て曰く、非レ書三門大吉一耶、何必求レ異如レ此と、「藝文類聚」に在る、

次韻王定國會飲清虛堂

王定國が清虛堂に會飲するに次韻す

何遜揚州又幾年。何遜の揚州又幾年ぞ、

官梅詩興故依然。官梅詩興故依然たり、

何人可復間季孟。何人か復た季孟に間すべき、

與子不妨中聖賢。子と妨げず聖賢に中するを、

卜築君方淮上郡。卜築君は方に淮上郡、

歸心我已劍南川。歸心我は已に劍南川、

此身正似蠶將老。此の身正に蠶の將に老いんとするに似

更盡春光一再眠。更に春光を盡して一再眠せん、

【五】淮上郡 今日の江蘇の淮揚道、【六】劍南川 今日の四川劍閣以南を謂ふ、

【字解】

揚州 杜甫の詩に、還如三何遜在揚州一とあるが、何遜は實事揚州に在りしこと無し、杜甫の詩以來、詩人は之を用ふるのである、【二】官梅 梁の何遜早梅を詠じて、枝橫却月觀、花繞陵風臺、應知早飄落、故逐三上春一來と、【三】季孟 「論語微子十八」に、齊景公待三孔子一曰、若三季氏一則吾不レ能、以三季孟之間一待之とある、季氏よりは上に用ひ、孟氏よりは下に置くのである、【四】聖賢 清酒と濁酒であ

【題義】王定國が坡公と清虛堂に會飲して作る所の詩に次韻したのである、定國は揚州に知事と爲つて居たのである、

【詩意】何遜が揚州に在りしは又幾年ぞや、官梅を見て詩興を發する故の如く依然たるものである、何人か君を遇するに季孟の間を以てすべきぞ、子と共に妨げない聖賢の酒に中毒することは、君は今新居を卜築するに淮上郡を選ばる、我は劍南川に向つて歸心が頻りに動いて居る、此の身は正に似て居る蠶の老ゆるに逼ると、更に春光を賞盡して一再眠らんと思ふ、

【餘論】紀曉嵐は曰く、三四江西派と、公が詩としては聲聞乘に屬するもの、何遜、何人、同字の累もある、

興龍節侍宴前一日微雪。與子由同訪王定國。小飲清虛堂。
定國出數詩皆佳。而五言尤奇。子由又言昔與孫巨源同過定國。感念存歿。悲嘆久之。夜歸稍醒。各賦一篇。明日朝中以示定國也。

興龍節侍宴前一日微雪、子由と同じく王定國を訪ひ、清虛堂に小飲す、定國數詩を出す、皆佳にして、五言尤も奇、子由又言ふ、昔孫巨源と同じく定國に過ぎ、存歿

を感念して、悲嘆久し、夜歸稍や醒む、各の一篇を賦し、明日、朝中以て定國に示すなり、

天風浙浙飛玉沙。

天風浙浙玉沙を飛ばす、

詔恩歸沐休早衙。

詔恩歸沐早衙を休む、

遙知清虛堂裏雪。

遙に知る清虛堂裏の雪、

正似薔薇林中花。

正に薔薇林中の花に似たるを、

出門自笑無所詣。

門を出でて自ら笑ふ詣する所無きを、

呼酒持勸惟君家。

酒を呼んで持して勸むるは惟君が家、

踏冰凌兢戰疲馬。

氷を踏んで凌兢疲馬戦き、

扣門剝啄驚寒鴉。

門を叩きて剝啄すれば寒鴉驚く、

羨君五字入詩律。

羨む君が五字詩律に入り、

欲與六出爭天葩。

六出と天葩を争はんと欲す、

頭風已倩檄手愈。

頭風已に檄手を倩うて愈え、

背癢却得仙爪爬。

背癢却つて仙爪を得て爬く、

【字解】 〔一〕 浙浙 杜甫の詩に、

浙浙風生 砌とある、〔二〕 歸沐

「漢張安世傳」に、精ニ力於職、休沐

未嘗出とある、宦衙を早く退出す

る、〔三〕 薔薇林 「維摩經」に、薔

薇林中、不嗅餘香とある、梔子花

クチナシである、〔四〕 出門 淵明

の詩に、出門無所住、入室還獨處

とある、〔五〕 凌兢 「漢揚雄甘泉

賦」に、馳驅闔而入凌兢とある、

寒涼戰栗の處を凌兢と謂ふ、「毛詩」

に、戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄

氷とある、〔六〕 剝啄 コツコ

ツと叩く聲の形容、人に用ふるは勿

論、鳥などが鶩で叩く音にも通用す

る、〔七〕 六出 雪には六瓣があ

る、〔八〕 天葩 韓退之の詩に、天

銀瓶瀉油浮蠟酒。

銀瓶油を瀉ぐ浮蠟酒、

紫盃鋪粟盤龍茶。

紫盃粟を鋪く盤龍茶、

幅巾起作鸚鵡舞。

幅巾起ちて鸚鵡の舞を作す、

疊鼓誰摻漁陽搥。

疊鼓誰か漁陽の搥を摻つ、

九衢燈火雜夢寐。

九衢の燈火夢寐に雜はり、

十年聚散空咨嗟。

十年聚散空しく咨嗟、

明朝握手殿門外。

明朝握手せん殿門の外、

共看銀闕瞰朝霞。

共に看ん銀闕瞰朝霞を、

蠟在上、汎汎然とある、〔二〕 幅巾 「後漢書鮑永傳」に、永悉罷兵、但幅巾與諸將及同心客百餘人、詣河内とある、〔三〕 鸚鵡舞 「晉書」に、謝尚善音樂、博綜衆藝、王導以三其有勝會、謂曰、聞君能作鸚鵡舞、二坐傾想、寧有此理、不、尚曰佳、便著衣幘、而舞、導令坐者撫掌擊節、尚俯仰在中、傍若無人とある、〔四〕 漁陽搥 「後漢彌衡傳」に、曹操聞衡善擊鼓、乃召爲鼓吏、因大會賓客、閱試音節、諸吏過者、皆令脫其故衣、更著單衣、衡方爲漁陽搥、蹀躞而前、容態有異、聲節悲壯、聽者莫不慷慨とある、

【題義】 興龍節 即ち哲宗が生日、二月初七日前一、雪が微しく下る、公は子由と同伴して王定國の清虛堂を訪問すると、定國は其の所作の詩數首を示さる、其の中五言詩は特に奇である、子由言

ふ、昔孫巨源と同伴して定國を訪ひしことがある、其の時の人或は存するもあり、或は歿せるもあり、感念して悲嘆すること久しい、夜に臨んで歸り酔も醒む、乃ち詩一篇を賦して翌日定國に示したるものである、

【詩意】天風は淅淅と音を發して頻りに玉沙を飛ばす、詔恩を蒙りて早く官衙を退出して休沐を爲す、遙に知る清虛堂裏の雪は、正しく蒼菊林中の花に似て一白極まるを、乃ち門を出でて又自ら笑ふ何處に詣ると定めは無きを、是に於て酒を呼んで君が家に就いて歡を取らんと思ふ、氷を踏んで凌兢して疲馬は戦くのである、門を叩いて剝啄すれば寒鴉を驚かすに至る、羨む君が五字の詩は詩律三昧に入るを、彼の罪罪たる六出と天葩を争はんと欲するを知る、頭風の疾は已に機手を倩うて愈ゆる、背癢は却つて仙爪を得て爬くが如くである、君が我等を遇したまふ銀瓶には膏油を瀉ぐが如く蠶酒が浮ぶ、紫盃には粟を鋪くが如く盤龍茶が在る、幅巾起つて鸚鵡の舞を作したり、或は鼓を撃ちて彼の漁陽の颯を爲す、九衢の燈火は夢寐にも雜はる、十年の聚散は空しく咨嗟を引くのみ、明朝は殿門外に握手して、共に銀闕に當つて朝暾が霞を照らすの彩景を看るであらう、

【餘論】紀曉嵐曰く、收頗草草、凡長篇如二十里來龍、非三層層水抱山廻、不能結元と、

王晉卿所藏著色山二一首

王晉卿所藏の著色の山 二首

縹緲營邱水墨仙。

縹緲たる營邱水墨の仙、

浮空出沒有無間。

空に浮んで出沒する有無の間、

爾來一變風流盡。

爾來一變風流盡き、

誰見將軍著色山。

誰か見ん將軍著色の山、

【字解】〔一〕營邱 李成字は成

熙、長安の人、唐の宗室、後地を避けて北海の營邱に徙る、山水絶伎、百世に師とすべきもの、平生儒を以て自から處し、善文善詩、又情を詩酒に放ちて、興を畫理に寓すと云ふ、

年四十九を以て卒す、〔二〕風流盡 「南史張緒傳」に、從弟融齋酒於結靈前、酌飲勸笑曰、阿兄風流頓盡と、〔三〕將軍 李思訓字は建見、唐の宗室、官左武衛大將軍、時人稱して大李將軍と曰ふ、金碧著色の山水、天下の能手を極む、其の子の昭道亦能畫、天下之を小李將軍と稱す、北宗の開祖は即ち大李將軍である、

【題義】王晉卿が所藏の唐の李營邱が畫ける著色山水の圖に題して作る、

【詩意】縹緲たる營邱は實に水墨の仙である、空に浮んで山嶺が有無の間に出沒する如くである、將軍去つてより以來一變して風流の道盡きた、誰か將軍が眞の著色の山を見るや、

〔一〕

〔二〕

犖确何人似退之。

犖确何人か退之に似たる、

意行無路欲從誰。

意ふ行くに路無し誰に從はんと欲す、

宿雲解駁晨光漏。

宿雲解駁晨光漏る、

【字解】〔一〕犖确 山に大石の

多き貌、韓退之の詩に、山石犖确行徑微とある、〔二〕無路 韓退之の詩、天明獨去無道路とある、〔三〕

獨見山紅澗碧時。獨見山紅澗碧の時、

廟碑に、雲陰解駁、日光穿漏とある、【四】山紅 韓退之が山石詩に、山紅澗碧紛爛漫とある、

【詩意】 犖确たる道を行かんと思ふ人は誰か退之に似て居るや、行かんと意ふも路案内する者が無い、宿雲に駁雜なる陰を消散して晨光の漏るるを見る、獨り山紅澗碧の状景を見る時である、

【餘論】 紀曉嵐曰く、用三山石犖确句一欠妥、讀レ之似三退之犖确一と、犖确たる氣象が退之に似て居ると言ふのであるか、犖确たる詩境が似て居ると言ふのであるか、退之が山石詩中の字を用ひんが爲め強ひて之を押したる如く思はる、紀が評して欠妥と曰ひたるは大に當る、然れども詩は文と異なることを決して忘れてはならぬ、

解駁 青か白か、明か暗か、不分明なるを駁と曰ふ、韓退之が「南海神

次韻黃魯直效進士作二首

黃魯直が進士の作に效ふに次韻す 二首

歲寒知松柏

歲寒くして松柏を知る

龍蟄雖高臥。雞鳴不廢時。

龍蟄高臥すと雖も、雞鳴時を廢せず、

炎涼徒自變。茂悅兩相知。

炎涼徒に自から變じ、茂悅兩ながら相知る、

已負棟梁質。肯爲兒女姿。

已に棟梁の質を負ふ、肯て兒女の姿を爲さんや、

那憂霜質買。未喜日遲遲。

那ぞ憂へん霜の質買たるを、未だ喜ばず日の遲遅たるを、

難與夏蟲語。永無秋實悲。

夏蟲と語り難し、永く秋實の悲無し、

誰知此植物。亦解乘天驪。

誰か知らん此の植物、亦解す天驪を乗るを、

【字解】

【一】龍蟄 杜甫の詩に、蟄龍三冬臥、老鶴萬里心とある、【二】雞鳴 「毛詩」に、雞鳴喈喈、「傳」に、雞猶守時而鳴とある、【三】炎涼 白樂天の詩に、秋夏炎涼變とある、【四】茂悅 陸士衡の「歎逝賦」に、信松茂而柏悅とある、【五】棟梁 「世説」に、孫興公齋前、種三松一株、鄰居謂之曰、松樹子、非不楚楚、可憐但永無梁棟用耳と、【六】質買 韓退之の「琴操」に、雪霜質買、齊三麥之茂と、目の明かならざる貌、「檀弓」にも蒙袂扶輪屨、質買然來とある、【七】遲遲 「毛詩」に、春日遲遲、采芣苢と、【八】夏蟲 「莊子秋水篇」に、夏蟲不可語於冰と、【九】秋實 「三國志吳諸葛恪傳注」に、虞喜志林曰、樂三春藻之繁華、忘秋實之甘口と、【一〇】植物 「周禮」に、大司徒、以三土會之法、辨五地之物生、一曰山林、其動物宜毛物、其植物宜阜物と、【一一】乘天驪 「毛詩」に、民之秉彜、好是懿德と、

【題義】

黃魯直が進士と爲る試験問題、即ち歲寒知松柏と、款塞來享の二題に就いて詩を作る、乃ち其の詩に次韻したるものである、歲寒知松柏も漢代の詩、款塞來享も漢書宣帝紀中の語、

【詩意】

龍が蟄伏するは高臥で貴いが、雞が鳴いて時を廢せざるも貴し、炎涼は徒に自然と變じ往く、松の茂と柏の悦と兩ながら時節を知る、松柏は貴き樹ではあるが棟梁の材とならない質を持つて居る、が歲寒にも凋まぬ姿は兒女の姿とは異なる、冬日の霜質買たるにも憂へないが、又春日の遲遅たる桃李は喜ぶが我は喜ばない、夏蟲は冬を知らない、冬を知らない蟲とは與に語る資格は無い、

又秋にのみ實る一時の榮も悲も無い、誰人か此の植物の獨絶の所を知る、若し知らば天の弊を乘ると同じく懿徳が永く不變であることを知るのである、

款塞來享

款塞來り享す

蠡爾氏羌國天誅亦久稽

蠡爾たり氏羌國、天誅も亦久しく稽す、

既能知面内不復議征西

既に能く面内を知る、復た征西を議せず、

斥埃銷兵火邊城息鼓聲

斥埃兵火を銷し、邊城鼓聲息む、

輸忠修貢職棄過爲黔黎

忠を輸して貢職を修め、過を棄つるは黔黎の爲なり、

雪滿流沙靜雲沈太白低

雪滿ちて流沙靜か、雲沈んで太白低る、

巍巍二聖治盛徳古難齊

巍巍たる二聖の治、盛徳古齊しくし難し、

【字解】

蠡爾 「詩小雅」に、蠡爾釐荆、大邦爲仇と、
氏羌 「商頌」に、自彼氏羌と、氏は低と同じ、西戎を謂ふ、
天誅 天の誅する所を言ふ、「越絶書」に、壞人之善母後世、敗人之成天誅行と、「孟子」に、天誅造攻自牧宮と、
面内 「三國志高堂傳」に、使四表同風、回首面内、德教光照、九服慕義、固非俗吏之所能也と、
斥埃 「説文」に、埃封土爲臺、以記里也と、「李廣傳」に、亦遠斥埃と、
棄過 漢文帝は書を匈奴に與へて棄細過と、
黔黎 唐文宗は詩を作り、願蒙四海一福黔黎と、
二聖 晉宗と皇太后を謂ふ、

【詩意】

蠡爾たる微小の氏羌國も、天誅を畏るるが故に我が朝廷の命を善奉する、既に能く氏羌が其の面内を知れば、朝廷は決して復た征西を議することが無い、斥埃の高臺も烽火を揚げる必要も無い、邊城も亦鼓聲を撃つ必要も無い、忠誠を輸して貢職を實修すれば、朝廷は從來の過を棄て我が良民と爲して撫愛する、雪は滿ちて今や流沙が靜寂である、雲は沈んで太白星が低く垂る、低く垂れる星に反して二聖は巍巍として高く良治の徳を保つ、其の盛徳は古の明天子も齊しきことは出来ない、

【餘論】

紀曉嵐曰く、此格非東坡所長、故二詩皆不佳、邇來選長律二者、必録之、震於名耳と、余案するに坡公の作としては順序次第を明白に敍べてある、公が集中に排律は少きを以ての故に、紀は此格非所長と評したるが、余は排律として上乘と思ふのである、

夜直玉堂攜李之儀端叔詩百餘首讀至夜半書其後

夜玉堂に直し、李之儀端叔の詩百餘首を攜へて、讀んで夜半に至り、其の後に書す

玉堂清冷不成眠

玉堂清冷にして眠を成さず、

伴直難呼孟浩然

伴直呼び難し孟浩然、

暫借好詩消永夜

暫く好詩を借りて永夜を消し、

每逢佳處輒參禪

佳處に逢ふ毎に輒ち參禪す、

【字解】

伴直 「唐孟浩然傳」に、與王維爲忘形交、維私邀入内署、適明皇至、浩然匿牀下、維以實對、帝喜曰、朕聞其人、而未見也、詔浩然出、誦所爲詩、至不才明主棄、帝曰、卿不求仕、朕

愁侵硯滴初含凍。

愁は硯滴を侵して初めて凍を含み、

喜入燈花欲鬪妍。

喜は燈花に入りて妍を鬪はさんと欲す、

寄語君家小兒子。

語を寄す君が家の小兒子、

他時此句一時編。

他時此の句一時に編せよ、

し、禪道に參入する義、【四】硯滴 水注を謂ふ、「雲林石譜」に、鼎州有石、其質磊砢、滌盡黃土、即空虛、有小如拳者、可貯水爲硯と、皓然の詩に、硯滴穿池小とある、【五】一時編 「白劉唱和集序」に、命小姪龜兒編錄成兩卷、仍寫二本、一付夢得(劉夢得)小兒崙郎、各令收藏兩家集とある、

【題義】 夜玉堂に宿直して樞密院編修官なる李之儀の詩を攜へて、之を讀んで夜半に至り且つ其の後に題する詩を作る、

【詩意】 玉堂は信に清冷にして眠ることが出来ない、王摩詰は昔孟浩然を竊に禁内に呼び入れしことあるが、今は君を呼ぶことは不可能である、暫く君の好詩を借りて永夜を愉快に消し、讀んで佳句に逢ふ毎に沈思瞑目する、唯愁ふる所は水注が凍つて字を書くこと出来ず、喜ぶ所は燈花と妍を鬪はさんと欲するに在る、君が家の小兒子に注意するが、他時に於て此の句を一時に編輯して散逸せしめざるやうにせよ、

【餘論】 紀曉嵐曰く、氣機流暢、然非三五六句、茁實撐得住、則太滑矣と、余案するに全首聊かも佛語

に關すること無く、參禪の二字のみ使用する頗る妥を欠く、李の詩に參禪の語あるを以て之を傲すと、查慎云ふ、然らば不レ得レ已と言ふのみ、

次韻王定國得晉卿酒相留夜飲

王定國が晉卿の酒を得て相留めて夜飲するに次韻す

短衫壓手氣橫秋。

短衫手を壓し氣秋に横はる、

更著仙人紫綺裘。

更に著く仙人の紫綺裘、

使我有名全是酒。

我をして名あり全く是れ酒ならしめば、

從他作病且忘憂。

從他病を作し且つ憂を忘るるに、

詩無定律君應將。

詩に定律無し君應に將なるべし、

醉有眞卿我可俟。

醉に眞卿有り我俟なるべし、

且倒餘尊盡今夕。

且く餘尊を倒して今夕を盡さん、

睡蛇已死不須鉤。

睡蛇已に死して鉤を須ひず、

【字解】 【一】短衫 小襦と同じ、衫末に袖端なきもの、【二】壓手 明白でないが、手を壓へて活潑なる貌を指すと思ふ、【三】紫綺裘 李白の詩に、解我紫綺裘、且換金陵酒とある、【四】使我 晉の張翰傳に、常曰使我有身後名、不如此即時一杯酒、時人貴其曠達とある、【五】從他 唐詩に、從他人説從他吟とある、「人ノ説ニ從他セ吟ニ從他ス」である、「他ニ從フ」のではない、【六】作病 「晉顧榮傳」に、

縱酒酣暢、謂友人張翰曰、唯酒可ニ以忘憂、但無レ如ニ作病何ニ耳とある、【七】定律 律は五律、又は七律の意義では無く法の意義

である、杜甫の詩に、詩律奉公問とある、【八】可俟「宋利放傳」に、字明逸、隱終南山、自號雲溪醉侯とある、【九】睡蛇 前に辨す、

【題義】王定國が王晉卿が貽る所の酒あるが故に坡公を留めて夜飲するの詩に次韻したのである、

【詩意】一人が短衫にして壓手する状は豪氣横秋の概がある、一人は更に仙人の服する紫綺裘を著ける、謂ふ我等をして飲酒家として有名ならしめば、何ぞ關せんや病を作すも兎に角且くは憂を忘れる、詩には定法は無い君は宜しく詩將となるべきである、醉には眞卿がある我は其の眞卿の侯となる、且く餘尊の酒を傾け盡して今夕を愉快に過ぐべきである、睡蛇は已に眞の蛇で無いと悟りしからには鈎なぞはいらぬ、

【餘論】紀曉嵐曰く、三四太滑と、又曰く、結末粗獷太甚と、浮にして實ならざるを滑と謂ふ、粗獷は精温の反對、此の紀評が當るか當らざるかは讀者自ら之を知れ、余は使我、卿我、有名、醉有、且忘、且倒、此の同字を七律の中に於て使用するを見れば、詩無定律は王の謂ひではなく、夫子自らの謂である、

范景仁和賜酒燭詩復次韻謝之

【自注】時公方進新樂。

范景仁酒燭を賜ふ詩に和せらる、復た次韻して之を謝す

【自注】時に公方に新樂を進む。

笙磬分均上下堂。

笙磬分均す上下の堂、

游魚舞獸自奔忙。

游魚舞獸自ら奔忙す、

朱絃初識孤桐韻。

朱絃初めて識る孤桐の韻、

玉瑄猶聞秬黍香。

玉瑄猶ほ聞く秬黍の香、

萬事今方咨伯始。

萬事今方に伯始に咨ひ、

一斑我亦愧眞長。

一斑我亦眞長に愧づ、

此生會見三雍就。

此の生會ま見る三雍の就るを、

無復寥寥嘆未央。

復た寥寥未央を嘆ずる無し、

【字解】【一】笙磬 公の自注に、

舊法、堂上之樂、皆受笙均、堂下之樂、皆受磬均とある、「困學紀聞」に、凡十二律皆有二變、一律之内、通五聲、分爲七均とある、【二】游魚舞獸 「列子湯問篇」に、瓠巴鼓琴、而鳥舞魚躍とある、「尙書」に、擊石拊石、百獸率舞とある、【三】奔忙 杜甫の詩に、再平水土犀奔忙とある、【四】朱絃 公の自注に、舊樂金石聲高、而絲聲微、今樂金石與絲聲皆著とある、【五】孤桐

「尙書」に、嶧陽孤桐、孔氏云、嶧山之陽、特生桐、中琴瑟とある、【六】玉瑄 「後漢書律歷志」に、章帝時、零陵文學奚景、於冷道縣舞祠下、得白玉瑄と、「續列仙傳」に、王母獻舞白玉瑄云、吹之以和八風と、玉にて作る簾の如くにして六孔ある管の樂器を瑄と曰ふ、【七】秬黍香 公の自注に、舊法以尺生律、今以黍定律、以律生尺と、「前漢書律歷志」に、度者、分寸尺丈引也、所以度長短也、本起黃鐘之長、以子穀秬黍中者と、長短を度るに秬黍を以てしたものである、【八】萬事 公は前に「次韻胡完夫」の詩に於て萬事會須咨伯始と、「後漢書」に、胡廣字伯始、練達事體、明解朝章、京師語曰、萬事不理問伯始、天下中庸有胡公と、【九】眞長 「晉王獻之傳」に、年數歲、嘗觀門生榜蒲曰、南風不競、門生曰、此郎亦管中窺豹、時見一斑、獻之怒曰、遠慙荀奉倩、近愧劉眞長、拂衣而去と、【一〇】三雍 「後漢書儒林傳」に、建武五年、修起太學、中元元年、初建三雍、明帝即位、親行其禮と、明堂と靈臺と辟雍と、之を三雍と謂ふ、

【題義】坡公前に賜酒燭二詩を作る、景仁之に和して詩を示さる、更に之に次韻したるもの、元祐三年に新樂を起せしことあり、景仁が詩乃ち其の事を詠す、公の和詩徹頭徹尾樂を言ふ所以である、

【詩意】上堂に在る人は笙を吹き下堂に在る人は磬を撃つ、其の妙音に感じて魚も獸も或は遊び或は舞ひ或は奔忙する、朱紘は初は識る孤桐が韻の佳を、玉瑄は舊の如く猶ほ秬黍の香氣を聞く、萬事は今方に音樂に精なる伯始に咨ふがよい、少しは我も亦眞長に愧づることを知つて居る、幸に此の身生れて三雍宮が成就して雅樂を聞くを得、復た未央宮の寂寂寥寥たるを嘆ずる要は無い、

【餘論】舊樂を是とし、今樂を非と言ふのでも無く、新樂が是で舊樂が非なりと言うたのでも無く、要は有意無意の間に在る、

蘇東坡詩集 卷三十一

古今體詩 四十九首

次韻劉貢父春日賜幡勝 劉貢父が春日幡勝を賜ふに次韻す

寬詔隨春出內朝。寬詔春に隨つて内朝より出づ、
 三軍喜氣挾狐貂。三軍の喜氣狐貂を挾む、
 鏤銀錯落翻斜月。鏤銀錯落斜月に翻り、
 剪綵繽紛舞慶霄。剪綵繽紛慶霄に舞ふ、
 臘雪強飛纔到地。臘雪強飛して纔に地に到り、
 曉風偷轉不驚條。曉風偷轉して條を驚かさず、
 脫冠徑醉應歸臥。脫冠して徑醉應に歸臥すべし、
 便腹從人笑老韶。便腹人の老韶を笑ふに従かず、

【自注】是日暮次賜酒。

古今體詩 次韻劉貢父春日賜幡勝

【字解】(一) 寬詔 「後漢書」に、春日下寬大詔と、(二) 內朝 「禮記玉藻」に、朝服以日視朝於內朝と、(三) 三軍 章孝標、春雪の詩、朱門到曉難盈尺、盡是三軍喜氣消と、(四) 狐貂 「揚子」に、貂狐不亦懷乎と、狐裘貂冠にて身を飾る、(五) 錯落 「班孟堅西都賦」に、隋侯明月、錯落其間と、(六) 剪綵帛を斷ち切る、(七) 慶霄 謝宣遠の詩、慶霄薄兮汾陽と、(八) 臘雪 公の自注、前一日微雪と、(九) 到地 白樂天の詩、猶勝嶺南看、霧

勞不到地と、杜子美の詩、南雪不到地と、【一〇】不驚條「鹽鐵論」に、周公之時、風不鳴條、雨不破塊と、【二】脫冠謝

靈運の詩、脫冠謝三朝列と、【三】便腹 肥えたる腹、

【題義】劉貢父が立春の日に幡勝を賜はりたるを喜ぶ詩に次韻したもの、

【詩意】寛大な詔書は内朝より出たのである、三軍の士氣は喜んで皆狐貂を挾むが如くである、其の綵勝は鏤銀錯落して斜月に翻翻する、其の剪綵は繽紛として慶霄に舞ふ、臘雪は強ひて飛ぶかの如く纒に地上に到る、曉風は偷轉するかの如く枝條を鳴驚しない、冠を脱いで徑ちに酔ひ酔へば應に歸臥するがよい、便便たる太鼓の如き腹は老韶に比して人は笑ふがそれは頓著せぬがよい、

再和

再和

與君流落偶還朝。

君と流落偶ま朝に還る、

過眼紛綸七葉貂。

過眼紛綸七葉の貂、

莫笑華顛羞采勝。

笑ふ莫かれ華顛采勝を羞づるを、

幾人黃壤隔青霄。

幾人か黃壤 青霄を隔つ、

行吟未許窮騷雅。

行吟未だ許さず騷雅を窮むるを、

坐嘯猶能出教條。

坐嘯猶ほ能く教條を出す、

【字解】【一】紛綸 紛は紛紀、綸は經綸、或は治まり、或は亂れたるを云ふ、【二】七葉貂 左太沖の詩、金張籍舊業、七葉珥漢貂と、【三】華顛 白髮を謂ふ、「後漢崔駰傳」に在り、【四】羞 一本に飄に作る、飄がよい、【五】采勝 「荆楚歲時記」に、立春之日、以剪綵爲燕戴之、貼宜春二字と、【六】黃壤

記取明年江上郡。

記取す明年江上の郡、

五更春枕夢春韶。

五更春 枕春韶を夢むるを、

許國公神道碑に、不多教條と、【九】春韶 韶は韶光、又は韶華、又は韶氣、又は韶和などと成語して春のノドカなるを言ふ、本來虞舜の作りし樂の名、

【詩意】余と君は同様に四方に流落したが偶ま中央の朝廷に還ることが出来た、過去の事を言うて見ると紛綸して居るが七代の貂を経て居る、笑うてはいかぬ白頭の老人が采勝の飄るを喜ぶ少年の氣を起したるを、生きて居ればこそだ、多くの人は已に地下に去つて青霄と隔りて居るではないか、又目的なくさまようて行吟する屈原となるを許さない、坐嘯して猶ほ能く教條を出示するの身分である、今日より記憶して置く明年は江上の郡に在つて、朝も晏起して春韶を夢みることであらうと、

【餘論】紀曰く、三四眞語、春韶不妄と、生湊にして妥當ならざる所以は韻字の然らしむるに由る、少陵は勿論、韓退之と雖も強ひて險韻を用ひて作りし詩は無い、仄韻の長古は別とし、平韻の近體詩は大底穩妥なるものを選んで作る、下平の二蕭險韻に屬するものではないが、平仄に拘泥せざる古體なれば妥當平穩の好句を得んも、平仄を以て生命とする今體には少陵の詩聖も此の韻にて作る七律は五首に過ぎず、韓に至りては一二首に過ぎず、公は疊韻して四首に至る、英雄欺人の態度も、後世紀の如き正直なる人は名などには畏れず、實に據つて攻撃する、正直の攻撃には英雄も甲を脱がざるを得ない、後生公の詩宗に歸命する者も、公の善處を學びて、公の惡處を學んではいかぬ、

葉公秉王仲至見和次韻答之

葉公秉、王仲至和せらる、次韻之に答ふ

衫絺方暑亦堪朝

衫絺暑に方り亦朝するに堪へたり、

【字解】(一) 衫絺 葛布である、

歲晚淒風憶卓貂

歲晚淒風卓貂を憶ふ、

【論語鄉黨篇】に當レ暑衫絺絺、必表面

共喜鷓鴣歸禁籞

共に喜ぶ鷓鴣禁籞に歸するを、

武元衡の詩、頭戴儒冠一脫卓貂と、

心知日月在重霄

心に知る日月重霄に在るを、

【三】 鷓鴣 百官が入朝する整列の

君如老驥初遭絡

君は老驥の初めて絡に遭ふ如く、

【四】 禁籞 「漢書宣帝紀」

我似枯桑不受條

我は枯桑の條を受けざるに似たり、

に、池籞假與貧民と、籞とは折竹

強鐻霜須簪彩勝

強ひて霜須を鐻きて彩勝を簪にす、

【五】 日月 「周易」に、日月麗乎天、

蒼顏得酒尙能韶

蒼顏酒を得て尙ほ能く韶たり、

百穀草木麗乎土、重明以麗乎正、

乃化成天下と、

【六】 老驥 曹操の詩、前に辨ゼリ、

【七】 遭絡 鮑明遠の詩、馳馬金絡頭と、絡は絡縛、まとひしげる、

枯桑 「毛詩」に、蠶月條桑と、鄭氏云、條桑枝落、采其葉也と、

【九】 鐻霜須 「雲仙雜記」に、王僧虔、晚年惡白髮、一日對客、

左右進銅鑷、僧虔曰、却老先生至矣と、俗に毛ぬき器、白髪を抜くのである、

【一〇】 蒼顏 鮑照の詩、韶顏慘驚節と、白樂天の詩、

夜鏡隱白髮、朝酒發紅顏と、

【題義】 秘書監たる葉公秉と秘書少監である王仲至の二人が和せられたるを以て次韻して酬答するも

のである、

【詩意】

衫絺の服は暑に當りて亦朝すべきである、歲晚即ち秋冬に朝するには卓貂の暖かきを憶ふ、我も二君も共に喜ぶ鷓鴣の班と爲つて禁籞に出入することを、其の心には知る聖明の天子が上に在ますことを、而かも君等は老驥の初めて金絡に遭ふ如きの感喜があらうが、我は枯桑が條を受けざる感憂がある、強ひて白髪を鐻きて彩勝を簪にする、而して霜顏は酒の爲め尙ほ能く韶なる状を飾る、【餘論】 紀曰く、此韶字亦不妥と、鮑照の韶顏を上下に折用したのであるから、公よりは不妥と言ふであらう、

再和

再和

衰遲何幸得同朝

衰遲何の幸ぞ同朝を得たる、

溫勁如君合珥貂

溫勁君の如きは合に珥貂なるべし、

誰惜異才蒙徑寸

誰か惜まん異才徑寸を蒙るを、

自慚枯枿借凌霄

自ら慚づ枯枿の凌霄を借ることを、

光風泛泛初浮水

光風泛泛初めて水に浮び、

紅糝離離欲綴條

紅糝離離として條に綴らんと欲す、

後日一尊何處共

後日一尊何の處にか共にし、

【字解】

(一) 珥貂 珥は耳瑣、ミノノタマ、貂は冠の飾、後漢書輿服志に、武冠侍中常侍、加黃金瑣、貂尾爲飾と、貴人高官の代名詞となる、(二) 徑寸 「左太冲咏史詩」に、蠶蠶澗底松、離離山上苗、以彼徑寸莖、隆此百尺條と、(三) 枯枿 柳子厚の文、朽枿腐敗、不能生植と、(四) 凌霄 花の名、ノウセンカヅラ、鬼目、勢客の異名がある、(五) 紅糝 韓退之の詩、始

奉常端冕作咸韶

奉常端冕咸韶を作さん、

見洛陽春、桃枝綴紅糝と、糝は糝粒なぞと云うて、ツブである、【六】

離離「詩」に、其實離離と、繁る形容、【七】奉常 官名、【八】端冕「樂記」に、君子端冕、則有敬色と、禮服禮冠である、【九】咸韶「樂記」に、黃帝樂曰咸池、舜樂曰韶韶と、

【詩意】余が衰遲の軀を以て同朝を得たるは實に幸福である、溫和にして而かも勁氣ある君の如きは良に珥貂の立派なる官に適合する、誰が惜むや天下の異才が異才を置く所でない役に勤務するを、余は自ら慚ぢる枯枿が獨立する能はずして他の凌霄花を借りて身を保つ如きを、光風は泛泛として初めて水に浮び、紅糝は離離として今や條枝に綴らんとする節である、此の好期を賞して後日一尊を共に飲み、奉常端冕古風の咸韶を作さんは何處にするやと考ふ、

和王晉卿送梅花次韻 王晉卿が梅花を送るに和し、次韻す

東坡先生未歸時 東坡先生未だ歸らざる時、

自種來禽與青李 自ら種う來禽と青李と、

五年不踏江頭路 五年踏ます江頭路、

夢逐東風泛蘋芷 夢は東風を逐うて蘋芷に泛ぶ、

【字解】【一】未歸時 黃州に在りし時、【二】來禽 林檎、リンゴの別名、青李と共に王大法帖の名、【三】五年 黃州を離れて後、【四】爲誰容 杜荀鶴の詩に、承恩不_レ在_レ貌、敬_二妾若爲容_一と、【五】獨笑

江梅山杏爲誰容 江梅山杏誰が爲に容づくる、

獨笑依依臨野水 獨笑依依として野水に臨む、

此間風物君未識 此の間の風物君未だ識らず、

花浪翻天雪相激 花浪天に翻つて雪相激す、

明年我復在江湖 明年我復た江湖に在らん、

知君對花三歎息 知る君が花に對して三たび歎息するを、

【題義】王晉卿が梅花を贈られ竝に詩を以てせらるるに、次韻して作る、

【詩意】東坡先生が曾て黃州に在りし時、自ら其の子の爲に來禽と青李とを種う、既にして他に適いて五年間黃州江頭路を踏まない、而かも夢魂は東風を逐うて江の蘋芷に泛んだのである、江梅も山杏も開きて居るは誰に見て貰ふ意である、獨歩微笑しながら依依として野水に臨む、此の間の風物は君の未だ識らざる處である、花浪は天に翻つて雪の如くに浪が激す、明年は我は復た官を辭して江湖の上に在らん、知る君が花に對して三たび歎息することを、

【餘論】紀曰く、自說自話、題目只借作映發、蹊徑自別と、毛西河は公の詩を評して、詞繁意盡と言ひたるが、此の題目にても知る已に和とあれば、次韻の二字無用と思ふ、且つ送と贈とを同一に公は使用する癖がある、西河の所謂詞繁は公の病に中る、

馮應榴曰く、此翻_二用_一巡_二驚_一共_二索_一梅花笑一句也と、【六】三歎息 「禮記」に、清廟之瑟、朱絃而疏越、一唱而三歎、有_二遺音_一者と、

次韻王晉卿惠花栽栽所寓張退傅第中

王晉卿が花栽を恵むに次韻す、寓する所の張退傅の第中に栽す、

坐來念念失前人。坐來念念前人を失ふ、

共向空中寓一塵。共に空中に向うて一塵を寓す、

若問此花誰是主。若し問はば此の花誰か是れ主と、

天教閒客管青春。天は閒客をして青春を管せしむ、

【字解】(一) 坐來 柳子厚の詩、

坐來念念非昔人、萬遍蓮花爲誰用

と、(二) 一塵 韓退之の詩、下視

寓九州、一塵集毫端と、(三) 誰

是主 白樂天の詩、三川徒有主、風

【題義】王晉卿が花を恵まる、其の花は王が寓居する張退傅が第邸中に栽植せしものである、

【詩意】ほんの一秒時の間に前人は亡失する、彼我ともに空中に向うて一塵を寓するが如きもの、若しや此の花の主は誰であると問はば、天は答へんそれは定主はない唯閒客をして青春を管領せしむるのみであると、

【餘論】此等の詩普通の詩とは言へない、偶又は謎の如きもの、

次韻王晉卿上元侍宴端門

王晉卿が上元に端門に侍宴するに次韻す

月上九門開。星河繞露臺。 月上りて九門開き、星河露臺を繞る、

君方枕中夢。我亦化人來。 君方に枕中の夢、我亦化人し來る、

光動仙毬纒。香餘步輦回。 光は仙毬を動かして纒り、香は步輦に餘りて回る、

相從穿萬馬。衰病若爲陪。 相從うて萬馬を穿つ、衰病若爲が陪せん、

【字解】(一) 九門 沈佺期の詩、九門開洛邑、雙關對河橋と、九關と同じ、天上の門を言ふ、(二) 露臺 「王註」上元日、端

門築露臺、高丈餘、優人妓女、皆列其上と、(三) 枕中夢 一枕邯鄲盧生の夢である、前に辨ぜり、(四) 化人來 「列子周穆王篇」

に、西極之國、有化人一來と、何物かと云ふことなく、人と化するもの、本來は佛語である、(五) 仙毬 「王註」に、上元端門、放燈

至夜關、綵山上、繩下仙毬妓、天子乘步輦還内と、

【題義】王晉卿が上元即ち正月十五日の夜端門の宴に侍して詩を作るに次韻したるもの、

【詩意】月が天上の九門を開いて出るときは天子の九門も開く、星河は皓皓として此の露臺の上を繞る、君は此の情邯鄲盧生の夢の感があらう、我も亦化して來るなれどそれは他は知ることが出來ない、燈火の光は仙毬に動いて樓上より纒り、而して香の氣は步輦に餘りて回る、化人でない我は相從うて萬馬を穿ちたく思ふも、衰病若爲がして追陪することが出來ようぞ、

王鄭州挽詞

羨君華髮起琳宮。羨む君が華髮琳宮より起ち、

右輔初還鼓角雄。右輔に初めて還り鼓角雄なり、

【字解】(一) 琳宮 仙觀、又佛

寺を云ふ、集聖集琳宮は仙觀の詩、

琳宮事事清は佛寺の詩、王が生前に

千里農桑歌子產 千里の農桑子産を歌ひ、

一時冠蓋慕蕭嵩 一時の冠蓋蕭嵩を慕ふ、

那知聚散春糧外 那ぞ知らん聚散春糧の外、

便有悲歡過隙中 便ち悲歡あり過隙の中、

京兆同僚幾人在 京兆の同僚幾人が在る、

猶思對案筆生風 猶ほ思ふ案に對して筆風を生ずるを、

【字解】「一」白髮 太白の詩、白髮四老人、昂藏南山側と、「二」商顔 商山である、四皓の事、前に屢ば注せり、「三」山中 陶高景の詩、山中何所_レ有と、「四」無物 「晉書王導傳」に、此中空洞無_レ物と、「五」何足關 一本に定何間に作る、陶淵明の詩、於_レ今定何間とあるに據れば可なるものに似たるも、何足關が強きやに思ふ、「六」古井 孟郊の詩、妾心古井水、波瀾誓不起と、白樂天の詩、無_レ波古井水、有_レ節秋竹竿と、

【題義】王鄭州名は克臣、字は子難、國初の功臣審琦の曾孫、克臣龍圖閣直學士大中大夫の官を以て卒す、年七十六、其の挽詩である、

【詩意】羨む君が老境白首に及んで琳宮より起ち出で、右輔に初めて還りたるときは鼓角雄にして盛んであつた、君は子を誨ふるに農桑を話して古の子産を歌賞せしめた、其の教育の結果でもあらう一時王家の冠蓋相望むの繁昌は蕭嵩を慕はしめた、那ぞ知らんや聚散は糧を吞く外であることとを、便ち又悲歡も過隙の中で迅速に變化する、京兆に於ての同僚は凡そ幾人が在るや、今猶ほ思ふ君が机案に對して字を書し筆端風を生ずるの概ありしことを、

書王定國所藏王晉卿畫著色山二首

王定國藏する所の王晉卿が畫著色の山に書す 二首

白髮四老人何曾在商顔 白髮の四老人、何ぞ曾て商顔に在らん、

煩君紙上影照我胸中山 君が紙上の影を煩はし、我が胸中の山を照らす、

山中亦何有木老土石頑 山中亦何か有る、木老い土石頑、

正頼天日光澗谷紛爛斑 正に天日の光に頼りて、澗谷紛として爛斑、

我心空無物斯文何足關 我が心空にして物なし、斯文何ぞ關するに足らん、

君看古井水萬象自往還 君看よ古井の水、萬象自から往還す、

古今體詩 書王定國所藏王晉卿畫著色山二首 四八三

【題義】 王定國が家に藏する王晉卿が著色の山水に題したるもの、定國は花鳥を描き晉卿は山水を多く畫きたる人、

【詩意】 白髮の四老人は、何ぞ唯商山の中に在るのみでない、君が巨筆を揮うて其姿影を寫し、以て我が胸中の山を照らさしむ、而して山中は亦何物か有るや、山中は唯木の老いたると土石の頑なるが有るのみである、それが正しく天日の光輝に依頼して、澗谷が紛として爛斑の美を示すのである、我が心中は空虚にして一物も無い、斯文に於て何の關する資格もない、君看玉へ古井の水は、波起たざるが故に萬象が自から往還できるのである、

(一)

(二)

君歸嶺北初逢雪。

君は嶺北に歸り初めて雪に逢ひ、

我亦江南五見春。

我亦江南に五たび春を見る、

寄語風流王武子。

語を寄す風流の王武子、

三人俱是識山人。

三人俱に是れ山を識るの人、

五年、定國賓州三年、晉卿均州三年と、

【詩意】 君が嶺北に歸りし時は初めて雪に逢ひ、我も亦江南にて五度春風を見る、語を寄する風流の

【字解】 (一) 王武子「晉書王濟傳」に、王濟字武子、少有逸才、

風姿英爽、氣蓋一時と、武子は常山公主の駙馬、以て王晉卿が英宗の女の駙馬たるに比す、(二) 三人公と定國と晉卿、「王註」に、公黃州

王武子、此の三人は皆是れ善く山を識つて居る人である、

【餘論】 紀曰く、前首意境深微、氣亦渾厚と、晉卿は宣和畫譜に其の傳を載せ、定國は畫史會要に略傳を載せてある、若し今日此の畫に此の讚あれば、希世の國寶なるべきも、それは要するに空想である、

呈定國

定國に呈す

舊病應逢醫口藥。

舊病應に醫口藥に逢ふべし、

新妝漸畫入時眉。

新妝漸く畫く入時の眉、

信知詩是窮人物。

信に知る詩は是れ窮人の物なるを、

近覺王郎不作詩。

近覺る王郎が詩を作らざるを、

詩序に、詩人少達而多窮と、

【詩意】 舊病の再發したるなれば必ず醫師の命する藥を用ふるがよい、新妝は漸く畫き得て時様の眉を爲すを得、信に知る詩を作れば其の人窮するを、近ごろ王郎が詩を作らざるは其の窮を厭ふためでもあらう、

【餘論】 起句は解すべきも承句は何の爲なるや全く解することが出来ない、詩に依つて案すれば題目を戲呈定國の四字と爲さば可い、

【字解】 (一) 舊病 馮應榴曰く、

暗用二柳子厚書、凡人好詞工書、皆病癖意と、(二) 新妝 徐悝の妻劉氏の詩、落日更新妝と、朱慶餘の詩、妝罷低聲問二夫婿、畫眉深淺入時無と、(三) 窮人物 歐陽修の梅聖俞

寄傲軒

寄傲軒

先生英妙年。一掃千兔禿。

先生英妙の年、千兔を一掃して禿す、

仕進固有餘。不肯踐場屋。

仕進固より餘あり、肯て場屋を踐まず、

通闌何所傲。傲名非傲俗。

通闌何の傲る所ぞ、名に傲るも俗に傲るにあらず、

定知軒冕中。享榮不償辱。

定んで知る軒冕の中、榮を享くるは辱を償はず、

豈無自安計。得失猶轉轂。

豈自安の計無からん、得失猶ほ轂を轉ずるがごとし、

先生獨揚揚。憂患莫能瀆。

先生獨り揚揚、憂患能く瀆すこと莫し、

得如虎挾乙。失若龜藏六。

得は虎の乙を挾むが如く、失は龜の六を藏するが若し、

茅簷聊寄寓。俯仰亦自足。

茅簷聊か寄寓、俯仰亦自ら足る、

東坡無邊春。方寸盡藏蓄。

東坡無邊の春、方寸に盡藏蓄す、

醉哦旁若無。獨侑一尊醪。

醉哦して旁若無なり、獨り一尊の醪を侑む、

牀頭車馬道。殘月挂疎木。

牀頭車馬の道、殘月疎木に挂る、

朝客紛擾時。先生睡方熟。

朝客紛として擾るる時、先生睡方に熟す、

【字解】

〔一〕 英妙。「潘岳西征賦」に、終童山東之英妙と、〔二〕 千兔禿。唐太宗書王羲之傳後云、雖禿千兔之毫と、杜子美

の詩、筆陳橫掃千人軍と、〔三〕 場屋。試驗場なり、「通鑑」に、唐人謂貢院爲場屋と、〔四〕 通闌。「張平子西京賦」に、通闌帶闌と、闌は市の門、一般人の通行する門、〔五〕 傲俗。「晉書郭璞傳」に、傲俗者不得以自得と、〔六〕 軒冕。財富位高き人、〔七〕 轉轂。「漢貨殖傳」に、轉轂百數、注曰、轉轂者、謂以車載物、而逐利者と、〔八〕 揚揚。「史記晏子傳」に、意氣揚揚、甚自得也と、〔九〕 能瀆。瀆は名詞は溝、ミソ、動詞は汗瀆、けがすなり、〔一〇〕 虎挾乙。「酉陽雜俎」に、虎威如乙字、長寸許、在腋兩旁、皮内尾端亦有之、佩之臨官、則能威衆と、〔一一〕 藏六。龜は頭と尾と兩手と兩足を甲の中に藏する故に藏六といふ、「雜阿含經」に、有龜被野干所得、藏六不出、野干怒去、佛告諸比丘、當如龜藏六、根塵不得便と、〔一二〕 方寸。「列子仲尼篇」に、吾見子之心矣、方寸之地虛と、〔一三〕 旁若無。「史記荆軻傳」に、酒酣以往、高漸離擊筑、荆軻和而歌於市中、相樂也、已而相泣、旁若無人と、

【題義】

韋深道の寄傲軒に題して作る詩、

【詩意】 深道先生は少年妙齡の時、書を美事にして千疋の兔の毫を禿にして仕舞つた、仕進して高官に上るも其の才は固より餘りあるも、先生は肯て進士試験の場屋に入らない、而して俗社會に向うて何の傲る所があるぞや、其の名は傲軒なれどもつまらぬ俗輩に傲るのではない、先生は必定して知る軒冕の中は、榮を享くるより辱を受くる方が多くして償ふに足らぬことを、自安の計策がないではない、が得と失とは始終運轉して居るやうなものだ、先生は乃ち軒冕外に揚揚として、人間世界の憂患の爲には心地を瀆さるる事はない、一般人は得意に當つては虎の乙を挾む如きであるが、失意の際には龜の六を藏して生きて死せるが若き状態である、先生は茅簷の下聊か寄寓して、俯仰して自分の身境は足る、東坡も今無邊際なる春である、其の無邊の大が方寸に盡く藏蓄して居る、一醉吟哦して旁若無

人の態度である、時ありて獨り一尊の酒を脩めて、牀頭は車馬往來の道である、曉來の殘月は疎木に掛りて何となく風趣がある、市に走る名利の朝客は正に紛擾せんとする時である、然るに先生は昨夜酔うたまま睡りて今や酣熟の時である、

【餘論】 字字句句寄傲ならざるは無し、句を摘んで佳を指すは無けれども、亦特別の惡句も無い、旁若無人を旁若無と用ふるの例は公より始まりて、此の外に見ない、

送呂昌朝知嘉州

呂昌朝の嘉州に知たるを送る

不羨三刀夢蜀都

羨まざる三刀蜀都を夢みるを、

聊將八詠繼東吳

聊か八詠を將て東吳に繼ぐ、

臥看古佛凌雲閣

臥して古佛を看る凌雲閣、

敕賜詩人明月湖

敕して詩人に賜ふ明月湖、

得句會應緣竹鶴

句を得て會す應に竹鶴に緣るべし、

思歸寧復爲蓴鱸

歸を思ふ寧ぞ復た蓴鱸の爲ならん、

橫空好在修眉色

橫空好在なり修眉の色、

【字解】 〔一〕 三刀 晉書王濬傳に、轉廣漢太守、夜夢懸三刀於臥屋梁上、須臾又益一刀、驚覺意甚惡之、主簿李毅曰、三刀爲州字、又益一刀者、明府其臨益州乎、果遷益州刺史と、〔二〕 八詠 宋復古が畫く八景圖を昌朝が所藏する、洞庭晚靄、廬阜秋雲、平田雁落、闕浦帆歸、雨暗江邨、雪藏山麓、泉崑古柏、石岸孤松である、〔三〕 繼東吳 梁の沈休文に、東吳八詠詩

頭白猶堪乞左符

頭白猶ほ左符を乞ふに堪へたり、

がある、皆五言の長古、今題目のみを擧ぐ、登臺望秋月、會圃臨東風、歲

暮感衰艸、霜來悲落桐、夕行聞夜鶴、晨征聽曉鴻、解佩去朝市、被褐守山東、〔四〕 古佛 「方輿勝覽」に、九頂山、在嘉州城左、唐會昌以前、每峯皆有寺、今唯存報恩一寺、又凌雲寺、唐開元中、僧海通、鑿山爲彌勒大像と、〔五〕 凌雲閣 卽ち九頂寺なり、〔六〕 明月湖 「名勝志」に、明月樓、在嘉州城之右、下瞰明月湖と、〔七〕 緣竹鶴 呂が多く古名畫を藏するを云ふ、〔八〕 蓴鱸 鄭谷の詩、秋風不背憶蓴鱸と、蓴は池沼に生ずるジュンサイ、鱸はスズキ、晉の張翰は秋風を聞いて吳中の蓴鱸を思ひ、官を辭して去る、〔九〕 修眉 韓退之の南山詩に、天宇浮修眉、濃綠畫新就と、〔一〇〕 左符 「漢書文帝紀」に、初與三郡守、爲銅虎符竹使符と、符はワリフ、一箇の符を兩分して、右を朝に留め、其の左を所持する、

【詩意】

君は古人が三刀を夢みて蜀都の知事と爲つたことなど羨まない、君はそんな凡俗ではない大雅風流八詠を賦して以て沈の如き文豪に繼ぐのである、悠悠と臥して看る古佛の凌雲閣に聳ゆるを、勅ありて、幸なる哉詩人太守に明月湖を賜ふ、句を得るは其の心竹鶴を離れざる清き處に在る、時には歸を思ふ事あらんも蓋し其れは蓴鱸の爲ではない、青山は橫空に好在である依然修眉の色を、頭髮は白けれど猶ほ風流太守としての印綬は所持するがよい、

次韻黃魯直寄題郭明父府推穎州西齋二首

黃魯直が郭明父府推穎州の西齋に寄題するに次韻す 二首

樹頭啄木常疑客

樹頭啄木常に客かと疑ふ、

【字解】

〔一〕 啄木 キツツキ、

客去而噴定不然。

客去つて噴る定んで然らず、

脱轄已應生井沫。

轄を脱し已に應に井沫を生ずべし、

解衣聊復起庖煙。

衣を解いて聊か復た庖煙起る、

平生詩酒真相汚。

平生詩酒眞に相汚す、

此去文書恐獨賢。

此を去つて文書獨賢を恐る、

早晚西湖映華髮。

早晚か西湖華髮に映じ、

小舟翻動水中天。

小舟翻つて動かさん水中の天、

事獨賢と、〔六〕水中天 賈島の詩、棹穿波底月、船壓水中天と、

【題義】 黃山谷が穎州に推察の官である郭明父に寄せたる詩に次韻して作る、

【詩意】 樹頭に啄啄と木心を打く鳥は常に來客かと疑ふ、誰も答へないので走つて去るは噴るかといへば定んでさうではない、我は客が來れば其の車轄を脱き井中に投じて水沫を生せしむる、又衣を典して金に代へ何か馳走する物を用意する、平生詩酒の爲に心事相汚すことが多い、今より以後は文書に於て獨賢と稱するを恐るる、早きか晚きか西湖の水が白髮に映じて、共に小舟を浮べて華髮が水中の天に動く状を見んか、

木の幹をつつき、虫を取りて食ふ、左貴嶺の詩、南山有鳥、自名啄木、饑則啄木、暮則巢宿と、賈島の詩、時聞啄木鳥、疑是叩門僧と、〔三〕脱轄 晉の陳遵は來客の早去を嫌ひ、車轄を取つて井中に投入した、〔四〕解衣 馮應榴曰く、典衣留客之意と、杜子美の詩、廚煙覺遠庖と、〔五〕相汚 杜子美の詩、久遭詩酒汚、何事添簪裾と、〔六〕獨賢 「毛詩」に、大夫不均、我從

〔二一〕

〔二二〕

寂寞東京月旦州。

寂寞東京の月旦州、

德星無復綴珠旒。

德星復た珠旒を綴る無し、

莫嗟平輿空神物。

嗟する莫かれ平輿神物空しきを、

尙有西齋接勝流。

尙ほ西齋の勝流に接する有り、

春夢屢尋湖十頃。

春夢屢ば尋ぬ湖十頃、

家書新報橘千頭。

家書新に報ず橘千頭、

雪堂亦有思歸曲。

雪堂亦思歸の曲あり、

爲謝平生馬少游。

爲に謝す平生馬少游、

每欲治家、妻輒不聽、後密遣客十人於武龍、作宅種甘橘千株、臨死救兒曰、汝母惡我治家、故窮如是、然吾州里、有千頭木奴、不責汝衣食、歲上一匹絹、亦可足用耳と、〔六〕思歸曲 「石崇思歸引序」に、困於人間煩囂、常思歸而永歎と、〔七〕馬少游 「後漢馬援傳」に、援擊交趾、謂官屬曰、吾從弟少游、常哀吾忼慨有大志曰、士生一世、但取衣食足、乘下澤車、御款段馬、爲郡掾吏、守墳墓、鄉里稱善人、斯足矣、致求盈餘、但自苦耳と、公嘗て方念平生馬少游の句がある、

【詩意】 東京の月旦州は今や信に寂寞である、德星が復た珠旒を綴るの光輝は無い、が嗟くには及ばない平輿に神物空しく凡物ばかりが棲むのを、尙ほ西齋に勝流に接する勝流が在る、余は春夢屢ば湖

【字解】 〔一〕月旦 太平寰宇記

に、蔡州汝陽縣、唐貞元七年正月、割汝陽縣汝水之南地、置汝南縣、縣有月旦里と、〔二〕德星 「神異苑」に、太史奏德星聚と、〔三〕平輿 「後漢書」に、許劭兄弟亦知名、汝南人、稱平輿淵有二龍、馬と、〔四〕勝流 「張九齡傳」に、朝廷許其勝流と、勝れたる身分を言ふ、〔五〕橘千頭 「襄陽記」に、李衡字叔平、入吳爲丹陽太守、特相敬重と、

の十頃なるに遊び尋ねる、家人から新しく報じ来るは橋千頭も已に熟したと、雪堂の我居を思ふの念が起りて思歸の曲も歌ひ出したくなる、其の歸田の善きを思ひ出したのは平生馬少游が名言を聞いて居たからである、それを馬少游に謝せざるを得ない、

【餘論】紀曰く、客去而嘖定不_レ成_レ語と、紀のみでない誰が讀んでも妥當の語とは思へない、滑調極まる、公の詩は新を欲して往往此の怪句がある、

次韻秦少章和錢蒙仲

秦少章が錢蒙仲に和するに次韻す

碧哇黃隴稻如京

碧哇黃隴 稻京の如し、

歲美人和易得情

歲美に人和して情を得易し、

鑑裏移舟天外思

鑑裏に舟を移す天外の思、

地中鳴角古來聲

地中の鳴角古來の聲、

山圍故國城空在

山は故國を圍んで城空しく在り、

潮打西陵意未平

潮は西陵を打つて意未だ平かならず、

二子有如雙白鷺

二子は雙白鷺の如きあり、

隔江相照雪衣明

江を隔て相照らして雪衣明かなり、

【字解】

【一】如京 「毛詩」に、曾孫之庾、如_レ坻如_レ京と、京は高邱を謂ふ、【二】歲美 「易緯」に、通卦驗歲美人和と、【三】鑑裏 鑑湖を言ふ、【四】地中 元微之の詩、星河影向_二簷前_一落、鼓角聲從_二地下_一回と、【五】山圍 「劉禹錫金陵詩」に、山圍_二故國_一周遭在、潮打_二空城_一寂寞回と、【六】二子 少章と蒙仲、【七】白鷺 潔白の徳を言ふ、

【題義】

公の門人秦少章が越州の錢蒙仲に和して作る詩に次韻したるもの、

【詩意】

碧哇を見ても黃隴を見ても稻が京の如く高い、此の如く年歲が豐美であるから人は和して情は良に得易い、鑑裏に舟を移しては天外に遠き思を爲し、地中の鳴角は古來よりの聲にて響く、山は四面より故國を圍遶して城は空しく在るのみ、潮勢は西陵を打つて意未だ平かならざるが如くである、二子は實に雙白鷺の潔白なる如く、江を隔てて雪衣を相照らして明かである、

【餘論】

紀曰く、用_二經如京字_一腐と、四言詩なれば如京と用ふるも可なれども今體七律に於ては可ならずと思ふ、余が先師枕山翁は雲埋_二老樹_一山初曙、潮打_二空城_一水不_レ春の句がある、

次韻錢越州

錢越州に次韻す

髯尹超然定逸羣

髯尹超然定んで逸羣、

南遊端爲訪雲門

南遊端に雲門を訪ふ爲なり、

謫仙歸侍玉皇案

謫仙歸りて侍す玉皇の案、

老鶴來乘刺史幡

老鶴來り乘る刺史の幡、

已覺簿書哀老子

已に覺ゆ簿書老子を哀むを、

故知籩豆有司存

故に知る籩豆有司の存するを、

【字解】

【一】髯尹 錢越州を言ふ、穆父は開封府を出て、越州に知たり、【二】雲門 若耶溪雲門寺、越州の會稽縣に在り、【三】謫仙 李太白、【四】玉皇案 元稹の詩、我是玉皇案吏と、【五】老鶴 白樂天の詩、老鶴風標不_レ可_レ親と、【六】刺史幡 「後漢輿服志」に、中二千石、二千石、皆皂蓋朱_二其兩幡_一、其千石、

年來齒頰生荆棘。 年來齒頰荆棘を生ず、

習氣因君又一言。 習氣君に因つて又一言す、

荆棘「眞誥」に、許遠遊、與王羲之書云、君侯心中、荆棘交雜、老子師之、所處荆棘生焉と、
へば天然の悪性が、學問して悪性は善性と變じたるも、時ありては又此の悪性が出ることを習氣と言ふ、
「辭典」に、シフキとあるが天台にてシツケと訓むが正しい、

【題義】 錢穆父の時事を慨したる詩に次韻して作る、

【詩意】 錢君君は超然として定んで逸羣である、南游するは正に雲門寺の塵外境を訪ふ爲であらう、
謫仙は已に人間より歸りて天上の玉皇案前に侍して居る、老鶴は飛び來りて刺史の輜に乗じて居る、
已に覺ゆ簿書堆裏に身を老ゆるの人と爲るを、故に特に知る籩豆禮樂の事は別に有司の存するを、年
來毒舌を吐くが爲に齒頰は荆棘を生ずるの感がある、毒舌は已に吐きたく無いが、習氣は容易に滅し
去らず又復た君に向うて一言を吐くに至る、

【餘論】 詩も亦荆棘の如きの感がある、これも公の習氣にて已むを得ざるか、一二三の二十一字は錢
を謂ひ、其餘の句は公自身の事を謂ふ、時事に就き記すべきこと多きも今は略す、

同秦仲二子雨中遊寶山 秦仲二子と同じく雨中寶山に遊ぶ

平明已報百吏散。 平明已に報す百吏散するを、

【字解】 〔一〕 半日 李涉の詩、

半日來陪二子閒。 半日來り陪す二子の閒、

立鵲低昂煙雨裏。 立鵲は低昂す煙雨の裏、

行人出沒樹林間。 行人は出沒す樹林の間、

東向而鳴と、

【詩意】 平明に役所では已に百吏が退散すると報す、我も亦自分の身となるを得たから半日は二子と
清閒を同じくすることが出來た、二子と共に寶山に上りて看れば立鵲が低處と昂處とに煙雨の裏に居
る、而して行人は樹林の間に出沒するのが望める、

【餘論】 紀曰く、語意脱洒、然非經意之筆と、即目即賦の詩、公の作としては平凡である、百吏の
吏平用の例は無い、百司とか百僚とせばよからんか、

去杭州十五年復游西湖用歐陽察判韻

杭州を去つて十五年、復た西湖に遊ぶ、歐陽察判の韻を用ふ

我識南屏金鯽魚。 我識る南屏の金鯽魚、

重來拊檻散齋餘。 重來して檻を拊つ散齋の餘、

還從舊社得心印。 還た舊社より心印を得、

【字解】 〔一〕 南屏 西湖の南屏
山、〔二〕 金鯽魚 金色のフナ、南
屏山興教寺の庭池に棲む、〔三〕 拊
檻 池のテスリに倚りて手を撃つ、
〔四〕 散齋餘 晝餐後に餌を魚に施

古今體詩 同秦仲二子雨中遊寶山 去杭州十五年復游西湖用歐陽察判韻

似省前生覓手書。省るに似たり前生覓手の書を、
 葑合平湖久蕪沒。葑は平湖に合して久しく蕪沒、
 人經豐歲尙凋疎。人は豐歲を経て尙ほ凋疎、
 誰憐寂寞高常侍。誰か憐む寂寞たる高常侍、
 老去狂歌憶孟諸。老い去つて狂歌孟諸を憶ふを、

【五】心印 佛心印可と成語する、禪でも密でも説く、「祖庭事苑」に、達磨西來、不立文字、單傳心印、直指人心、見性成佛と、「大日經疏」に、若能持是心印、廣開一切法門と、【六】前生 「王註」に、公游壽星院、入門便悟、嘗有詩云、前生我已到杭州、又晉羊祜、自省

前生李氏之子、唐房瑄、悟前生爲永禪師、張文定公方平、爲滁州一日、游琅琊山至藏院云、前生寫楞伽經、未終、願再成之、皆異人也と、【七】葑合 葑は菰葑、マコモ、查初白曰く、本集請開西湖狀云、錢氏有國置撩湖兵、千人日夜開濬、自國初以來、稍廢不治、水涸草生、漸成葑田と、【八】高常侍 唐の高適は官左散騎常侍、【九】孟諸 水澤の名、高適の詩、我本漁樵孟諸野、一生自是悠悠者、乍可狂歌草澤中、寧堪作吏風塵下、夢想舊山安在哉、爲衛君命且遲回と、

【題義】十五年後に西湖に再遊して作る、歐陽察判官は未詳、

【詩意】我は十五年前より南屏山下の湖魚に金色の鮒あるを識つて居る、今日重來し檻に倚り餌を與ふ午餐後である、還た舊盟社を訪うて同盟の心印簿を得て之を見る、殆んど前生覓手の書を省るの感が起る、又西湖を見れば葑菰が盛んに合して湖は蕪沒せる久しきことと疑はる、又人は豐年を経て來て居るのに尙ほ凋疎なるも恠しい、誰か憐むや心中寂寞たる高常侍、老い去つて狂歌して孟諸を憶ふの態度を、

【餘論】結句、高常侍は自謂であるか、歐陽察判を謂ふのであるか、余は自況もあるが、尤も歐陽察判を謂ふのであると思ふ、紀曉嵐は何の批評もなさざるが、余は七律の上乗なるものと思ふ、

與莫同年雨中飲湖上 莫同年と雨中湖上に飲す

到處相逢是偶然。到處に相逢ふ是れ偶然、
 夢中相對各華顛。夢中相對して各の華顛、
 還來一醉西湖雨。還た來りて一醉す西湖の雨、
 不見跳珠十五年。跳珠を見ざること十五年、

【字解】【一】相逢 杜子美、送殿中楊監赴蜀見相公詩、離別重相逢、偶然豈定期と 【三】跳珠 杜牧の詩、萬珠跳猛雨と、

【題義】莫名は君陳字は和中、同年は同じ年の進士及第者なり、之と雨中に西湖に小飲したる詩、

【詩意】到處に相逢ふは眞に是れ偶然である、夢中に相對して見れば各自に白髮である、還た來りて今日西湖の雨を一醉して賞する、我は此の湖の跳珠を見ざること十五年である、

【餘論】紀曰く、窠臼語と、公の詩多くは窠臼を脱するに過ぐるのである、然るに不見跳珠十五年など窠臼中に墮在するは不審である、思ふに感想が忽然と起るときは聖でも賢でも平凡に歸するものか、

送子由使契丹 子由の契丹に使用するを送る

雲海相望寄此身。 雲海相望んで此の身を寄す、

那因遠適更沾巾。 那ぞ遠適に因つて更に巾を沾さん、

不辭驛騎凌風雪。 辭せず驛騎の風雪を凌ぐを、

要使天驕識鳳麟。 天驕をして鳳麟を識らしめんと要す、

沙漠回看清禁月。 沙漠より回看せん清禁の月を、

湖山應夢武林春。 湖山應に夢みるべし武林の春、

單于若問君家世。 單于若し君が家世を問はば、

莫道中朝第一人。 道ふこと莫かれ中朝第一人と、

【七】 家世 蘇家世系、何遜の詩、家世傳「儒雅」と、【八】 第一人 「唐李揆傳」に、德宗幸山南、李揆爲盧杞所惡、用爲入蕃會盟使、拜尙書左僕射、揆至蕃、酋長曰、聞唐有第一人、李揆公是否、揆畏留、因給之曰、彼李揆安肯來耶と、

【題義】 哲宗の元祐四年の秋、子由をして契丹即ち遼國主の生辰を賀する爲め使節を爲さしむ、之を送る詩である、

【詩意】 雲海相望んで茫茫たる中に此の一身を寄する、遠適ではあるが此の行や涙などは出さなさい、

又甲驛乙驛と馬を度度騎り替へて風雪を凌ぎて征くを辭しない、此の行や彼の東胡族をして中朝文化の鳳麟の美德を識らしむる必要である、茫茫たる沙漠中に於て清禁の月を回看もするであらう、又武林の春景を憶うて湖山が夢に入ることであらう、征いて單于が若しや君の家世を問うた時は、中朝第一人であるなぞと道うてはいかぬ、留めて歸朝せしめない憂がある、

【餘論】 紀曰く、子由本翰林、而東坡在二杭州、二句清切、結用事亦好と、公が子由と關係ある詩は大底絶精である、特に烹煉の功を用ふるものか、獄中寄子由の七律と、此の篇は中に就いて氣滿ち格高し、宋詩は言情に短なりとの評は定論なれど、此種の詩に對しては別問題である、

次韻答劉景文左藏 自注有美堂燕集景文有詩 次韻して劉景文左藏に答ふ 自注有美堂燕集

我老詩壇仆鼓旂。 我老いて詩壇に鼓旂を仆す、

借君佳句發良時。 君が佳句を借りて良時に發す、

但空賀監杯中物。 但空しく賀監杯中の物、

莫示孫郎帳下兒。 示す莫かれ孫郎帳下の兒に、

夜燭催詩金燼落。 夜燭詩を催して金燼落ち、

秋芳壓帽露華滋。 秋芳帽を壓して露華滋し、

古今體詩 送子由使契丹 次韻答劉景文左藏

【字解】 一 詩壇 劉仙倫の詩、

卻憐南澗詩壇豪と、 二 仆鼓旂

「漢韓信傳」に、建大將旂鼓と、

「唐南蠻傳」に、攻大度河、仆旂息

鼓と、 三 杯中物 李太白憶賀

監詩に、昔好杯中物、今爲松下塵

と、 四 孫郎 「三國志」に、有子

如孫郎、死復何恨と、孫策年少、人皆

孫郎と呼ぶ、 五 帳下兒 「吳志」

故應好語如爬癢。故に應に好語は爬癢の如くなるべし、

有味難名只自知。味あり名け難し只自ら知る、

に、張昭字子布、注典略云、余囊閉、劉荆州、嘗自作書、欲與孫伯符、以示禰正平、正平嗤之言、如是

爲欲孫策帳下兒讀之邪と、「麻胡山記」に、其可爬痒と、「六」金爐 劉禹錫の詩、寂寂獨看金爐落と、爐はモエノコリ、「七」爬癢 爬は搔く、癢は痒と同じ、かゆきをかくのである、「麻胡山記」に、

【題義】 劉景文名は季孫、左藏庫の官に居て作りたる詩に次韻したるものである、

【詩意】 我は老いて詩壇にて既に鼓旗を介して争ふ氣は無い、但君が佳句を借用して此の良時に發揮する、但し賀監が杯中の物を空しうすることは知つて居る、此の事は孫郎や帳下の兒輩に示してはいかぬ、夜燭は作詩の念を催さしめて金爐落ち易く、秋芳は帽を壓して露華は正に滋し、是の故に好語は人の癢を爬くが如きを要する、好語は讀んで味はあるが何とも名けたり言ふことは出来ぬ只自ら知るのみである、

坐上復借韻送岢嵐軍通判葉朝奉

坐上復た韻を借り、岢嵐軍通判葉朝奉を送る

雲間踏白看纏旂。

雲間踏白纏旂を見る、

【字解】 一 雲間 「韓詩外傳」に、展而雲間と、二 踏白 「宋史

莫忘西湖把酒時。

忘るる莫かれ西湖酒を把るの時、

宋史傳」に、去官軍三五十里、踏

夢裏吳山連越嶠。

夢裏に吳山越嶠に連り、

白先行と、先驅する馬名、「三」越嶠 「南越志」に、南越以五嶠爲限、東曰大庾、次騎田、次都龐、次

尊前羌婦雜胡兒。

尊前に羌婦胡兒に雜はる、

熒萌渚、次越嶠と、嶠は嶠路、山の

夕烽過後人初醉。

夕烽過ぎて後人初めて酔ひ、

ミチ、單に山の意味にも用ふ、「四」

春雁來時雪未滋。

春雁來る時雪未だ滋からず、

尊前云云 岢嵐軍、即ち岢嵐縣民の

爲問從軍眞樂不。

爲に問ふ從軍眞に樂むや不や、

情態を言ふ、「五」書來 杜子美の

書來粗遣故人知。

書來り粗ば故人に知ら遣めよ、

詩、邊城有餘力、早寄從軍詩と、

【題義】 再び前韻を用ひて岢嵐縣即ち國初に置く岢嵐軍通判として赴任する葉朝奉を送る詩である、

岢嵐は山西省太原府である、

【詩意】 雲間に踏白馬が走り纏旂を見るが是は君の一行である、今日君と別れるのであるが西湖に酒

を把つて同遊せしことを忘れ玉ふな、僕は夢裏にも想像する吳の山が越の嶠に連りある景色を、而して又思ふ一樽の前に羌婦と胡兒と團欒して飲む状を、夕日の烽火が過ぎて後に人は安心して初めて酔ふ、又春雁が飛來する時雪未だ滋からざるの氣候である、それが爲に問ふが從軍は眞に樂いかどうか、音書を寄せ來りて粗略でよいが故人に其の情を知らしめ玉へ、

始於文登海上得白石數升。如芡實。可作枕。聞梅丈嗜石。故以遺其子。子明學士。子明有詩。次其韻。

始めて文登海上に於て、白石數升を得たり、芡實の如し、枕に作る可し、聞く梅丈石を嗜むと、故を以て其の子子明學士に遺る、子明詩あり、其の韻に次す

海隅荒怪有誰珍。

海隅の荒怪誰ありて珍とせん、

零落珊瑚泣季倫。

零落の珊瑚季倫を泣かしむ、

法供坐令微物重。

法供し坐に微物をして重からしむ、

【自注】試蓋有怪石供。

色難歸致孝心純。

色難し歸りて致す孝心の純、

只疑蕙苴來交趾。

只疑ふ蕙苴は交趾より來るを、

未信蠙珠出泗濱。

未だ信せず蠙珠の泗濱より出づるを、

願子聚爲江夏枕。

願はくは子聚めて江夏の枕と爲せ、

不勞揮扇自寧親。

扇を揮ふを勞せず自ら親を寧んせん、

【字解】〔一〕季倫 五代の石崇

字は季倫、頗る奢靡、王愷と競ふ、

王愷珊瑚の二尺許なるを示せば、季

倫は珊瑚の高さ三四尺許なるを六七

株を示して愷を驚かす、〔二〕法供

「華嚴經」に、諸供養中、法供養最

と、公曾て怪石を以て佛印に供養せ

し事を言ふ、供養は早贈のこと、

〔三〕色難 「論語爲政篇」に、子夏

問孝、子曰色難と、〔四〕蕙苴 藥

艸、ズズダマ、馬授交趾より帶來す

るもの、〔五〕交趾 漢代郡名、安

南の北部、五嶺以南一帶の地、〔六〕

蠙珠 蚌珠の別名、「尚書」に、淮夷

蠙珠鬚魚と、ハマケリの中に生ずる眞珠である、〔七〕泗濱 廣義に見て、今日の東海、〔八〕江夏枕 「東觀漢記」に、黃香事母至

孝、暑月扇枕、寒則以身溫席と、黃香字は文舉、江夏の人、〔九〕寧親 「揚子法言」に、孝莫大於寧親と、

【題義】始めて文登の海岸上に於て白色の砂利を數升得た、殆んど蕙苴の實の如く之を以て枕を作る

によいと思ふ、聞く所に據れば梅丈人は頗る石を愛好すると、是の故に之を其の子の子明に贈呈する、

子明は謝するに詩がある、終に次韻して作る、

【詩意】海隅の荒怪など誰か之を珍とする者がある、珊瑚も零落しては季倫も泣くに至る、法供養

を財供養に代へて曾て高僧に呈して微物を重からしめたことがある、色を和げて歸りて孝養を致すの

純眞は良に難い、此の白石を看て只疑ふ蕙苴が交趾より來るにやと、未だ信としない蠙珠が泗濱に出

ることは、願はくは子之を聚めて以て江夏枕と云ふものでも作り、而して親父の用に供し玉へ、扇を

揮ふの勞なくして老親は安寧である、

【餘論】四句腐と、敘述する事柄に依りては陳言も用ひざるを得ず、一一に清新の句を求むる翻つて

腐となる、

次韻錢越州見寄 錢越州寄せらるるに次韻す

莫將牛弩射羊羣。牛弩を將て羊羣を射ること莫かれ、

臥治何妨晝掩門。臥治何ぞ妨げん晝門を掩ふを、

【字解】〔一〕牛弩 弩はイシユ

ミ、「玉註」に、漢有八牛弩、以射

楚軍、矢及二十里と、「論語」に、割

古今體詩 始於文登海上得白石數升子明有詩次其韻 次韻錢越州見寄

稍喜使君無疾病。

稍や喜ぶ使君の疾病なきを、

時因送客見車轡。

時に客を送るに因つて車轡を見る、

搔頭白髮秋無數。

頭を搔けば白髮秋無數、

閉眼丹田夜自存。

眼を閉ぢて丹田夜自から存す、

欲息波瀾須引去。

波瀾を息めんと欲すれば須らく引き去

吾儕豈獨坐多言。

吾儕豈獨り多言に坐せん、

「楚辭遠遊」に、一氣孔神令、於中夜存と、「七」波瀾「韓退之長歌」に、凡今之人、急名與官、子不引去、與爲波瀾と、「八」多言「詩」に、人之多言、亦可畏也と、「家語」に、無多言、多言多敗、無多事、多事多患と、「老子」に、多言數窮、不如此守中と、

【詩意】羊羣を射るに牛弩を用ふるは大に過ぐ、小國などを治むるには大才の人臥し乍ら治むるのである、門を掩うてあるを見て使君は疾病であると思ふではない、時に門を開き客を送り其の車轡を見ることがある、余は頭を搔く白髮秋無數である、眼を閉ぢて觀察すれば丹田の正氣夜自ら存するを知る、曾中の波瀾を息めんと欲するときは官を辭して引退するがよい、吾儕豈獨り多言に坐するばかりであらうぞ、

【餘論】紀曰く、結二句太激と、時事に就いて激すべきありしならんも後世よりは明白に知ることが出来ない、

文登蓬萊閣下。石壁千丈。爲海浪所戰。時有碎裂。淘灑歲久。皆圓熟可愛。土人謂此彈子渦也。取數百枚。以養石菖蒲。且作詩。遺垂慈堂老人。

文登蓬萊閣下、石壁千丈、海浪の戦ふ所と爲り、時に碎裂あり、淘灑歳久しく、皆圓熟愛す可し、土人謂ふ、此れ彈子渦なりと、數百枚を取つて、以て石菖蒲を養ふ、且詩を作り、垂慈堂老人に遺る

蓬萊海上峯。玉立色不改。

蓬萊海上の峯、玉立色改まらず、

孤根捍滔天。雲骨有破碎。

孤根滔天を捍ぎ、雲骨破碎有り、

陽侯殺廉角。陰火發光彩。

陽侯廉角を殺ぎ、陰火光彩を發す、

纍纍彈丸間。瑣細成珠琲。

纍纍彈丸の間、瑣細珠琲を成す、

閻浮一漚耳。眞妄果安在。

閻浮一漚のみ、眞妄果して安んかある、

我持此石歸。袖中有東海。

我此の石を持って歸る、袖中東海有り、

垂慈老人眼。俯仰了大塊。

垂慈老人の眼、俯仰大塊を了す、

置之益盎中。日與山海對。

之を益盎の中に置き、日に山海と對す、

明年菖蒲根。連絡不可解。
倘有蟠桃生。且暮猶可待。

明年菖蒲の根、連絡して解く可からず、
倘し蟠桃生ずる有らん、且暮に猶ほ待つ可し、

【字解】(一) 蓬萊 縣名、又關も在る、山東の一角、今の直隸海峽に接近して居る所、(二) 不改 淵明の詩、山川無改時と、(三) 捍 捍塞で防止する、(四) 滔天 大水が天にはびこる、「書堯典」に、懷山襄陵、浩浩滔天と、(五) 雲骨 雲根は石の異名、(六) 陽侯 「揚雄賦」に、凌陽侯之素波と、「淮南子」に、波神曰陽侯と、(七) 廉角 廉隅と同じ、物のカド、「禮記」に、砥礪廉隅と、(八) 陰火 「木元虛海賦」に、陽冰不冶、陰火潛然と、「劉禹錫望賦」に、送飛鴻之滅沒、附陰火之光采と、(九) 壘壘 連續する形容、(一〇) 瑣細 わづか、(一一) 珠琲 珠を貫きたるヒモ、「左太冲吳都賦」に、金鑑磊砢、珠琲闌干と、(一二) 閻浮 世界の異名と見よ、(一三) 眞妄 善惡、清濁、(一四) 大塊 莊子天地を言ふ、(一五) 盆盎 同器なれど盆は口寬に底小、盎は大腹にして小口、(一六) 蟠桃 伯恭の説に蟠桃海上物也、「史記五帝本紀」に、東至於蟠木、劉禹錫詩、海中仙果子生遲、今詩主海石而作、又皆涉至理、而出新意、如袖中有東海、日與山海對、皆非實事、故云、儻有蟠桃生、且暮猶可待、言既是海石、亦當有蟠桃也、蓋因養菖蒲、聊與垂慈老、論理相爾と、

【題義】 文登の蓬萊閣下は石壁千丈である、海浪が戦ふ所であれば折あれば石壁が碎裂する、而して淘漉歳が久しくなり、石の角が取れて圓熟愛撫すべき状と爲る、士人は此の石を名づけて彈子渦と謂うて居る、乃ち數百枚を取つて以て石菖蒲を養ふ、且詩を作りて之と并せて垂慈堂老人に寄贈する、
【詩意】 登州の蓬萊海上の峯は、宛も仙山の玉立するが如くにして其の色が衰改することはない、察するに峯の孤根幹が強ければ波の滔天たるを捍塞する、時には雲骨が波の爲め破碎せられる、破碎せらるるのみではない、其の石質を圓熟せしめる、時には水中に陰火が光彩を發することがある、

たる蟠桃が彈丸の實の如き間、瑣細に碎きて珠琲と成すこともある、謂ふに此の閻浮世界は一微塵程の洞である、區區たる眞である妄であると論ずるが、其の眞や妄や果して何れに在るぞや、我は此の石を拾ひ持ち歸る、袖中に東海あると誇る、垂慈老人の眼は凡眼ではない、一俯一仰して中に天地を達観する、我が呈する此の石を盆盎の中に置けば、日日登山と東海に對して居ると同じ、明年に至れば菖蒲の根が、此の石に連絡して解くことが出来ない、現實の登瀛洲より持ち來る石であれば蟠桃の之に生ずることもやあらん、且暮に之を待ち玉ふがよい、
【餘論】 此の篇は公の集中五古として名篇に屬す、袖中有東海の五字は詩人ならざる愛石家は皆知る所、紀曰く、筆筆奇警、不覺題之瑣碎と、題の瑣碎は公の常癖、公の常癖のみでない、黄山谷なども免れない、山谷のみではない、宋人の常癖でもある、

次韻毛滂法曹感雨

毛滂法曹が雨に感ずるに次韻す

江南佳公子。遺我綿繡端。
攬之溫如春。公子焉得寒。
興雨自有時。膚寸便濛濛。
斂藏以自潤。牛斗何足干。

江南の佳公子、我に遺る錦繡端、
之を攬れば温かにして春の如し、公子焉んぞ寒きを得ん、
興雨自から時あり、膚寸便ち濛濛、
斂藏以て自ら潤ふ、牛斗何ぞ干すに足らん、

空庭月與影。強結三友歡。
 我豈不足歟。要此清團團。
 欲歡在一醉。常恐尊中乾。
 捨酒尙可樂。明珠如彈丸。
 但恐千仞雀。恩恩發虛彈。
 迨子閒暇時。種子田中丹。
 一朝涉世故。空腹容欺謾。
 我頃在東坡。秋菊爲夕餐。
 永媿坡間人。布褐爲我完。
 雪堂初覆瓦。上簞無下莞。
 時時亦設客。每醉筒輒殫。
 一笑便傾倒。五年得輕安。
 公子豈我徒。衣鉢傳一簞。
 定非郊與島。筆勢江河寬。

空庭月と影と、強ひて三友の歡を結ぶ、
 我豈足らざるか、此の清團團を要す、
 歡を欲す一醉に在り、常に恐る尊中の乾くを、
 酒を捨てて尙ほ樂む可し、明珠彈丸の如し、
 但恐る千仞の雀、恩恩虚彈を發するを、
 子が閒暇の時に迨んで、子を田中の丹に種ゑん、
 一朝世故に涉り、空腹欺謾を容れん、
 我頃東坡に在り、秋菊を夕餐と爲す、
 永く媿づ坡間の人、布褐我が完を爲すを、
 雪堂初めて瓦を覆ふ、上簞ありて下莞無し、
 時時亦客を設け、醉ふ毎に筒輒ち殫す、
 一笑便ち傾倒、五年輕安を得たり、
 公子豈我が徒、衣鉢一簞を傳ふ、
 定んで郊と島とにあらず、筆勢は江河寬なり、

悲吟古寺中。穿帷雪漫漫。

悲吟す古寺の中、帷を穿ちて雪漫漫、

他年記此味。芋火對嬾殘。

他年此の味を記し、芋火嬾殘に對す、

【字解】 遺我 古詩に客從遠方來遺我一端綺と、 興雨 詩に興雨祁祁と、 膚寸 公羊傳僖公三十一年

に、觸石而出、膚寸而合、不崇朝、而遍雨乎天下者、惟泰山爾と、又「戰國策」に、齊人伐楚戰勝、膚寸之地無得者、形弗能有也と、膚は手指四本をならべたる長さ、寸は一本の指、 牛斗 牽牛星と南斗星、「張華傳」に、斗牛之間、常有紫氣と、又劍氣在牛斗之間、如氣干雲霓と、 團團 謝惠連の詩、團團滿葉露と、杜子美の詩、團團月隱牆と、 尊中 陶淵明の詩、尊中酒不乾と、 明珠 「南史王筠傳」に、沈約謂王志曰、賢弟子、文章之美、可謂後來獨步、謝朓嘗見語云、好詩圓美、流轉如彈丸、近見其數首、方知此言爲實と、 千仞雀 「莊子讓王篇」に、以隋侯之珠、彈千仞之雀、世必笑之、以其所用重、而所要輕也と、 田中丹 丹田中を倒用する、 世故 潘世叔の詩、世故尙未夷と、 欺謾 韓退之の詩、逶迤不復振、後世恣欺謾と、 秋菊 「楚辭」に、夕餐秋菊之落英と、 雪堂 公の讀書堂、今尙ほ故址を湖北黃岡縣東に存す、 上簞 簞は竹製の席、 下莞 葦製の席、「詩小雅」に、下莞上簞、乃安斯寢と、 傾倒 杜子美の詩、志士感傷心、今日已傾倒と、心を傾けて敬服する、又酒を飲み盡くす、 衣鉢 三衣一鉢は佛徒に在つて第一の珍寶、之を傳ふるには第一の高弟に限る、即ち心法と云ふことになる、 一簞 簞はハコ、「左傳哀公二十年」に、與之一簞と、簞筒、瓢簞、多種の器がある、 郊與島 孟郊の詩は寒窘、賈島の詩は瘦苦、 江河寬 韓退之の文章を言ふ、公亦比す、 芋火 「高僧傳」に、唐李泌與明瓚禪師游、明瓚擇徒、謂之嬾殘二者、泌嘗於衡嶽寺讀書、察嬾殘所爲曰、非凡人也、聆其中夜梵唱、響徹山林、泌頗知音、能辨休戚、謂嬾殘經音、先悽愴而後喜悅、必謫墮之人、時將去矣、中夜潛往謁焉、嬾殘命坐、發火取芋以啗之曰、慎勿多言、領取十年宰相、泌拜而退、 嬾殘 性嬾而食殘、故以爲號と、

【題義】 毛滂字は澤民が感雨の詩あるに次韻して作る、

【詩意】江南の佳公子は、我に錦繡端を遺らる、之を攬れば其の溫暖の氣は春の如くである、公子は此の如き貴重品を持ちて居る者何の寒きことも無き筈である、興雨が祁祁と下る自から時節がある、下らば膚寸の間も忽ち濛濛の景色と爲る、斂藏を以て自然と潤ふに至る、牛斗の間は何ぞ干すに足らんや、忽ちに空庭に月影と吾影と吾と、強ひて三友としての歡を結ぶことが出来る、我は豈不足であるらんや、此の清團團の氣分を要する、其の歡ぶ所は一醉を求むるに在る、常に恐る所は尊中の早く乾くに在る、而かも酒は舍つるも尚ほ樂はある、それは新詩が明珠の如く又彈丸の如くなるに由る、但恐る千仞の高きに居る雀を射るに、明珠彈丸を發射するの誤あるを、子が閒暇ある時に迨んで、善き種子を子の丹田中に蒔かん、若し一朝世故の複雜事に涉れば、空腹なれば世の欺謾までも許容するに至る、我は頃者東坡に在りて、秋菊を把つて夕餐と爲して居る、而かも永く媿づ此の坡間近鄰の人が、布褐なれども我をして完からしむるを、雪堂の建築も初めて瓦を覆ふことが出来た、下莞は無きも上簟あれば先づ安心して寝ることが出来る、時に賓客を招飲する、酔へば必ず有るだけの酒を飲み盡くす、酒が無くなれば一笑して傾倒する、五年の間此の状態にて輕安を得た、公子は我徒ではないが、我が衣鉢としては我が一瓢の筆を傳へる、其の人己に孟寒島瘦とは異なる、筆勢は滾滾として江河の寛廣に譬ふ、嘗ては古寺の中に悲吟して、帷を穿ちて雪漫漫と下りし事があつた、他年に及んでも此の味を記憶して居る、芋火を燒きて嬾殘和尚と對坐せしことを、

【餘論】紀曰く、爲韻所牽、不免支淡と、感雨の意義は消滅して餘事續出、詩としての感興を求むるに苦む、蘇詩を擇ぶもの取らざる所以である、

送鄧宗古還鄉

鄧宗古の郷に還るを送る

廣漢有姜子。孝弟行里閭。
赤眉雖豺虎。弛兵過其墟。
至今空清泉。無復雙鯉魚。
南鄭有李邵。妙得甘公書。
夜坐指流星。驚倒兩使車。
抱關不肯仕。布褐蒙璠璣。
西南固多士。君得二子餘。
凜凜忠文公。搜士及樵漁。
澗溪有幽討。蘋芷眞嘉蔬。
歲晚終不食。心惻當何如。

廣漢に姜子あり、孝弟里閭に行ふ、
赤眉豺虎と雖も、兵を弛めて其の墟を過ぐ、
今に至り空しく清泉、復た雙鯉魚無し、
南鄭に李邵あり、妙に得たり甘公の書、
夜坐流星を指し、兩使車を驚倒せしむ、
抱關肯て仕へず、布褐璠璣を蒙る、
西南固より多士、君は二子の餘を得たり、
凜凜たり忠文公、士を搜して樵漁に及ぶ、
澗溪幽討有り、蘋芷眞に嘉蔬、
歲晚終に食はず、心惻當に何如かすべき、

【字解】

【一】廣漢 四川成都縣治、【二】姜子 後漢の姜詩、【三】赤眉 眉を朱色する、西漢末の流賊、光武の爲め亡ぼさる、

【四】 弛兵 弛は弛緩、兵が邸に入るも亂れざるのである、「姜詩妻傳」に、赤眉散賊、經詩里、弛兵而過、曰驚大孝、必觸鬼神、と、姜子は姜詩と同じ、【五】 雙鯉魚 「後漢書」に、姜詩舍側、湧泉之中、且旦出鯉魚一雙、以供母膳、と、【六】 南鄭 「後漢書」に、李郃、漢中南鄭人、善河圖風星、漢初、有甘公石公亦知星と、天文學を知る意、【七】 流星 「李郃傳」に、和帝即位、分遣使者、皆微服單行、各至三州縣、觀采風謠、二人當到益部、投郃候舍時、夏夕露坐、郃因仰觀、問曰、二君發京師時、寧知朝廷遣二使耶、二人默然、驚相視曰、不聞也、問何以知之、郃指星示云、有二使星、向益州分野、故知之耳、後三年、其使者一人、拜漢中太守、郃猶爲吏、太守奇其隱德、召署戶曹史と、【八】 抱關 夜番、門衛、【九】 瑤瓊 美玉、魯國の國寶、「揚子法言」に、玉不雕、瑤瓊不作器と、【一〇】 二子餘 二子は姜詩と李郃、【一一】 忠文公 范鎮、字は景仁、仁宗、英宗、神宗に事へ、官内翰に至る、卒して忠文と諡せらる、宗古は其の門生、【一二】 幽討 杜子美の詩、脫身事幽討と、探幽尋討する、【一三】 蘋芷 次公曰く、芷左傳作沚と、水艸にて食ふべきもの、

【題義】 鄧宗古は簡州陽安の人、里中鄧孝子の名高し、此の人の還郷を送る詩、

【詩意】 昔廣漢の地に姜子と云ふ孝子が有つた、其の人の孝名は里閭の中誰知らぬ者はない、赤眉の賊徒は豺虎の如き暴性であるけれど、其の墟を過ぐる時は決して暴行を爲さない、所が今日に至りて空しく清泉を餘すのみにて、復た孝に感じて雙鯉魚が躍り出づるの事は無い、又南鄭に李郃と云ふ孝子が有つた、其の人は妙に甘公の書に通じ得た、夜坐し天上の流星を指し、兩使者を驚倒せしめしことがある、李郃は抱關の賤役に甘んじて肯て自分相當の高官とならない、布や褐の類の賤衣を纏うて居て瑤瓊の寶を蒙つたのである、西南の地は固より多士である、其の多士の中で鄧君は此の姜と李との人格を得て居る、今の世凜凜たる正氣の忠文公は、國家に有用の士を搜索して樵人や漁父の間に

まで及ぶ瀾溪の奥底まで幽討して、瀾溪の清處に産する蘋芷を得た、其の蘋芷は眞に嘉蔬である、歲晚に及んで終に食はざる、其の惻惻たる心情は當に何如ぞや、

【餘論】 紀曰く、牽扯成篇、殊勉強少味と、此の詩を以て前に出せる次韻毛滂の詩と比較する、彼は線脈の支離する感がある、此れは一貫して信屈の文句は無い、

參寥上人初得智果院會者十六人分韻賦詩軾得心字

參寥上人初めて智果院を得、會する者十六人、分韻詩を賦す、軾心字を得たり

漲水返舊壑。飛雲思故岑。
念君忘家客。亦有懷歸心。
三間得幽寂。數步藏清深。
攢金盧橘塢。散火楊梅林。
茶筍盡禪味。松杉眞法音。
雲崖有淺井。玉醴常半尋。
遂名參寥泉。可濯幽人襟。

漲水舊壑に返る、飛雲故岑を思ふ、
念ふに君は家を忘るるの客なるに、亦歸を懷ふの心あり、
三間幽寂を得、數步清深を藏す、
攢金盧橘の塢、散火楊梅の林、
茶筍盡禪味、松杉眞の法音、
雲崖淺井有り、玉醴常半尋、
遂に參寥泉と名づく、幽人の襟を濯ふ可し、

相攜橫嶺上。未覺衰年侵。

相攜ふ横嶺の上、未だ覺えず衰年の侵すを、

一眼吞江湖萬象涵古今。

一眼江湖を呑み、萬象古今を涵す、

願君更小築。歲晚解我簪。

願はくは君更に小築せよ、歲晚我が簪を解かん、

【字解】 一、漲水。禮記に、歲十二月、水歸其壑と、二、飛雲。白樂天の詩、浮雲暗歸山と、三、忘家客。方外の身を言ふ、四、懷歸。詩に、豈不懷歸、畏此簡書と、五、三間。魯靈光殿賦に、三間四表と、邦俗六尺を一間と稱するが、稍や本義と同じ、六、盧橘。司馬相如上林賦に、盧橘夏熟と、金柑の異名、七、楊梅。南方植物志に、楊梅其子如彈丸正赤、五月中熟、熟時其味酸と、太白の詩、江南楊梅熟と、俗にヤマモモと稱す、八、茶筍。趙州の禪味は茶、玉版和尚の禪味は筍、九、玉髓。太玄經に、玉髓以解渴と、一〇、常半尋。左傳成公十二年注に、八尺曰尋、倍尋曰常と、一一、吞江湖。司馬相如傳に、吞雲夢八九と、一二、小築。杜子美の詩、畏人成小築、福性合幽棲と、一三、解我簪。鍾會遣茶賦に、散髮抽簪、永絕一邱と、

【題義】 參寥が錢塘城内の智果院主と爲りたるに就いて祝賀の意味にて會合する者十六人、分韻して詩を作り、公は心の字を得たのである、

【詩意】 漲水も舊の壑に流れて返り、飛雲も亦故の岑を思ふ、我念ふに君は故の家を忘るる本分の人ではあるが、水と雲と同じく無心の裏に亦懷歸の心がある、今や三間の淨刹に幽寂なる身分を得た、數歩の淺地に清深なる玄理を藏する、盧橘の種ゑある塢は金丸を攢める如く、又楊梅の林は火を散する如く赤い、茶を飲み筍を食ふも盡禪味である、風が松を吹き又杉を吹く眞の佛説法の音である、

雲崖の高處に淺井がある、甘露の味ある水が常半尋も下る、遂に此の流泉を參寥泉と名づけた、以て幽人の衣襟を濯ふべし、相攜へて横嶺の上に登る、其の健脚では未だ衰年に侵さるるとは覺えない、一眼中に江湖を呑み、萬象は古今を涵す、願はくは君更に小室を築き玉へ、歲晚には我簪を解いて此の中に靜養せんと思ふ、

【餘論】 紀曰く、起二句、全襲左思、而意則迥別と、參寥は清僧ではあるが學僧にあらずして詩僧に屬する者、坡公に隨つて名を得たる者、石門の如き學僧と異なる、此の詩何等特技の言ふべきなれば、詩に精采無き所以である、

哭王子立次兒子迨韻三首 王子立を哭し、兒子迨の韻に次す 三首

彭城初識子。照眼白而長。

彭城に初めて子を識る、照眼白うして長し、

異夢成先兆。清言得未嘗。

異夢先兆と成る、清言得て未だ嘗てせず、

豈唯知禮意。遂欲補詩亡。

豈唯禮意を知るのみならん、遂に詩亡を補はんと欲す、

咄咄真相逼。諸生敢雁行。

咄咄眞に相逼る、諸生敢て雁行せんや、

【字解】 一、彭城。縣の名、今の江蘇銅山縣治、二、白而長。韓退之孔戣墓志銘に、孔戣廿八、吾見其孫、自而長身と、三、異夢。奇異なる夢、王符潛夫論に、君子之異夢非妄と、公の自注に、余爲密州、子立未嘗相識、忽告同舍生曰、吾夢爲密州塔、何也、已而果以子由之子妻之と、四、清言。晉樂廣傳に、廣善清言、而不長于筆と、五、補詩亡。東晉補亡詩序に、

哲興同業疇人、肆修鄉飲酒之禮、然所詠之詩、或有義無辭、音樂取節、闕而不備、於是遙想既往、存思在昔、補著其文、以綴舊制、公の自注に、子立能詩而有禮學と、【六】咄咄、物の意表外なるに驚歎して發する聲、「法帖」に、衛夫人曰、王逸少、甚能學衛真書、咄咄逼人、筆勢洞精、字體遒媚と、【七】雁行、「禮王制」に、父之齒隨行、兄之齒雁行と、

【題義】子由の女婿である王子立が年三十五にして歿したるを公の子の子道が哭詩を作り、公は之に次韻したものである、

【詩意】余は彭城に於て初めて子と面識になつた、眼光でも面色でも信に異相である、其の時に子は密州の婿となるとの夢を見たと言つたがそれは實事と成つた、が其の後清言を屢は交へたのではなかつた、子は豈唯禮意を知るのみでない、遂に其の力を發揮して詩亡を補はんと欲したのである、其の詩を見れば咄咄真に古人に逼る、到底他諸生の雁行を許さない、

【一】

【二】

非無伯鸞志、獨有子雲悲。

伯鸞の志無きにあらず、獨子雲の悲有り、

恨子非天合、猶能使我思。

恨む子は天合にあらず、猶ほ能く我を思はしむ、

兒曹莫悽慟、老眼欲枯萎。

兒曹悽慟する莫かれ、老眼枯萎せんと欲す、

會哭皆豪傑、誰爲感舊詩。

會哭する皆豪傑、誰か感舊の詩を爲る、

【字解】

【一】伯鸞志、「後漢書梁伯鸞傳」に、伯鸞家貧、而尚節介、聘孟氏醜女、共入霸陵山中、以耕織爲業、詩書彈琴自娛と、【二】子雲悲、揚雄子雲曰、育而不茁者、吾家之重鳥乎と、子雲子あり早く死す、子立亦兒なきを言ふ、【三】天合、「東萊子」に、以人合者、有レ時而離、以天合者、無レ時而離と、人合は交游朋友の類、天合は父子兄弟の屬、【四】會哭、公の自注に、子立與黃魯直・張文潛・晁無咎・秦少游・陳無己、皆友善と、【五】感舊詩、向子期に思舊賦あり、

【詩意】子は伯鸞と同じく退きて夫妻畔織する志がないのではない、獨だ揚子雲の如く子の無きを悲む、恨む所は其の天合を得ないことを、それであるから殊更に能く我をして思はしむるのである、兒曹は悽慟してはいかぬ、兒曹が悽慟しては老眼は益す枯萎せんとする、今葬に會して哭する人は皆知名の豪傑である、此の中に於て誰か感舊の詩を爲るものである、

【一】

【二】

龍困嘗魚服、羊儂或虎蒙。

龍困嘗て魚服し、羊儂或は虎蒙す、

息恩成鬼錄、憤憤到天公。

息恩鬼錄と成り、憤憤天公に到る、

偶落藩牆上、同游羿穀中。

偶落藩牆の上、同游す羿穀の中、

回看十年事、黃葉卷秋風。

十年の事を回看すれば、黃葉秋風に卷く、

【字解】

【一】龍困、「說苑」に、白龍魚服、見困於豫且之網と、【二】羊儂、意義未詳「揚子」に、羊質而虎皮、見草而悅、見豹而戰、忘其皮之虎也と、詩經に、狐裘蒙戎と云ふ語がある、【三】鬼錄、過去帳を言ふ、陶淵明の詩、昨莫同爲人、今且在鬼錄と、【四】憤憤、心の紊れたる形容、「蜀蔣琬傳」に、事不當理、則憤憤矣と、「北周庾開府」の詩、憤憤天公曉、精神殊乏少

と、「晉石季龍傳」に、天公憤憤、無皂白之微也と、「五」藩牆上「南史」に、范縝云、人生如樹花、同發隨風而墮、自有拂簾幌、墮於茵席之上、自有關籬牆、落於糞溷之中、墜茵席者、殿下(竟陵王子良)是也、落糞溷者、下官是也と、「六」羿發中「莊子德充符篇」に、游於羿之彀中、中央者中也也、然而不中者命也と、羿は有窮國君の名、射を善くす、彀中は弓を引きしほりたる適度のうち、「孟子盡心章」に、羿不爲拙射、變其數率と、

【詩意】龍化して魚と爲つて豫且に困められたことがある、羊が儼しくして或は虎の似非を爲るものもある、その龍魚羊虎と紛紜たるものも恩恩に鬼録帳の人と成る、是非共に慣慣唯天公に到りて明曉なるのみ、人間に生れて不幸偶ま藩牆の上に落ちて、同じく羿彀の中に遊ぶ、十來以來の事を回看すれば、黃葉が秋風に卷かるるの感慨がある、

【餘論】紀は一二の詩を批して曰く、趁韻而成、殊乏警策、眼枯字本杜詩、萎字却是湊韻、有涙方可言枯、非花安得曰萎と、英雄欺人の語、凡人の知る所でない、最後の龍困の詩の如き、他の題目にも改め通するやに思ふ、子立を弔するに吳王の典故を用ふる如きは、不倫にあらずやとも思ふ、公英雄なるも時代の微菌は掃除する能はずと見ゆ、

異鵲

異鵲

熙寧中。柯侯仲常。通守漳州。以救饑得民。有二鵲棲其廳事。訖侯之去。鵲亦送之。漳人異焉。爲賦此詩。

熙寧中、柯侯仲常、漳州を通守す、饑を救ふを以て民を得、二鵲あり、其の廳事に棲む、侯が去るに訖りて、鵲亦之を送る、漳人異とす、爲に此の詩を賦す

昔我先君子。仁孝行於家。
家有五畝園。鳳集桐花。
是時鳥與鵲。巢穀可俯拏。
憶我與諸兒。飼食觀羣呀。
里人驚瑞異。野老笑而嗟。
云此方乳哺。甚畏鳶與蛇。
手足之所及。二物不敢加。
主人若可信。衆鳥不我遐。
故知中孚化。可及魚與緞。
柯侯古循吏。悃愾眞無華。
臨漳所全活。數等江干沙。
仁心格異族。兩鵲棲其衙。

昔我が先君子、仁孝家に行ふ、
家に五畝の園あり、鳳桐花に集まる、
是の時鳥と鵲と、巢穀俯して拏む可し、
憶ふに我諸兒と、飼ひ食うて羣呀を觀る、
里人瑞異に驚き、野老笑うて嗟す、
云ふ此れ乳哺に方り、甚だ畏る鳶と蛇と、
手足の及ぶ所、二物敢て加へず、
主人若し信す可くば、衆鳥我と遐ならず、
故に知る中孚の化、魚と緞とに及ぶ可きを、
柯侯は古の循吏、悃愾眞に華無し、
漳に臨んで全活する所、數は江干の沙に等し、
仁心異族に格る、兩鵲其の衙に棲む、

但恨不能言相對空楂楂。

但恨む言ふ能はざるを、相對して空しく楂楂、

善惡以類應古語良非夸。

善惡類を以て應ず、古語良に夸にあらず、

君看彼酷吏所至號鬼車。

君看よ彼の酷吏、至る所鬼車と號す、

【字解】

〔一〕先君子 公の父老泉を言ふ、〔二〕公鳳 王註に、有彩羽之細禽、人謂其如鳳、名之曰公鳳、獨有禽五色、

桐花時來、集於桐上、名曰桐花鳳と、么は女とも書く、微小の義を持つ、〔三〕巢穀 穀は字書に鳥母哺子食とありて、親鳥が子

鳥に食を食はすのである、〔四〕可俯拏 「禮記」に、鵲之巢、可俯而窺と、窺は韻字として使用できない、故に拏と代ふ、拏は捕

と攫と同じ、〔五〕羣呀 口を張る貌を呀と曰ふ、東方朔の詩、衆官助呀呀と、韓退之の詩、王母聞以笑、衛官助呀呀と、〔六〕

二物 鳶と蛇、〔七〕不我遐 「毛詩」に、既見君子、不我遐棄と、「東坡雜說」に、少時所居書堂前、有竹柏雜花、叢生滿庭、

衆鳥巢其上、武陽君惡殺生、兒童婢僕、皆不得捕取、數年間、鳥雀皆巢於低枝、其穀可俯而窺、又有桐花鳳、四五日、一翔集其

間、此鳥羽毛、至爲珍異、難見而能馴擾、殊不畏人、問里間見之、以爲異事、此無他、不佞之誠、信於異類也と、〔八〕中孚

「易」に、風澤中孚の卦ありて、中孚は無我無心にして至誠の義、〔九〕循吏 「漢書」に、循吏傳、酷吏傳あり、〔一〇〕惻惻 至誠を

言ふ、「漢書劉向傳」に、發憤惻惻、信有憂國之心と、〔一一〕全活 「漢書成帝紀」に、遣使者、循行郡國、務有以全活之と、

〔一二〕江干沙 佛典に、恆河沙數の語あり、數を計すること能はざるを言ふ、〔一三〕楂楂 韓退之の詩、鵲鳴聲楂楂、鳥噪聲獲獲と、

〔一四〕非夸 夸は誇と同じ、矜夸、大言を吐きたかぶる、〔一五〕酷吏 苛酷嚴吏である、〔一六〕鬼車 「嶺表錄異」に、鴉夜飛盡伏、

名鬼車と、「齊東野語」に、鬼車俗稱九頭鳥と、鴉は鴉鳥、フクロフ、夜出て他鳥の子を食ふ惡鳥、

【題義】 熙寧中に柯述字は仲常と云ふ侯爵が漳州の通守と爲つて良政を敷き、其の漳州の縣廳の屋

上に二鵲が棲み、侯の來去を送迎するものの如きを見て感じて此の詩を賦したのである、

【詩意】 昔我が先君子は、仁孝の二道を我が家庭に行はしむ、我が家に五畝の園がある、其の園に桐

樹がある、公鳳が之に集る、是の時に當りて鳥と鵲との巢穀は俯して拏捕することが出来る、今猶ほ

記憶する我と諸兒と、親鳥が子鳥を飼ふ狀を観ることが出来た、里人は一般に瑞異に驚きたるが、年

老いた人は笑ひながら歎嗟して云ふ、此れは是れ乳哺の時である、是の時や甚だ鳶と蛇との二害を畏

る、それは高處で人間の手足の及ぶ所でないからだ、若し人間手足の及ぶ位の低處なら鳶も蛇も害

を加へないかも知れぬ、主人公が若し信頼すべき人ならば、衆鳥は必ず人に近い處に棲むのである、

故に知る至誠の風化は魚や鰥の類にまで及ぶを、今柯侯は其の人古の循吏である、惻惻の情を以て

事に當り、聊かも浮華輕薄はない、此の漳州に臨んでも萬事活命する善政を布く、其の數は江干の沙

の如く他の計算を許さない、尤も仁心が異族に感じ格る、其の證據には兩鵲が官衙に棲むのを見て

判る、但恨む異族は言ふことが出来ないから、相對して空しく楂楂の聲を發するのみ、善惡は善は善、

惡は惡と類を以て報應がある、その古語は良に徒らに夸稱ではない、君看玉へ彼の酷吏と言はるる人

次韻詹適宣德小飲巽亭

詹適宣德が巽亭に小飲するに次韻す

君方夢謫仙我亦弔文園

君方に謫仙を夢む、我も亦文園を弔す、

江上同三黜天涯共一尊。

江上三黜を同じうし、天涯一尊を共にす、

濤雷殷白晝梅雪耿黃昏。

濤雷白晝に殷たり、梅雪黃昏に耿たり、

歸去多情雨應隨御史軒。

歸去多情の雨、應に御史の軒に隨ふべし、

【自注】詹爲御史臺主簿。

【字解】

【一】謫仙。李白に、泛沔州城南郎官湖の五古がある、自注に、來詩記李白郎官湖事と、【二】文園。漢書に、司馬相如、有消渴疾、拜爲孝文園令と、杜牧の詩、文園終病渴と、【三】三黜。黃と登と汝との三黜を云ふか、【四】一尊。孟東野の詩、一樽權暫同と、【五】濤雷。浙江記に、潮頭湧激、高數丈、旬隱若雷霆と、【六】梅雪。林和靖梅詩、暗香浮動月黃昏と、【七】多情雨。唐書に、顏真卿、爲監察御史、時五原有冤獄久不決、真卿至立辨之、天方旱、決獄乃雨、郡人呼之爲御史雨と、

【題義】

詹適は宣德郎の官に居る人、此の人が巽亭に小飲して贈られたる律に次韻して作る、

【詩意】

君は李謫仙を夢に見たと云ふ、我も亦司馬文園が渴の病あるを弔するものである、江上に三黜せられたる境遇は君と同じ、而して天涯に在つて一尊を共にするを得た、濤雷の聲は雷の如く白晝に殷殷と響き、梅花は雪の如くに開いて黃昏に耿たり、歸去に臨んで下る雨は多情の雨である、應に御史の軒に隨うて下るものと思ふ、

【餘論】

太白郎官湖の詩、張公多逸興、共泛沔城隅、當時秋月好、不減武昌都、四坐醉清光、爲歡古來無、郎官愛此水、因號郎官湖、風流若未減、名與此山俱、

東川清絲寄魯冀州戲贈

東川の清絲、魯冀州に寄せ戲贈す

鵝溪清絲清如冰。

鵝溪の清絲清うして冰の如し、

上有千歲交枝藤。

上に千歲枝を交ふるの藤有り、

藤生谷底飽風雪。

藤は谷底に生じて風雪に飽く、

歲晚忽作龍蛇升。

歲晚忽ち龍蛇と作りて升る、

嗟我雖爲老侍從。

嗟我は老侍從たりと雖も、

骨寒只受布與繒。

骨寒くして只布と繒とを受く、

牀頭錦衾未還客。

牀頭錦衾未還の客、

坐覺芒刺在背膺。

坐に覺ゆ芒刺の背膺に在るを、

豈如髯卿晚乃貴。

豈如かん髯卿が晩に乃ち貴きに、

福祿正似川方增。

福祿は正に川の方に増すに似たり、

醉中倒著紫綺裘。

醉中倒著す紫綺裘、

下有半臂出縹綾。

下に半臂有り縹綾出づ、

封題不敢妄裁翦。

封題敢て妄りに裁翦せず、

【字解】

【一】鵝溪。茶錄に、蜀東川鵝溪出畫絹と、【二】清絲。綾絹の名、【三】交枝藤。馮應榴曰く、清絲織成之紋、作交枝老藤、天矯如龍蛇と、【四】侍從。班固西都賦序に、言語侍從之臣、若司馬相如之屬と、【五】布與繒。布はマノ、繒は帛の總名、キヌ、【六】未還客。杜子美の詩、客從西北來、遣我翠織成、開絨風濤湧、中有掉尾鯨と、【七】芒刺。芒はノギ、「漢書霍光傳」に、宣帝詔見高廟、大將軍光、從驂乘、上內殿、憚之、若レ有芒刺在背と、恐れて忌むの意、【八】川方增。毛詩に、如山如阜、如岡如陵、如三川之方至、以莫不增と、【九】紫綺裘。李白の詩、倒披紫綺裘と、【一〇】半臂。孫光憲の「北夢瑣言」に、鄒愚

刀尺自有佳人能。刀尺自から佳人の能くする有り、

遙知千騎出清曉。遙に知る千騎清曉に出づるを、

積雪未放浮塵興。積雪未だ浮塵を興ら放めず、

白須紅帶柳絲下。白くしゆ紅帯柳絲の下、

老弱空巷人相登。老弱を空しうして人相登る、

但放奇紋出領袖。但奇紋をして領袖を出で放む、

吾髯雖老無人憎。吾髯老ゆと雖も人の憎む無し、

勢如磴道、謂之遊牀、故謂太守爲遊頭と、【二五】吾髯、韓退之の詩、我齒密何鄙、君顔老可憎と、

【題義】東川にて製出する清絲を魯元翰に寄呈して、且戯れに此の詩を贈る、元翰は冀州の太守にて名は有開である、

【詩意】鵝溪にて製出する清絲は清くして色氷の如くである、鵝溪の上には千歳も年を経るかと思ふ藤が枝を互に交錯して居る、其の藤の根は谷底に生じて幾多の風雪に飽きて居る、所が歳晚には忽ちに龍蛇と變作して溪上に升る、嗟予我が身は老侍従の職分である、が身骨は寒くして只布と縞とを受くるを思ふのみ、牀頭に錦衾して未だ郷に還らざる客は、出世する人を見ては坐るに覺ゆ芒刺が背

膺に在るか、豈如かんや髯卿が晩歲益す貴く、福祿は正しく川水の次第に増すが如くであるに、醉中に紫綺裘を倒に著服したときは、下に半臂が縹綾を出すの惟狀となる、封緘してある題は敢て妄りに裁翦しない、刀尺の事は自から佳人の能くするがある、遙に知る千騎の士が清曉に街に出づる状を、積雪がある爲め未だ浮塵は興らない、白髯や紅帶の者が柳絲の下に、老弱の區別なく家を虚しうして出て見る、但奇紋をして領袖より出し放つ、吾が髯は老ゆると雖も別に憎む人もない、

【餘論】紀曰く、戲筆亦波峭、然終是小品、不以詩論一と、又後半を評して言觀者衆多、至相踐踏二耳、語欠妥貼一と、巧者却失とは古語であるが、要するに詩意は種種に解釋か出来る、余が説を正しと思はざる人は、請ふ之を是正して呉れ玉へ、

怡然以垂雲新茶見餉報以大龍團仍戲作小詩

怡然、垂雲の新茶を以て餉らる、報ゆるに大龍團を以てす、仍ほ戯れに小詩を作る

妙供來香積。珍烹具大官。妙供香積より來る、珍烹大官に具ふ、

揀芽分雀舌。賜茗出龍團。揀芽雀舌を分つ、賜茗龍團を出づ、

曉日雲菴暖。春風浴殿寒。曉日雲菴暖か、春風浴殿寒し、

聊將試道眼。莫作兩般看。聊か將て道眼を試む、兩般の看を作す莫かれ、

【字解】〔一〕香積 前に屢げ辨す、〔二〕具大官 「王註」に、先生自言其膳於公府也、俸曰、勅厨所供曰大官食と、〔三〕揀芽 茶芽を選擇して采る、〔四〕雀舌 「建安茶錄」に、鷹爪、雀舌、爲上茶と、〔五〕龍團 歐陽修の「歸田錄」に、茶品莫貴於龍鳳、謂團茶と、元稹の詩、添爐煮雀舌、灑水淨龍鬚と、〔六〕雲菴 陸龜蒙の詩、雲菴早晚苦と、〔七〕浴殿寒 「長安志」に、浴堂門内、有浴堂殿と、〔八〕道眼 道種智の眼、〔九〕兩般看 般は種と同じ、簡と同じ、「碧巖」に、一有多種、二無兩般と、

【題義】清順字は怡然と云ふ僧が垂雲亭園に栽したる新茶を餉らるるを以て、公は大龍團の茶を以て報禮して、戯れに此の五律を賦したのである、

【詩意】妙供は我よりするが通常なるに反つて香積より來る、我は受けて大事にして大官貴人などに具へる、新芽を擇んで殊に雀舌の織きものを分たる、余は新茗を施賜するに龍團を以てしたのである、公は之を飲む曉日雲菴の暖き時、我は之を飲む春風浴殿の寒き時、聊か之を將て道眼を試みるのみ、同一味の茶であるから餉る餉らるると兩種の看察し玉ふな、

【餘論】紀曰く、頼有二結、實先有二結、而後有三前六句一耳と、此の評は余輩凡夫には解し難い、香積へは我より妙供するのが法、然るにアベコベに香積より妙供が來る、其の意味を強むる爲め莫作二兩般看一と結を作るものと考ふ、

次韻王忠玉游虎邱三首

王忠玉の虎邱に遊ぶに次韻す 三首

當年大白此相浮

當年大白此に相浮ぶ

【字解】〔一〕大白此相浮 「說苑」

老守娛賓得二邱

老守賓を娛み二邱を得たり

白髮重來故人盡

白髮重ねて來れば故人盡き

空餘叢桂小山幽

空しく叢桂を餘して小山幽なり

嘗云、不謂虎邱即謂閭邱、規父忠玉伯父也、〔三〕叢桂 「文選」に、劉安招隱士、淮南小山之所作也、其辭曰、桂樹叢生兮山之幽、偃蹇連卷兮枝相繚と、

【題義】王忠玉が江蘇省蘇州の虎邱山に遊ぶ詩に次韻して作る、

【詩意】僕も昔は大白を此の虎邱に浮べしことがある、老太守として閭邱公が賓として吾を娛まして呉れた人の邱と地名の邱と此の二邱を得た、然るに今日重來せる僕は白髮にて故人は泉下の人である、唯空しく叢桂が開いて小山が如何にも幽景を餘すを見るのみ、

〔一〕

〔二〕

青蓋紅旂映玉山

青蓋紅旂玉山に映す

新詩小草落元泉

新詩小草元泉に落つ

風流使者人爭看

風流の使者人争ひ看る

知有眞娘立道邊

知る眞娘の道邊に立つあるを

古今體詩 次韻王忠玉游虎邱三首

【字解】〔一〕紅旂 韓退之の詩、紅旂照海壓南荒と、〔二〕玉山 「世説」に、山公稱嵇叔夜之爲人、巖巖若孤松之獨秀、其醉也、忽若玉山之將頽と、〔三〕元泉 玄泉と同じ、孟東野の詩、手中飛黑電、

象外瀉元泉と、「張平子東京賦」に、陰池幽流、元泉冽清と、**【四】** 風流 劉禹錫の詩、風流太守韋尙書、道傍一見停車輿と、**【五】** 眞娘 吳都文粹、李紳詩序に、眞娘吳妓、死葬虎邱寺前、墓多花艸、以蔽其上と、白樂天の詩、眞娘墓虎邱道、不見眞娘鏡中面、唯見眞娘墓頭艸、自注に、虎邱中路有眞娘墓と、

【詩意】 青色の車蓋や紅色の旂旌を翻して來る太守の状は玉山にも映する壯麗である、而して新詩を爲り小草を書き泉流の色を黒くする、風流の使者即ち太守として人が争うて看る、中には眞娘が如き佳人も道邊に立つて居る、

〔三二〕

〔三三〕

舞衫歌扇轉頭空。

舞衫歌扇頭を轉ずれば空し、

【字解】 〔一〕舞衫 杜子美の詩、

只在青山杳靄中。

只青山杳靄の中に在り、

江清歌扇底、野曠舞衣前と、〔二〕

若共吳王鬪百草。

若し吳王と共に百草を鬪はしめば、

吳王 劉禹錫の詩、若共吳王鬪百草、不_レ如應_レ是_レ欠_レ西施と、吳王は

使君未敢借驚鴻。

使君未だ敢て驚鴻を借らず、

西施と百艸を鬪はすの游戲を爲す、〔三〕 驚鴻 劉禹錫の泰娘歌に、舞

學驚鴻水樹春、歌撥上客蘭堂暮と、

【詩意】 佳人達が舞ひ美姬輩が歌うたことは過去に頭を轉ずればそれは空と爲つて居る、今日は舊時の青山が杳靄の中に在るのみ、若しや吳王の若く百草の鬪技を作すに於ては、使君は敢て歌聲鴻を驚かす底の美人を借らない、

【餘論】 二三絶、皆公の集中に在つて平正に屬するものである、

寄蔡子華

蔡子華に寄す

故人送我東來時。

故人我を送る東來の時、

【字解】 〔一〕荔子 韓退之の「羅池廟碑」に、荔子丹兮蕉黃と、閩越に

手栽荔子待我歸。

手に荔子を栽ゑて我が歸るを待つ、

多く産する果物、〔二〕水如天 柳

荔子已丹吾髮白。

荔子已に丹く吾が髮白し、

子厚の詩、洞庭春盡水如天と 〔三〕

猶作江南未歸客。

猶ほ江南未歸の客と作る、

春水船 杜子美の詩、春水船如天上

江南春盡水如天。

江南春盡きて水天の如く、

坐と、〔四〕青衣江 「太平寰宇記」

腸斷西湖春水船。

腸は斷ゆ西湖春水の船、

に、青衣水、濯衣即青、故名と、

想見青衣江畔路。

想ひ見る青衣江畔の路、

〔五〕不論錢 杜子美の詩、朱橋不

白魚紫筍不論錢。

白魚紫筍錢を論せず、

論錢と、〔六〕三老 楊君素と王

霜髯三老如霜檜。

霜髯三老霜檜の如し、

慶源と蔡子華と、〔七〕舊交 宋之

舊交零落今誰輩。

舊交零落今誰が輩ぞ、

問の詩、舊交此零落と、〔八〕誰輩

莫從唐舉問封侯。

唐舉に従つて封侯を問ふこと莫かれ、

「世説」に、人問王夷甫、山巨源、

但遣麻姑更爬背。

但麻姑をして更に背を爬かしめん、

從今以往、四十三歲、澤笑謝而去、謂其御者曰、揖讓人主之前、食

肉富貴、四十三年足矣と、【三〇】麻姑、瓜の長き仙女、「神仙傳」に、麻姑手爪、不_レ如_二人爪_一、形皆似_二鳥爪_一、蔡經、心中私言、若背大痒時、得_二此瓜_一爬_レ背當_レ佳也と、白樂天の詩、爬_レ背向_レ陽眠と、

【詩意】故人は我が國を出て東來するを送る時、自ら荔子を栽ゑて我が歸るを待ち玉ふ、然るに年を経_レて荔子は已に丹紅となり吾髪は白くなる、而かも猶ほ江南未歸の客と作つて居る、其の江南も春が逝いて夏水が渺渺天の如くである、その水を看ても腸斷する西湖春水に船遊びしたことを、想ひ見る郷國の青衣江畔の路は、白魚も紫筍も發生が善くて錢を論せざる程の美味であらう、霜髯の三老は雄健にして霜檜の如くであらう、舊交游の人は零落して今に存在するものは誰と誰であるぞや、唐擧の如き人相見に従つて我が人相は如何と問ふことは無用である、但麻姑を雇うて吾が背を爬かしむればそれでよい、

【餘論】紀曰く、風韻特佳、如_レ出_二初唐人手_一と、寄する者蔡姓なるが故に蔡澤と蔡經との二蔡を以て陪伴せしむ、我邦の詩人は何の關係もなき古人を拉し來りて隨伴せしむることを往往に見る、此等の詩を精讀して學ぶ所あれ、

故周茂叔先生濂溪

【自注】濂溪在廬山下。

故周茂叔先生濂溪

【自注】濂は廬山の下に在り、

世俗眩_二名實_一至_二人疑_一有無。

世俗名實に眩し、至_二人疑_一有無を疑ふ、

怒移水中蠓。愛及屋上鳥。

怒は水中の蠓に移り、愛は屋上の鳥に及ぶ、

坐令此溪水。名與先生俱。

坐_二此の溪水_一をして、名先生と俱ならしむ、

先生本全德。廉退乃一隅。

先生本全德、廉退は乃ち一隅、

因抛彭澤米。偶似西山夫。

彭澤の米を抛つに因つて、偶_二西山の夫_一に似たり、

遂即世所知。以爲溪之呼。

遂に即ち世の知る所、以て溪の呼と爲す、

先生豈我輩。造物乃其徒。

先生は豈我輩ならん、造物は乃ち其の徒、

應同柳州柳。聊使愚溪愚。

應に同じかるべし柳州の柳に、聊か愚溪をして愚ならしむ、

【字解】

【一】眩、胸眩、目がくらむ、【二】名實、「太公六韜」に、名實相當則國治と、「漢元帝紀」に、宣帝曰、俗儒不_レ達_二時宜_一、好是_レ古非_レ今、使_二人眩_一於名實と、【三】至人、聖人と同意義、「莊子逍遙游篇」に、至人無_レ己、神人無_レ功、聖人無_レ名と、【四】怒

移、「晉書解系傳」に、張華、裴頠之被_レ誅也、趙王倫、孫秀、以_二宿憾_一、收_二系兄弟_一、梁王彤、救_二系等_一、倫怒曰、我於_二水中_一見_レ蠓且惡_レ之、況此人兄弟輕_レ我耶と、坊主憎ければ袈裟までと云ふ俗諺に同じ、【五】愛及、「尙書大傳」に、武王登_二夏臺_一、以_レ臨_二股民_一、周公旦曰、臣聞_レ之、愛_二其人_一者、愛_二其屋上鳥_一、憎_二其人_一者、憎_二其儲胥_一と、【六】全德、「莊子天地篇」に、天下之非譽、無_レ益損_一焉、是謂_二全德之人_一と、【七】廉退、「荀子」に、服_二近_一文章、砥_二厲廉隅_一と、【八】一隅、「論語述而篇」に、舉_二一隅_一而示_レ之、不_レ以_二三隅_一反_レと、【九】彭澤米、陶淵明、小兒を拜するを厭ひ、五斗米を抛つ、【一〇】西山夫、伯夷と叔齊、西山は即ち首陽山、「揚子」に、或問_二子蜀人_一也、詩_レ人、曰、有_二李仲元者_一、人也、不_レ夷_レ不_レ惠_レ可_レ否_レ之間也、如_レ是則奚名_レ之不_レ彰、曰、無_二仲尼_一、則西山之餓夫、與_二東國之細臣_一、惡乎聞_レと、【一一】造物、天地自然、今日俗人言_二所_一の自然界、「淮南子」に、友_二造化_一と、【一二】柳州柳、柳子厚の詩、柳州柳刺史、

種柳柳江邊と、【二三】愚溪愚 柳子厚の文、柳子名愚溪、而居五日、谿之神夜見夢曰、子何辱予、使予爲愚耶、有其實者、名固從之、予固若是耶、柳子曰、汝誠無其實、然以吾之愚、而獨好汝、汝惡得避是名耶と、

【題義】周茂叔は名は敦頤、春陵の人、家を廬山の蓮花峯下に結び居る、峯下に溪水あり之を濂溪と名づく、其の人、曾襟灑落光 風霽月の如し、太極圖説を著はして宋代理學の開祖と爲る、程明道も弟の伊川も共に門弟子である、熙寧六年に年五十七を以て卒す、公は此の時年三十八、

【詩意】世俗の多くは名と實とに胸眩する、至人は名も實も有りや無きやと云ふことを疑ふ、世俗は一たび怒氣生ずれば水中の蜩まで悪むに至る、至人は博く人を愛して屋上の烏までに及ぶ、今の世に至人である所の先生を崇敬する者は、先生の生前好みし所の溪水まで貴ぶ、先生は本より徳を完全に備へし人である、故に廉退の徳は先生の大徳の一端に過ぎないのである、彭澤なぞと云ふ小縣の知事を抛擲して、餓死するとも道を守る西山の夷齊に極めて似て居る、されど自ら隠るるは世は却つて之を知る、乃ち先生を記念する爲め此の溪に濂溪と云ふ名を付けたのである、先生は豈凡俗たる我輩の友ではない、造物即ち自然界を以て其の徒と爲すのである、古人に譬を取れば應に柳柳州の人と爲り同じきかと、濂溪の廉は聊か愚溪の愚と比してよい、

【餘論】紀曰く、刻意做出、語語深警、東坡傾三倒於茂叔、如是而與三伊川不免齟齬、則伊川有以激之也と、穿花蛟蝶深深見、點水蜻蜓款款飛の自然を解する力無きの人、公より之を視れば小兒同然でありしならんと思ふ、所が濂溪先生は白蓮の一賦にても知る、天地自然の中に徜徉する人は、公の眼よりは此の人以外に多くあらずと思ふ、

和錢四寄其弟蘇

錢四に和し、其の弟蘇に寄す

再見濤頭湧玉輪。

再び見る濤頭玉輪湧くを、

【字解】【一】玉輪 月の異名、

煩君久駐浙江春。

君を煩はして久しく駐まる浙江の春、

【字解】【二】玉輪 月の異名、

年來總作維摩病。

年來總て維摩の病を作す、

【字解】【三】維摩 病、佯病、假病と見てよい、

堪笑東西二老人。

笑ふに堪へたり東西二老人、

【字解】【四】東西 越州は浙江の東、杭州は浙江の西、穆父は西に居り公は東に居る、

【題義】錢四は錢穆父にて其の弟蘇は錢七である、穆父の詩、東方千騎擁朱輪、衣錦歸逢故國春、莫下向西湖戀風月、鶴原知有望歸人、蘇の詩、烏衣巷裏走雙輪、正是家山二月春、明日潮平定歸去、蓬萊還見謫仙人、

【詩意】再び見る浙江の濤頭に玉輪が湧くことを、君を煩はして久しく駐めしむ浙江の春に、僕は年來總ての事を伴りて病と稱して避けて居る、笑ふに堪へたり東西の二老人が少年の意氣がないことは、

【一】

【二】

老來日月似車輪。

老來日月車輪に似たり、

【字解】【一】生人 白樂天の詩。

此去知逢幾箇春。此を去つて知る幾箇の春に逢ふを、

有何功德及生人こと、是れは生民、唐人、太宗の諱を避けて人を代用する、今は梅子が早や熟した意と思ふ、

昨夜冰花猶作柱。

昨夜冰花猶ほ柱を作す、

【詩意】老來は殊に覺ゆ日月迅速に過ぎて車輪の如くなるに、今日より以後は幾箇の春に逢ふや知らない、昨夜は冰花が柱を現作してゐるのを見た、而して曉來は梅子が已に成熟して居る。

次周燾韻

周燾の韻に次す

周燾游天竺觀激水。作詩云。拳石著婆色兩青。竹龍驅水轉山鳴。夜深不見跳珠碎。疑是簷間滴雨聲。東坡和之。

【訓讀】周燾天竺に遊び、激水を觀る、詩を作りて云く、拳石著婆色兩つながら青し、竹龍水を驅り轉た山鳴、夜深けて見ず跳珠の碎くるを、疑ふらくは是れ簷間滴雨の聲かと、東坡之に和す、

道眼轉丹青。常於寂處鳴。

道眼轉た丹青、常に寂處に於て鳴く、

早知雨是水。不作兩般聲。

早く雨是れ水、兩般の聲と作さずと知る、

【字解】「一」道眼。「圓覺經」に、分別邪正、能於末世一切衆生無畏道眼と、道を修して得たる眼、「二」丹青。「揚子」に、

如玉如聲、愛變丹青と、「三」寂處鳴。「楞嚴偈」に、聲無既無滅、聲有亦非生、生滅二緣離、是則常眞實と、「四」兩般聲。雨聲と水聲と別種のものでない、

【題義】周燾が杭州の天竺山靈山教寺に遊んで激水を觀て作る詩に次韻して作る、作詩以下の三十五字は、後人紀錄の語にして公が序として作つたものではない、

【詩意】君の道眼は人間が肉眼にて丹青を認むるとは轉變して居る、常に閑寂處に於て道を鳴らす、早くに雨聲は是れ水聲、固より兩般の聲でないとして知つて居る、

【餘論】一種の禪偈である、徐長孺が禪喜集に之を採らざるを怪むのである、

送南屏謙師

南屏の謙師に送る

南屏謙師。妙於茶事。自云得之於心。應之於手。非可以言傳。學到者。十月二十七日。聞軾游落星。遠來設茶。作此詩贈之。

【訓讀】南屏の謙師、茶事に妙、自ら云ふ、之を心に得て、之を手に應ず、言を以て傳へ學んで到るべき者にあらずと、十二月二十七日、軾が落星に遊ぶを聞いて、遠く來り茶を設く、此の詩を作り之に贈る、

道人曉出南屏山。

道人曉に出づ南屏山、

【字解】「一」南屏。「咸淳臨安

來試點茶三昧手。來り試む點茶三昧の手、

忽驚午盞兔毛斑。忽ち驚く午盞兔毛の斑、

打作春籜鵝兒酒。打して春籜鵝兒の酒と作す、

天台乳花世不見。天台の乳花世に見ず、

玉川風腋今安有。玉川の風腋今安んぞ有らん、

先生有意續茶經。先生意あり茶經を續ぐ、

會使老謙名不朽。會す老謙の名をして不朽ならしめん、

冷、他處或薄、或色紫、皆不及也と、【四】鵝兒酒 杜子美の詩、鵝兒黃似酒、對酒愛新鵝と、【五】天台 天台山は浙江台州府に在る、【六】乳花 「茶寮記」に、凡茶少湯多、則雲脚散、湯少茶多、則乳而浮と、【七】玉川 盧全玉川子の詩、七碗喫不盡、兩腋習習清風生と、【八】先生 公自ら謂ふ、【九】茶經 三卷、唐の陸羽の著、

【題義】南屏山に住する謙師は茶事に精妙である、自ら謂ふ茶に於ては心手相應である、是れは言を以て人に傳ふるを得ず、學習して到るを得ざる者であつて、所謂自得である、十二月二十七日に僕が落星寺に遊ぶと聞いて、南屏より下山して來り點茶を設けらる、此の詩を作りて之に呈贈する、

【詩意】謙道人は早曉に南屏を出山して來り、我が爲に點茶三昧の手を試験せらる、忽ち驚く午盞の中に兔毛の斑紋現はるるに、又一打して春籜に鵝兒酒を盛るかと思ふ、天台より産出する大茗の乳花

は世に多く見ない、又玉川が飲んで以て兩腋に風を生ずと賞めた茶は今何處にかある、先生は師が爲に續茶經を著はさんと思ふ、會す師の名を不朽に傳へしめん、

【餘論】紀曰く、淺陋不似東坡語と、馮應榴曰く、鄭羽重刊施注本、止南屏謙師、遠來設茶、而無此引と、余謂ふ公は題目を長くし、又序引を書く癖がある、馮が言ふ八字の題は後世のものにて、此の小引は公の自ら記する真なるものと思ふ、佳篇とは稱し難けれど、淺陋を以て評するは酷である、

次韻子由使契丹至涿州見寄四首

子由が契丹に使し、涿州に至り寄せらるるに次韻す 四首

老人癡鈍已逃寒。老人癡鈍にして已に逃寒、

子復辭行理亦難。子も復た行を辭す理亦難し、

【自注】余昔年辭免使北

要到盧龍看古塞。要す盧龍に到りて古塞を看ば、

投文易水弔燕丹。文を易水に投じて燕丹を弔せよ、

丹 燕の太子丹は荆軻を送りて此に至る、

【題義】子由が契丹に使節と爲つて赴き涿州まで至り、此處より寄せられた四首の詩に次韻したので

古今體詩 次韻子由使契丹至涿州見寄四首

【字解】一 癡鈍 「顏氏家訓」に、梁世有二侯、嘗對元帝飲、

譴自陳、癡鈍乃成、颺段、元帝答之

云、颺異涼風、一段非干木と、癡

は智の反對、鈍は利の反對、二

盧龍 今日の直隸津海道の地、唐代

節度使を置く所、三 易水 荆軻

の歌、風蕭蕭兮易水寒と、四 燕

ある、

少年病肺不_レ禁_レ寒、命出_二中朝_一敢避_レ難、莫_下倚_二卓貂_一欺_二朔雪_一、更催_二靈火_一煮_二鉛丹_一、
夜雨從來相對眠、茲行萬里隔_二胡天_一、試依_二北斗_一看_二南斗_一、始覺吳山在_二目前_一、

誰將_二家集_一過_二幽都_一、逢_二見胡人_一問_二大蘇_一、莫_下把_二文章_一動_二蠻貊_一、恐妨談笑臥_二江湖_一、
虜廷一意向_二中原_一、言語綢繆禮亦虔、顧我何功慚_二陸賈_一、棗裝聊復助_二歸田_一、

【詩意】老人は癡鈍になりて活氣がなく已に逃寒する、子は復た此の行を辭するの道理は難い、此の行には要す盧龍を通過して古塞を看るのである、その時は文を作りて易水に投じ燕丹を弔するがよい、

〔二〕

胡羊代馬得安眠。

胡羊馬に代つて安眠を得、

窮髮之南共一天。

窮髮の南共に一天、

又見子卿持漢節。

又見る子卿が漢節を持するを、

遙知遺老泣山前。

遙に知る遺老が山前に泣くを、

遺老來相問、今は開元幾葉孫と、查初白云ふ、五代史、石晉、割_二燕雲十六州_一以_レ賂_二契丹_一、皆在山後、故云遺老泣_二山前_一と、
【詩意】胡羊を馬に代へて羊背に安眠しつつ行く、杳杳たる窮髮の南共に一天である、想像する漢の

蘇武が漢節を持して屈せざるを、遙に知る遺老が山前に泣くことを、

〔三〕

氈毳年來亦甚都。

氈毳年來亦甚だ都し、

時時鵠舌問三蘇。

時時鵠舌三蘇を問ふ、

那知老病渾無用。

那ぞ知らん老病渾て無用、

欲向君王乞鏡湖。

君王に向つて鏡湖を乞はんと欲す、

問三蘇 宋刻本に問の字、向の字に作ると、查初白は問は非、向は是と云ふ、余謂ふ問は是、向は非と、結句に欲向の字がある、自注に、余與_二子由_一入_レ京時、北使已問所在、後余館_二伴北使_一屢誦_二三蘇文_一と、【四】鏡湖 「元和郡縣志」に、鏡湖在山陰會稽兩縣界、築塘著_二水_一、水少則洩_レ湖灌_レ田、水多則閉_レ湖、洩_二田中水_一入_レ海、所_レ以_レ無_二凶年_一と、

【詩意】胡服ではあるが氈毳は年來亦甚だ美都であると思ふ、時時に胡人が缺舌を動かして三蘇の人となりを問ふこともある、那ぞ知らん吾は老病の身世に於て無用である、願ふことなら君王に向うて鏡湖を賜はり此に隱居せんと、

〔四〕

始憶庚寅降屈原。

始めて憶ふ庚寅に屈原降るを、

【字解】 庚寅 「楚辭」に、

古今體詩 次韻子由使契丹至涿州見寄四首

旋看蠟鳳戲僧虔。旋りて看る蠟鳳の僧虔に戯るるを、
隨翁萬里心如鐵。翁に隨つて萬里心鐵の如し、

【自注】時猶子遲待行。

此子何勞爲買田。此の子何ぞ勞せん爲に田を買ふを、

【詩意】始めは憶ふ年の庚寅に屈原が誕生せることを、更に旋りて看る蠟鳳を作りて游戲せる僧虔を、乃翁に萬里隨行せんと思ふ子遲の心は鐵の如く固い、此の如き佳兒には自力がある買田の苦勞はしなくもよい、

【餘論】紀は第一首を評して、起二句太朴と、第二首を評して、虛字入絶、不レ合格、古體則可と、古體と今體との別は公は教ふる人にて、教ふる人ではない、次韻の罪、此に至るのである、余は第四首を讀んで是れ子由を送るに契丹と何の關係あつて、屈原を出し、僧虔を出すやと疑ふ、他の題目と改むるも毫も差支がない、是も亦次韻の惡法からである、公の詩を讀む者は、公の所謂詩品ある詩と詩品は備はらざるも學力を示さるる詩と區別する要がある、詩品としては竹外桃花、春江水暖等の詩に如くものはない、

蘇東坡詩集 卷三十二

古今體詩 七十二首

臥病彌月聞垂雲花開順閣黎以詩見招次韻答之

臥病月を彌る、聞く垂雲花開くと、順閣黎詩を以て招かる、次韻して之に答ふ

道人心似水不礙照花妍。道人心水に似たり、礙げられず照花の妍なるに、

宴坐春強半清陰月屢遷。宴坐す春強半、清陰月屢は遷る、

平生無起滅一念有陳鮮。平生起滅無し、一念陳鮮有り、

嫋嫋風枝舉離離日夢薦。嫋嫋風枝舉がり、離離日夢薦る、

病吟終少味老醉不成顛。病吟終に味少し、老醉顛を成さず、

何必遨頭出湖中有散仙。何必必ずしも遨頭出でん、湖中散仙有り、

【字解】(一)道人 題目に閣黎とある、閣黎は阿闍黎の異稱で、梵音の直寫、譯して軌範とか教授師の義、以て高僧の敬稱とする、

(二)不礙 礙は障礙、阻礙、俗語の邪魔、(三)宴坐 燕坐と同じ、身心靜寂にして坐禪する、「林間錄」に、倚杖少林、面壁燕坐と、

【四】清陰 沈休文の詩、虛館清陰滿と、【五】月屢遷 「周易」に、其爲道也屢遷と、【六】無起滅 不生不滅と同義、事物は因縁和合すれば生起し、因縁離散すれば滅謝する、【七】一念 「仁王經」に、九十刹那爲一念と、「法華文句」に、一念時節極促也と、【八】陳鮮 陳は舊陳、鮮は新鮮、【九】嫋嫋 風のそよぐ貌、【一〇】離離 連りて不斷の貌、【一一】日萼 萼は花のワテナ、鶯は字音エシ、訓はあざる、字書、物不鮮也と、李義山の詩、日薄不萼花と、韓退之の詩、日萼行燦燦と、【一二】遊頭 「成都記」に、太守凡出游、士女列於木牀觀之、勢如磴道、謂之遊牀、故謂太守爲遊頭と、

【題義】臥病して彌月、聞く孤山垂雲亭園に花が開くと、清順閣黎が招待する爲に詩を贈らるるに答ふる詩である、

【詩意】道人の心は水に似て澹泊である、照花が如何に妍麗であるも聊かも障礙とはならない、冥坐して修養する正に春強半に及ぶ、清陰は月が屢ば遷る、平生物の不生不滅なることを觀する、又一刹那の裏にも舊新が交代するを察して居る、嫋嫋として風が花枝を擧げ、離離として日光が花萼を鶯する、病中の吟詠は終に味が少い、老人の酔は終に顛にまで及ぶ元氣がない、何ぞ必ず遊頭の出游と言はん、湖中に自から散仙がある、

【餘論】紀曰く、無甚佳處、氣機好耳、東坡五言長律、皆流走有氣と、不礙、不成、有陳、有散、公の長律同字あるときは必ず二箇處に置く、余は前に公の病であると評して置きたるが、公は蘇家一流の法を行ふものか、

雪後便欲與同僚尋春。一病彌月。雜花都盡。獨牡丹在爾。劉景文左藏和順閣黎詩見贈。次韻答之。

雪後便ち同僚と春を尋ねんと欲す、一病月を彌り、雜花都て盡き、獨り牡丹在る爾、劉景文左藏、順閣黎の詩を和し贈らる、次韻之に答ふ

殘花怨久病。剩雨泣餘妍。
殘花久病を怨む、剩雨餘妍に泣く、
不見雙旌出。空令九陌遷。
雙旌の出づるを見ず、空しく九陌をして遷らしむ、

【自注】開園時市井皆入。

知君苦寂寞。妙語嚼芳鮮。
知る君が寂寞に苦むを、妙語芳鮮を嚼む、
淺紫從爭發。浮紅任蚤蕪。
淺紫爭ひ發くに從せ、浮紅蚤く蕪るに任す、
天葩尙青萼。國色待華顛。
天葩尙ほ青萼、國色華顛を待つ、
載酒邀詩將。臞儒不是仙。
酒を載せて詩將を邀ふ、臞儒是れ仙ならず、

【字解】【一】剩雨 杜子美の詩、剩水滄江破、殘山碣石開と、【二】餘妍 劉繪の詩、拾羽弄餘妍と、【三】雙旌 韓退之の詩、免勞去騎逐雙旌と、【四】天葩 葩はハナ、(華)、奇葩、艷葩、天葩、皆華を賞めて言ふ、【五】國色 牡丹を賞めて言ふ、王建の詩、國色朝酣酒、天香夜染衣と、【六】華顛 「新序」に、齊宣王曰、士亦華髮墮顛而後可耳と、「蔡邕賦」に、華顛丈人と、白頭の老者を言ふ、【七】詩將 牧之の詩、今代風騷將と、【八】臞儒 「司馬相如大人賦序」に、以爲列仙之傳居山澤間、形容甚臞、此非帝

王之仙意也と、

【題義】雪後に同僚と春を尋ねんと希望を持つて居た、所が病氣に罹りて一月餘も臥蓐に在つた、其の間に雑花都て飛散して牡丹が獨り開きて在るのみ、景文が順闍黎に和して作る詩を贈られたるに依つて、次韻して之に答ふ、

【詩意】殘花を看る自分の久病を怨まずに居れない、無駄な雨には餘妍が泣かされる、太守出游する雙旌を見ずに、空しく九陌の春色を遷らしむ、知る君も殘花の寂寞なるに苦んで、妙語は芳鮮を嚼む如き味がある、淺紫色のものは争うて發くに從し、浮紅色のものは蚤く色を損する、所が此の天葩は尙ほ青萼が盛んなるのみでない、其の絶世の國色は華顛を待つもの如くである、酒を用意して詩壇の將軍を招致せらる、余の如き臞儒は畢竟是れ仙ではない、

【餘論】紀曰く、第四空令句不レ妥と、劉夢得の九陌人人走馬看より九陌の字を得たりとせば、遷の字紀評の如く妥當でない、是も次韻の罪、王若虛曰く、次韻者實作者之大病也、詩道至宋人二衰敝極、如三才識東坡、亦波蕩從之と、紀は不妥不妥と頻りに言ふが、次韻の罪であると云ふことを言はぬ、而して此の詩中、不見、不是、二の不字、蘇家の法か、例の病か、

病後醉中

病後醉中

病爲兀兀安身物。

病んで兀兀安身の物と爲り、

【字解】兀兀 動かざる貌、

酒作逢逢入腦聲。

酒は逢逢入腦の聲を作す、

韓退之の文、焚膏油以繼晷、常兀兀以窮年と、

堪笑錢塘十萬戶。

笑ふに堪へたり錢塘十萬戶、

二、逢逢 「毛詩」に、鼙鼓逢逢と、鼓の聲、又雲煙の湧く貌にも用ふ、

官家付與老書生。

官家付與す老書生、

【詩意】病中は兀兀として安身の物である、病後に之を飲めば逢逢と腦に入る聲を作すかと思ふ、笑ふに堪へたるは錢塘には十萬戶も在る、此の十萬戶に命令を下す役を官家が此の老書生に付與さるることを、

次韻劉景文周次元寒食同游西湖

劉景文、周次元が寒食同じく西湖に遊ぶに次韻す

絮飛春減不成年。

絮飛び春減じて成年ならず、

【字解】一、春減 杜子美の詩、一片飛花減却春、風飄萬點正愁人と、

老境同乘下瀨船。

老境同じく乗る下瀨の船、

二、成年 二十歳以上の

藍尾忽驚新火後。

藍尾忽ち驚く新火の後、

三、下瀨船 「漢武帝紀」に、元鼎五年、下瀨將軍下蒼梧と、

遨頭要及浣花前。

遨頭要す及ぶ浣花の前、

陸には下澤車、水には下瀨船、

山西老将詩無敵。

山西の老将詩に敵なく、

藍尾 「仇池筆記」に、蘇鶚云、以酒

洛下書生語更妍。洛下の書生語更に妍、

共向北山尋二士。共に北山に向うて二士を尋ねば、

畫橈鼉鼓聒清眠。畫橈鼉鼓清眠を聒す、

巡匪爲三婆尾と、婆は食と同じ、藍尾と同じ、最後に飲む酒、俗にオツモリノサケである、馮應榴曰く、錦繡萬花谷、或云藍頰、水深三丈、時人取以爲酒と、白樂天の詩、三杯

藍尾酒、一碟膠牙餠と、【五】新火、三日間は火食を禁じ、四日目に始めて火食する、之を新火と云ふ、【六】浣花前、「老學菴筆記」に、成都俗、毎年四月十九日、於杜甫浣花溪艸堂宴集、稱之浣花日と、杜子美は草堂を浣花溪北と、萬里橋西の二處に設けたのである、自注に、成都太守、自正月二日田游、謂之遊頭、至四月十九日、浣花乃止と、【七】山西、「漢趙充國傳贊」に、秦漢以來、山東出相、山西出將と、今劉景文を言ふ、【八】詩無敵、杜子美の詩、白也詩無敵と、【九】洛下、「晉書」に、謝安、本能爲洛下書生詠、直鼻疾、故其晉濁、名流愛其韻、而莫能及、或手掩其鼻以效之と、今周次元を言ふ、【一〇】二士、清順と道潛の二人、「高僧傳」に、魏法度、法紹、游學北山、綜習三藏、靈跡異事、世皆見聞、世號曰北山二聖と、【一一】畫橈、橈は楫、カゲ、【一二】鼉鼓、鼉は鼉の種族、此の皮にて鼓を張る、「詩大雅」に、鼉鼓逢逢、矇瞍奏功と、

【題義】劉と周の二人が寒食の日に西湖に遊び詩を作り贈られたるに次韻したものである、

【詩意】柳絮は飛び散じて三春を満足に飾らない、老境の人は同じく下瀬の船に乗るから速かに過ぎる、藍尾酒を備へるを見て忽ちに驚く時節は早や新火後である、太守が出游する必ず浣花祭をする前である、山西の老將は詩に於て敵がない、洛下の書生は語更に妍美である、二子が共に北山に向うて二開士を尋ねれば、畫橈鼉鼓で游人が多く清眠を聒しうするであらう、

【餘論】紀曰く、後四句平直と、下瀬、洛下、山西、北山、例の法であるか、病であるか、

連日與王忠玉張金翁游西湖訪北山清順道潛二詩僧登垂雲亭
飲參寥泉最後過唐州陳使君夜飲忠玉有詩次韻答之

連日王忠玉、張金翁と西湖に遊び、北山の清順道潛の二詩僧を訪ひ、垂雲亭に登り、參寥泉を飲み、最後に唐州の陳使君を過ぎ夜飲す、忠玉詩あり、次韻之に答ふ

北山非自高千仞付我足。北山自高にあらず、千仞我が足に付す、

西湖亦何有萬象生我目。西湖亦何か有る、萬象我が目に生ず、

雲深人在塢風靜響應谷。雲深くして人塢に在り、風靜なるも響谷に應ふ、

與君皆無心信步行看竹。君と皆無心、歩に信せて行いて竹を見る、

竹間逢詩鳴眼色奪湖淥。竹間詩鳴に逢ふ、眼色湖淥を奪ふ、

百篇成俯仰二老相追逐。百篇俯仰を成す、二老相追逐す、

故應千頃池養此一雙鵠。故に應に千頃の池なるべし、此の一雙鵠を養ふ、

山高路已斷亭小膝更促。山高く路已に斷ゆ、亭小にして膝更に促る、

夜尋三尺井渴飲半甌玉。夜三尺の井を尋ね、渴飲す半甌の玉、

明朝開絲管寒食雜歌哭。明朝絲管を開し、寒食歌哭を雜ふ、

使君坐無聊。狂客來不速。

使君無聊に坐し、狂客速かざるに來る、

載酒有鷗夷。扣門非啄木。

酒を載せて鷗夷あり、門を扣くは啄木にあらず、

浮蛆豔金盃。翠羽出華屋。

浮蛆金盃に豔り、翠羽華屋を出づ、

須臾便陳迹。覺夢那可續。

須臾に便ち陳迹、覺夢は那ぞ續ぐ可けん、

及君未渡江。過我勤秉燭。

君が未だ江を渡らざるに及んで、我が勤めて燭を秉るに、

一笑換人爵。百年終鬼錄。

一笑す人爵に換ふるに、百年終に鬼錄、

【字解】

【一】響應 賈賓王の詩、山虛響自應、水淨望如空と、【二】詩鳴 韓退之の送孟東野序に、東野始以其詩鳴、其高出魏晉と、詩を以て世に鳴るの人、清順と道潛、【三】二老 忠玉と金翁、【四】追逐 おひ、おはれる、宋史薛惟吉傳に、與京師少年、追逐、角抵蹴鞠と、【五】一雙鶴 鶴はクガヒ、白鳥、雁に似て大なる鳥、仙人多く乗る鳥、【六】三尺井 參寥泉を言ふ、【七】半甌玉 甌はカメ、白樂天の詩、似漱寒玉水、如聞商風弦と、【八】聞絲管 杜子美の詩、錦城絲管日紛紛と、【九】無聊 心に憂あり樂まざるの謂、【一〇】不速 「易」に、有ニ不速之客三人來、敬之終吉と、【一一】鷗夷 馬革にて作りたる袋、「吳語」に、盛以鷗夷、而投之江と、酒を盛る器、「揚雄酒箴」に、自用如此、不如此鷗夷と、【一二】浮蛆 酒の上に浮くアラ(膏)を浮蛆又は浮蟻とも云ふ、【一三】翠羽 カハセヒ、好色賦に、眉如翠羽と、【一四】秉燭 「漢古詩十九首」に、晝短苦夜長、何不秉燭遊と、【一五】人爵 「孟子告子篇」に、公卿大夫、此人爵也と、

【題義】

毎日毎日、王忠玉と張金翁の二人と共に西湖に遊び、北山に清順道潛の二師を訪ひ、時に垂雲亭に登りて參寥泉を飲み、最後に唐州の陳使君が家を過ぎて夜飲を爲す、忠玉先づ詩を作る、乃ち

之に次韻する、

【詩意】

北山は自高ではない、千仞も望めば高いが上れば我足下である、西湖も亦何か有らんや、萬象渾て我が此の小さなる目に生ずるではないか、所が雲は深くして人が塙に在る、風は靜なるも響は谷に應へる、君等と我と皆無心である、歩に信せて行行路に竹を見る、偶然にも其の竹間にて詩を以て鳴る僧に逢ふ、二僧の眼色は何の濁りも無く湖潦を奪ふが如き玲瓏である、詩は百篇も作り詩の世界に俯仰する、此の二僧と君が輩二老は相追逐して遊ぶ、其の隔意なき游の境界は千頃の池の如く闊い、一雙鶴を養ふも仙游に擬する爲であらう、山は高くして路は已に斷えてある、亭は小であれば三人の膝に互に促る、夜に及んで三尺の井水を尋ね、渴して居るから半甌も飲んだと思ふ、明朝に及べば絲竹管絃の音が聞しきのみではない、寒食の日歌ふ者と哭する者と雜はる、陳使君は此の時無聊に坐し玉ふ、時に狂客共が招待せざるに來る、併し酒も持參して居る、門を扣くは啄木鳥ではなく狂客共である、浮蛆も金盃に豔と漲る、翠羽も亦華屋より出づ、須臾の間に此の興懷は渾て陳迹となり、覺も夢も那ぞ永續すべきものでない、使君も未だ渡江せざる前に、我等の同志の許に過ぎ秉燭の遊びを勤めて試み玉へ、一笑する人爵に代ふるに、百年は終に鬼錄と變化する、

【餘論】

紀曰く、詩鳴(九句)不妄、換人爵不妄、題必有訛、與詩不應と、人爵は鬼錄の文字に對してなれば、換人爵として不妄とは謂へないが、逢詩鳴は人を愚にするも甚だしい、白面書生の語、到底公の語とは謂へない、例の次韻の罪、紀は題必有訛と、余は謂ふ、題は決して訛あらずと、

謝曹子方惠新茶

曹子方が新茶を恵むを謝す

陳植文華斗石高

陳植が文華斗石高し、

景宗詩句復稱豪

景宗が詩句復た豪と稱す、

數奇不得封龍頌

數奇得ず龍頌に封せらるるを、

祿仕何妨似馬曹

祿仕何ぞ妨げん馬曹に似たるを、

囊簡久藏科斗字

囊簡久しく藏す科斗の字、

劍鋒新瑩鸞鵲膏

劍鋒新に瑩く鸞鵲膏、

南州山水能爲助

南州の山水能く助を爲す、

更有英辭勝廣騷

更に英辭の廣騷に勝る有らん、

當單于と、

龍頌 龍頌侯、

馬曹

「世説」に、王子猷、爲桓冲騎兵參軍、桓問曰、卿何署、答曰不知何署、時見率

鷺鷥膏

カヒツブリと稱する鳥、水禽、此の鳥の膏を以て劍や刀の鏽を取る、續英華の詩、馬銜首蒼葉、劍瑩鸞鵲膏と、

漢書揚雄傳に、雄作書曰反離騷、又旁離騷、作三重一篇、名曰廣騷と、

【題義】福建轉運使の曹子方が新茶を恵むを謝する詩、

【字解】 〔一〕陳植 魏の陳思王

子建曹植、曹植は多くサウシヨクと訓むが、余が師はサウチと訓む、

〔二〕斗石高 「南史」に、謝靈運云、天下才共一石、曹子建、獨得三八斗、

我得一斗、自レ古及レ今、共用一斗と、

〔三〕景宗 「南史曹景宗、華光殿賦詩」に、去時兒女悲、歸來笳鼓競、借問行路人、何如雲去病と、

〔四〕數奇 數は運命の義、奇は奇數、自己一人にて二人の耦と合せざる義、「史記」に、李廣數奇、莫令

馬來、似是馬曹と、官等の低きを言ふ、

〔七〕科斗 蝌蚪、オタマシヤクシ、上古の文字の形狀が蝌蚪に似たるから云ふ傳説、

〔八〕鷺鷥膏 漢書揚雄傳に、雄作書曰反離騷、又旁離騷、作三重一篇、名曰廣騷と、

【詩意】曹植が文華は斗石高いと稱せらる、又曹景宗が詩句は豪健であると稱せらる、君は同じく曹姓であるが不幸數奇にして龍頌侯に封せられない、祿仕して何ぞ妨げんや馬曹に似たることを、囊簡には久しく科斗の字を藏せらる、而して劍鋒は新瑩光光として鸞鵲膏にて瑩いたのであらう、南州の地の山水は能く文辭の助と爲る、今より更に英辭の廣騷に勝るものを作るであらう、

【餘論】紀曰く、以左傳晉重耳蔡甲午之例一例之、陳王植、稱陳植亦可、然終是太生と、謝が子建得二八斗一と言うたのであるから子建と用ひて可なるものを、殊更に陳植などと名を稱する所に公が子建を蔑視する意を見る、左傳の例でも何でもない、公の意蔑視するに在る、要するに子建も景宗も新茶とは何の縁もない、曹姓である所から子方の文才を之にて數稱するのみ、新も無ければ茶も無い、贈曹子方の題が切である、

新茶送簽判程朝奉以餽其母有詩相謝次韻答之

新茶を簽判程朝奉に送り、以て其の母に餽せしむ、詩あり相謝せらる、次韻之に答ふ

縫衣付與溧陽尉

縫衣付與溧陽の尉、

舍肉懷歸穎谷封

【字解】 〔一〕縫衣 「王註」に、孟郊、爲溧陽尉、有游子吟云、慈母手中線、游子身上衣、臨行密密

聞道平反供一笑。
會須難老待千鍾。
火前試焙分新勝。
雪裏頭綱輟賜龍。
從此升堂是兄弟。
一甌林下記相逢。

聞く道らく平反して一笑に供すと、
會す須らく難老して千鍾を待つべし、
火前試焙新勝を分ち、
雪裏頭綱賜龍を輟む、
此れより升堂是れ兄弟、
一甌林下記相逢を記す、

縫、意恐遲遲歸と、孟郊字は東野、
年五十進士に登り、深陽尉と爲る、
【二】 穎谷封 「左傳隱公元年」に、
鄭伯、饗姜氏于城穎、而誓之曰、
不レ及黄泉、無ニ相見一也、既而悔之、
穎考叔、爲穎谷封人、聞之有獻
於公、公賜之食、食而舍肉、公問
之、對曰、小人有母、皆嘗小人
之食、未嘗君之羹、請以遺之、公

曰、爾有母遺、緊我獨無、穎考叔曰、敢問何謂也、公語之故、且告之悔、對曰、君何患焉、若闕地及泉、隧而相見云云と、【三】
平反 「漢書」に、雋不疑、爲京兆尹、每行縣、錄囚徒還、其母輒問不疑、有所平反、活幾何人、即不疑多有平反、母喜笑
爲飲食、語言異於他時、或無所出、母怒爲之不食と、甲乙の裁判が兩度とも眞の公平でなきたときは、其の裁判を破棄して公平の
判決を下す、ことを平反と言ふ、【四】 難老 「詩魯頌」に、既飲旨酒、永錫難老と、長壽を賜ふと同じ、【五】 千鍾 「莊子寓言」に、
曾子再仕、而心再化、曰吾及親仕、三釜而心樂、後仕三千鍾不泊、吾心悲と、【六】 火前 「品茶要錄」に、茶事起驚蟄前、其初造
曰試焙、又曰一火、其次曰二火、故市茶者、唯何出於三火之前者爲最佳と、【七】 新勝 「北苑茶錄」に、貢新勝、試新勝の名
あるも意義は未詳、【八】 頭綱 「茶錄」に、福建貢茶、每若干、計綱以進、國朝故事に、第一綱團茶至、即分賜近臣と、龍團茶
は最も貴品と爲す、【九】 升堂 「三國志」に、周瑜孫策、同年友善、升堂拜母、有無通共と、【一〇】 一甌 鄭谷の詩、顧渚一甌春
有味と、【一一】 林下 「雲溪友議」に、江西太守韋丹、贈靈徹詩曰、已爲平子歸休計、五老峯前必共君、靈徹酬之曰、相逢盡道
休官去、林下何曾見一人と、

【題義】 簽書判官朝奉の官を奉ずる程邊彦、字は子邵は母に事へて至孝、此の人に新茶を贈り、其の
母堂に飲まして呉れと、乃ち程は其の謝詩を寄せたるを以て次韻したのである、

【詩意】 母は子の爲に官相當の衣を縫うて付與せらる、子は母の爲め他の饗應を受けたる時肉を食は
ずに懷中して歸り母に餽る、不疑と云ふ人は裁判官として公平なる所置を取り母の喜んで一笑するに
供した、曾子と云ふ人は母が在るうちは貧しくともよい、母死んだ後千鍾の祿も吾は欲しくないと、
今呈する茶は火前の試焙にて一番茶である、雪裏の頭綱が貢獻する龍團は今日は賜はることを輟めて
ある、此れより升堂して君が母は即ち我が母、君と我とは兄弟である、官を罷めた後は同じく一甌を
林下に飲み此に相逢ふを記すべきである、
【餘論】 此の篇は判官のこと、茶のこと、分明に記載する題目と相離れざるものがある、紀曰く、去
人字不妄と、穎谷封人とあれば論なきも、不妄は次韻の罪である、

次韻送張山人歸彭城

次韻張山人が彭城に歸るを送る

羨君飄蕩一虛舟。
來作錢塘十日游。
水洗禪心都眼淨。

羨む君が飄蕩たる一虛舟、
來りて錢塘十日の遊を作す、
水は禪心を洗うて都眼淨く、

【字解】 【一】 虛舟 杜子美の詩、
對君疑是泛虛舟と、無我無心の
境地を言ふ、「莊子列禦寇篇」に、汎
若水之舟、虛而遊者也と、

山供詩筆總眉愁。山は詩筆に供して總眉愁ふ、
 雪中乘興真聊爾。雪中興に乗ず真に聊爾、
 春盡思歸却罷休。春盡きて歸るを思ふ却つて罷休、
 何日五湖從范蠡。何の日か五湖范蠡に従ひ、
 種魚萬尾橘千頭。魚は萬尾を種る橘は千頭、

庚日、取鯉魚懷子者、投池中と、【六】橘千頭、「襄陽記」に、李叔平、於武陵、種甘橘千株、曰千頭木奴と、

【題義】張天驥山人が江蘇の彭城に歸るを送る詩である、

【詩意】羨む君は飄蕩として繫がざる虚舟の如くであるを、來りて錢塘江畔に十日の游を作した、錢塘の水は其の禪心を洗うて清ければ眼も亦淨きを知る、錢塘の山は詩筆の材料に供して總眉を愁へしむ、雪中に興に乗じて歌ふは真に聊爾である、春が盡きるに及んで歸るを思ふは是れ眞の罷休である、又何の日か五湖の上を范蠡に従うて遊び、養魚して富を得植橘して財を増すとさぞや、

【餘論】公の筆としては平平凡凡に屬するもの、都眼淨、總眉愁の語の如き邪魔外道である、淨眼、愁眉は常語なれども都と總の字、何の義かある、何の味かある、紀の黙過したるは不思議である、

【三】都眼淨、佛語の淨眼を倒用する、【三】聊爾、「晉書阮咸傳」に、未だ能く免俗、聊復爾爾耳と、かりそめ、【四】范蠡、越王を助けて吳を亡ぼし、去つて五湖に遊び、陶に入り、自から陶朱公と稱す、富巨萬を得、【五】種魚、「北戸雜錄」に、陶朱公養魚法、凡種魚、毎二月上

次韻林子中王彥祖唱酬

林子中、王彥祖が唱酬に次韻す

蚤知身寄一瀛中。蚤に知る身は一瀛の中に寄するを、
 晚節尤驚落木風。晚節尤も驚く落木の風、
 昨夢已論三世事。昨夢已に論ず三世の事、
 歲寒猶喜五人同。歲寒猶ほ喜ぶ五人の同じきを、
 雨餘北固山圍座。雨餘北固山座を圍み、
 春盡西湖水映空。春盡きて西湖水空に映す、
 差勝四明狂監在。差や四明の狂監に勝る在り、
 更將老眼犯塵紅。更に老眼を將て塵紅を犯す、

【自注】賦與子中、彥祖、子敦、完夫、同試、舉人景德寺、今皆健。

【字解】【一】一瀛、「華嚴」に、世界一瀛と、【二】晚節、晩年、老年に同じ、節は節義ではなく、節期である、杜子美の詩、晚節漸於詩律細と、【三】落木、杜子美の詩、秋窗猶曙色、落木更高風と、「自注」に、近聞華老、公擇皆遊、故有此句と、【四】昨夢、「圓覺經」に、如昨夢、故當知、生死及與涅槃、無起無滅、無來無去と、【五】歲寒、「論語子罕篇」に、歲寒然後、知松柏之後凋也と、遊境に處して、節義堅固なる人に喩ふ、【六】北固山、潤州の地、錢塘よりは道程數百里を

隔つ、林子中が寓地ならん、今の江蘇省丹徒縣の地、【七】西湖、公の官住の地、【八】四明、唐の賀知章、官は秘書外監、晩節放誕、自ら四明狂客と稱す、【九】老眼、杜子美の詩、皇天無老眼と、【一〇】塵紅、紅塵の倒用、「班固西都賦」に、紅塵四合、煙雲相連と、

【題義】林子中と王彥祖と往復したる詩に次韻して作る、

【詩意】 蚤に人間と云ふものは滄海の一粟一漚の如きものであることを知つて居る、而して晩年に及んで尤も落木の風に驚く、過現未の三世は一呼吸の間であると論じたるは昨夢である、唯歲寒猶ほ喜ぶ五人生存して落木の風に逢はないことを、雨餘の北固山は愈よ翠色を増して座を圍繞するであらう、春が盡きて西湖の水は茫茫と碧色空に映じて居る、林君は少しく四明の狂監に勝る所あるかと想ふ、それは全く仙人化せずして、更に此の老眼を將て紅塵中を犯して人間に遊んで居るからである、

【餘論】 紀曰く、尙老健と、林子中も祕監と爲り、賀知章も祕監、同官職なるが故に之を言ふなるが、老眼や塵紅の文字適切でないと思ふ、是も次韻の罪、

壽星院寒碧軒

壽星院の寒碧軒

清風肅肅搖窗扉。

清風肅肅窗扉を揺かす、

窗前修竹一尺圍。

窗前の修竹一尺の圍、

紛紛蒼雪落夏簟。

紛紛蒼雪夏簟に落ち、

冉冉綠霧沾人衣。

冉冉綠霧人衣を沾す、

日高山蟬抱葉響。

日高くして山蟬葉を抱きて響き、

人靜翠羽穿林飛。

人靜にして翠羽林を穿つて飛ぶ、

道人絕粒對寒碧。

道人絶粒して寒碧に對す、

爲問鶴骨何緣肥。

爲に問ふ鶴骨何に緣つて肥ゆるかと、

鶴骨 齊己の詩、瘦應成鶴骨と、

美の詩、山蟬帶響穿疎戶、林蔓蟬
青入破窗と、【六】絶粒 「孫綽
天台山賦」に、絶粒茹芝者と、【七】

【字解】 【一】肅肅 王粲の詩、
肅肅凄風と、「世説」に、嵇康、肅肅
如松下風と、嚴正なる貌、靜寂な
る貌、用法が種種に別る、【二】夏
簟 杜子美の詩、留客夏簟青琅玕
と、【三】冉冉 次第次第の貌、杜
子美の詩、雨裏紅蕖冉冉香と、
【四】沾人衣 杜子美の詩、無使
霜露沾人衣と、【五】山蟬 杜子

【題義】 杭州天竺寺塔中の壽星院の寒碧軒と題する房を詠するのである、

【詩意】 清風は肅肅と聲をなして窗扉を揺かす、その聲は何であると思ふたら窗前には修竹が一尺圍もある、風が之に當りて聲を爲すのである、紛紛たる蒼雪が夏簟に落下するかと疑はしむ、又冉冉たる綠霧が人衣を沾すかとも疑はしむ、日は漸く高うして山蟬が林葉を抱いて鳴いて居る、人は靜なるが故に翠羽は己の天下であるかの如く林を穿つて飛ぶ、軒主の道人は人間の火食を斷つて以て此の寒碧竹軒に對して坐す、爲に問ふ鶴骨であるべき筈の者が何の術に緣つて肥えて居るやと、

【餘論】 紀曰く、渾成脫洒、前六句有三杜意、後二句是本色と、余謂ふ前四句、皆竹を謂ひ、五六山蟬翠羽を以て壽星の幽地を謂ひ、七八竹と人とを合して結ぶ、蒼雪と綠霧の如きは竹即ち寒碧の神韻を言ふ、紀の渾成脫洒と評するは、大に當る、大に當る、

書劉景文左藏所藏王子敬帖

劉景文左藏が藏する所の王子敬の帖に書す

古今體詩 壽星院寒碧軒 書劉景文左藏所藏王子敬帖

家雞野鷺同登俎。家雞野鷺同じく俎に登る、

春蚓秋蛇總入奩。春蚓秋蛇總て奩に入る、

君家兩行十二字。君が家の兩行十二字、

氣壓鄴侯三萬籤。氣は壓す鄴侯の三萬籤、

【字解】〔一〕家雞野鷺「南史王僧虔傳」に、庾征西翼、少時與王右軍齊書名、右軍後進、庾猶始不服、與人書曰、小兒輩、賤家雞愛野鷺、皆學逸少書、後亦嘆羨、以爲伯英再生と、野鷺はアヒル、〔三〕

登俎 俎はツクエ、又マナイタ、祭器、〔二〕春蚓秋蛇「晉書王羲之傳」に、子雲近世、擅名江表、僅得成書、無丈夫之氣、行行如

榮春蚓、字字如縮秋蛇と、〔四〕入奩 奩は化粧箱、〔五〕鄴侯 鄴は縣名、今の河南省臨漳縣の地、唐の李泌は鄴侯に封ぜらる、家藏書に富む、「困學紀聞」に、李泌父承休、聚書二萬餘卷、戒子孫、不許出門、有求讀者、別院供饌、鄴侯家多書、有自來矣と、韓退之の詩、鄴侯家多書、挿架三萬軸と、〔六〕籤 牙籤、フダ(札)、

【題義】劉景文が家に藏する所の王獻之の法帖に書したる詩、苕溪の漁隱叢話に、此帖乃右軍帖、東坡以爲子敬誤矣とあるから、獻之にあらで羲之が眞なるか、

【詩意】家雞も野鷺も逃れて同じく一俎に登るものである、春蚓も秋蛇も避けて總て一奩に匿るべきものである、君が家に藏する僅僅兩行十二字、其の氣は鄴侯が三萬籤をも壓伏する勢ひである、

【餘論】紀曰く、奩字強押と、韻字は公勝手に作ることは出来ない、奩を除きて之に代る字は無いから已むを得ず之を使用したと思へる、

書劉景文所藏宗少文一筆畫 劉景文藏する所の宗少文が一筆畫に書す

宛轉回文錦 縈盈連理花 宛轉たる回文の錦、縈盈連理の花、

何須郭忠恕 匹素畫縑車 何ぞ須ひん郭忠恕、匹素縑車を畫くを、

【字解】〔一〕宛轉 劉廷芝の詩、宛轉蛾眉能幾時ぞ、緩舞の狀自由なるを言ふ、今の句はぐるぐる循環して自由なるの意、〔三〕

回文錦 逆に讀みて順に回る詩を錦字で織る、晉の寶滔より始まる、次韻回文の詩六首がある、〔二〕縈盈 謝惠連雪賦に、未縈盈於帷席、注廻委之貌と、めぐり、からまるの意、〔四〕連理 樹幹は異なるも兩樹の枝が連たり一と爲る、是れを連理と言ふ、白樂天の詩、在地願爲連理枝と、〔五〕郭忠恕 「宣和畫譜」に、郭忠恕、洛陽人、少事周爲博士、入宋太宗詔爲國子主簿、師事關全、重複複閣間、見墨出天外數峯、妙在筆墨之外、王侯公卿、或以美醞、豫障紈素於壁、乘興即畫、苟意不欲、而固請之、必怒而去、有富人子、喜畫、日設几案絹素好紙、屢以情言、忠恕取紙數十番、首畫一卍角小童、持縑車、紙窮處作風鳶、中引一線長數丈、富家子、不以爲奇、遂謝絶と、

【題義】劉景文が家に藏する宗少文が畫く一筆畫に題したる詩、王獻之は能く一筆書を爲り、陸探微は一筆畫を爲る前例に依る圖である、

【詩意】宛轉たる回文の錦を織るも要するに一情の動くに在る、縈盈たる連理の花を寫すも亦一情の動きである、何ぞ須ひんや郭忠恕の、煩を厭はずして匹素に複雑なる縑車を畫くことを、

【餘論】宛轉、縈盈二句の意、種種に義が取れる、余の解釋とは全く反對に取ることも出来る、一水四見の義は詩に於てもある、

眞覺院有落花。花時不暇往。四月十八日。與劉景文同往賞。

枇杷

眞覺院に落花あり、花時往くに暇あらず、四月十八日、劉景文と同じく往き、枇杷を賞す

綠暗初迎夏。紅殘不及春。

綠暗くして初めて夏を迎へ、紅殘して春に及ばず、

魏花非老伴。盧橘是鄉人。

魏花は老伴にあらず、盧橘は是れ郷人、

井落依山盡。巖崖發興新。

井落山に依つて盡き、巖崖興を發する新なり、

歲寒君記取。松雪看蒼鱗。

歲寒君記取せよ、松雪蒼鱗を看る、

【字解】

〔一〕魏花。「歐陽公花釋名」に、牡丹中魏花者、千葉内紅、花出於魏相仁溥家と、〔二〕老伴。白樂天の詩、老伴如君少と、〔三〕盧橘。「朱翌猗覺寮雜記」に、嶺外以枇杷爲盧橘、故東坡云、盧橘楊梅次第新、唐子西亦云、盧橘枇杷一物也、按上林賦、盧橘夏熟、晉灼曰、盧黑也、上林賦、又別出枇杷、恐非一物、枇杷熟則黃、不應云盧、則非枇杷甚明、東坡、子西、但見嶺外所呼故云爾と、前にも辨せる如く金柑である、公は枇杷と定めての詩である、〔四〕井落。邨落と義同じく、市中の人家の意、宋斌の詩、(唐詩選に誤つて王之渙と爲す)白日依山盡と、〔五〕發興。杜子美の詩、凭高發興新と、〔六〕松雪。杜子美の詩、晴雪落長松と、馮應榴曰く、歲寒以下十字、兼用枇杷晚翠之意、不專指下首松樹と、

【題義】

杭州城外の眞覺院に洛陽花即ち牡丹花がある、開花の時は往觀する暇が無かつた、四月十八日に劉景文と同遊して牡丹の代りに盧橘を賞觀する、

【詩意】

綠陰が暗澹たる初夏を迎へた、百花の紅は僅に残して今は春ではない、牡丹の花は佳人の伴にて老人の伴ではない、が今賞する盧橘は是れ我が輩の郷人である、市を爲す人家は山麓に依つて盡さるが、巖崖に沿うて行く我等は興を發すること新である、歲寒の時を君も記取し給へ、此に來りて松雪が蒼鱗に綴るを看ることを、此の盧橘も百卉の後に晚翠を擅にして居る、

【餘論】

紀曰く、宕開作收、不結本題、而恰結本題と、一二對起を以てするは余輩最も欣ぶ所、杜子美の正宗は是に於て見る、眞に五律の上等妙覺である、

又和景文韻

又景文の韻に和す

牡丹松檜一時栽。

牡丹松檜一時に栽う、

付與春風自在開。

春風に付與して自在に開かしむ、

試問壁間題字客。

試みに問ふ壁間題字の客、

幾人不爲看花來。

幾人が看花の爲に來らざる、

【詩意】

牡丹と松檜とを同一時に栽る、春風の吹くがままに花は自在に開かしむ、試みに問ふ壁間に題字の客は多人數であるが、此の中にて幾人が看花の爲に來るものである、

【字解】

〔一〕自在。「漢書王嘉傳」に、大臣舉錯、恣心自在も自由と同じ、〔二〕看花。劉禹錫の詩、無人不道看花回と、

【餘論】紀曰く、言三人愛繁華、而忽高節用、以自寓耳、然意曲、而措語却淺と、詩としては劉夢得の上に出でない、

西湖壽星院此君軒 西湖の壽星院此君軒

臥聽謾謾碎龍鱗。 臥して聽く謾謾龍鱗碎くるを、
俯看蒼蒼立玉身。 俯して看る蒼蒼玉身立つを、
一舸鷗夷江海去。 一舸鷗夷江海に去る、
尚餘君子六千人。 尚ほ餘す君子六千人、

【字解】〔一〕謾謾。陸機感時賦に、風謾謾而妄作と、「世説」に、世目李元禮、謾謾如勁松下風と、松風の形容、又峻挺の形容、〔二〕蒼蒼。竹樹の茂れる貌、曹子建の詩、山樹鬱蒼蒼と、〔三〕玉身。白樂天

の詩、玉立竹森森と、〔四〕一舸。杜牧之の詩、西子下姑蘇、一舸逐鷗夷と、〔五〕鷗夷。草囊、「吳語」に、盛以鷗夷、而投之江と、「史記」に、范蠡、既佐越滅吳、復得西施、與之共去、乘舟浮海、變姓名、自謂鷗夷子皮と、范蠡が吳を滅ぼせし後、西施を生かして置いては越王も亦吳王と同じく國を滅ぼすと爲し、乃ち欺きて西施を伴うて同舟、江心に至り之を沈むと、鷗夷子の名は是に由る、此の事無ければ、鷗夷子の名は空名無用である、〔六〕君子。「毛詩」に、瞻彼淇奥、綠竹猗猗、有斐君子と、竹の異名を言ふ、「國語」に、越伐吳、越王、以其私卒君子六千人、爲中軍と、「史記」に、越用范蠡計、發習流二千教士四萬人、君子六千人、諸御千人伐吳、勾踐竟滅吳、范蠡、乃與其私徒、乘舟浮海と、馮應榴曰く、六千君子喻竹也と、余謂ふ竹の字は六畫より成る、又一見すれば千の字が二箇雙ぶの状である、以て譬喩するか、

【題義】壽星院の此君軒と題する室を詠じたる詩である、

【詩意】軒上に臥して聽く謾謾として龍鱗の碎くるが如き松の響を、又軒下を俯しては看る蒼蒼と竹が玉身を立つるを、一舸を泛べて鷗夷子は既に江海に去つて已に久しい、今に尚ほ餘す君子六千人を、

【餘論】此の詩を一讀再讀三讀では其れ何事を詠るすや少しも判らない、國語や漢書や史記を讀み、始めて解することを得、坡詩の面目は此の如きものに在る、

此君軒 此君軒

雲幢煙節十洲人。 雲幢煙節十洲の人、
犀甲檀槍百萬軍。 犀甲檀槍百萬の軍、
翳蒼叢生何足道。 翳蒼叢生何ぞ道ふに足らん、
此君真是此君君。 此君は眞に是れ此君の君、

【字解】〔一〕雲幢。雲を以てハタ(幢)と爲す、〔二〕煙節。煙を以て節杖と爲す、〔三〕十洲人。仙人鳥を謂ふ、包何の詩、市井十洲人と、〔四〕犀甲。犀の皮にて造れる甲冑、

檀槍。檀は白檀、紫檀、香木、槍はヤリ、牧之の詩、腥腥綠檀槍と、〔五〕百萬軍。「杜牧之晚晴賦」に、竹林外寒兮十萬丈夫、甲刃縱橫、密陣而環侍と、〔七〕翳蒼。「張華鷓鴣賦」に、翳蒼蒙籠と、「謝靈運賦」に、修竹葳蕤以翳蒼、澗木森沈以蒙茂と、草木の繁茂する形容、〔八〕此君。「世説」に、王徽之、嘗借居空宅、中便令栽竹、或問之、徽之但嘯咏、指竹曰、何可一日無此君と、〔九〕此君。山公曰、此君真是此君、君、言竹之發生必有所以爲之主者、猶如莊子齊物論所云其有眞君存焉、莊子天地篇又云、可爲衆父、而不可以爲衆父父、即此君君同意と、

【題義】壽星院の此君軒ならんか、竹の事を詠すると見れば可、

【詩意】雲幢や煙節を知るは十洲の人である、犀甲や檀槍を以て百萬の軍を爲す、此等のものが翳會叢生するとも道ふに足るものはない、此君は眞に是れ此の君の又君たるものである、

【餘論】紀曰く、前二句、不_レ免_二麤材杜牧之_一諷、結尤不_レ成_レ語と、漢高祖紀にも陛下將_レ將の語もあれば、障礙なきものの如くであるが、禪語に近く、謎語に近く、竹の風韻とは千里萬里隔る、要するに邪魔外道に類し、聲聞乗にも到らざるものである、

觀臺

觀臺

三界無所住。一臺聊自寧。

三界所住無し、一臺聊か自ら寧し、

塵勞付白骨。寂照起黃庭。

塵勞白骨に付し、寂照黃庭に起る、

殘磬風中嫋。孤燈雪後青。

殘磬風中に嫋く、孤燈雪後青し、

須防童子戲。投瓦犯清冷。

須らく防ぐべし童子の戯れを、瓦を投じて清冷を犯す、

【字解】「一」三界。欲界・色界・無色界を三界と言ふ、「二」無所住。「金剛經」に、應無所住、而生其心と、「三」一臺。一箇の臺と云ふのみ、別に義理はない、「四」塵勞。煩惱と義同じ、「維摩經慧遠疏」に、煩惱空汚名爲_レ塵、彼能勞亂說以爲_レ勞と、「五」白骨。「大論」に、九想觀を説く、其の中第八を白骨觀と云ふ、「六」寂照。眞理の體を寂と云ひ、眞智の用を照と云ふ、「楞嚴經」に、淨

極光通達、寂照含_二虛空_一、却來觀_二世間_一、猶如_二夢中事_一と、「七」黃庭。仙經、佛經に擬して作る、「八」殘磬。磬聲の餘韻を言ふ、「九」孤燈。「楞嚴經」に、身然_二一燈_一、燒_二一指節_一と、孤は一と同じ、「一〇」童子戲。「楞嚴經」に、月光童子、修_二習水想觀_一、室中安禪、有_二弟子_一、窺_レ窗觀_レ室、唯見_二清水_一、童稚無知、取_二一瓦礫_一、投_二於水內_一、激_二水作聲_一、出_二定心痛_一、後入_二定時_一、弟子奉_レ教、除_二去瓦礫_一、身質如_レ初と、

【題義】坐禪觀法する爲の臺を詠する詩、觀は内觀にて外觀ではない、

【詩意】欲と色と無色との三界は眞の所住處ではない、此の一臺は聊か身心安寧が出来、人間の煩惱塵勞は總て白骨觀法に付し去る、其の眞に體用の力は黃庭より起るのである、方に殘せんとする磬聲は風中に微弱である、孤燈の光は雪後に青く見える、坐禪中は童子をして戯れしめてはならぬ、水想觀法中に瓦を投せらると曾中に瓦が入るのみでない水の清冷も犯さる、

【餘論】紀曰く、五六九僧一派と、眞に名評である、九僧のみでない、宋僧の五律佳句と稱せらるるもの、皆此の風格である、顯萬・智圓・淮海・善權・梵崇等、陳起の聖宋高僧詩選を讀む者は自から其の妙を知るであらう、但此篇皮肉を言へば黃庭の二字である、全體が佛の觀法であるに、仙經を用て來たるは非常なる誤である、九青の韻には經の字がある、是を利用すれば、如何なる事でも言へる、公が觀法此に至らざるは千劫の恨事である、

遊中峯杯泉

中峯の杯泉に遊ぶ

石眼杯泉舉世無。

石眼杯泉舉世無し、

【字解】「一」石眼。地名ならん

要知杯渡是凡夫。杯渡を知らんと要す是れ凡夫、

可憐狡獪維摩老。憐む可し狡獪の維摩老、

戲取江湖入鉢盂。戯れに江湖を取つて鉢盂に入る、

か、【一】杯渡「高僧傳」に、晉杯渡者、不知其姓名、常乘木杯渡河、因名杯渡和尚と、【二】凡夫「梵網經」に、初捨凡夫成等正覺と、波羅を秦譯に凡夫、唐譯

に異生と、凡類は其の生を異にするが爲め、衆生も同義、【三】狡獪王方平、謂麻姑云、姑固少年、吾老矣、了不喜復作此狡獪變化也と、【五】戲取「法苑珠林」に、假使四大海水、内此瓶中、猶不能滿と、【六】鉢盂鉢は鉢と同じ、梵語、盂は漢語、梵漢結合したる名、應量器と云ふ、師傳ある者は「ハツツ」と讀む、「佛教辭典」に、「ハチウ」と訓するは門外漢讀である、

【題義】中峯の杯泉を詠じたる詩である、

【詩意】石眼の杯泉は天下皆其の名を知つて居る、更に知ることを要す杯渡が凡夫であるか聖者であるかと云ふことを、我は憐む彼の狡獪なる維摩老を、此の廣大なる江湖を取つて狭少なる鉢盂の中に入ると稱したるを、

【餘論】此の詩は當然禪喜集に收むべきものであるが、收めてない、徐長孺が善驗しなかつたのであらう、

仲天貺。王元直。自眉山來。見余錢塘留半歲。既行作絕句五首送之

仲天貺・王元直、眉山より來り、余を錢塘に見る、留まること半歲、既に行る、絶句五首を作り之を送る

仲君豈弟多學。

仲君は豈弟多學、

王子清修寡言。

王子は清修寡言、

病後空驚鶴瘦。

病後空しく鶴瘦に驚き、

時來或作鵬鷺。

時來らば或は鵬鷺を作さん、

清修と、廻賢の詩、吾宗多秀發、公子獨清修と、【四】寡言「揚子」に、寡言而法、君子也と、「禮内則」に、慎而寡言者と、【五】鶴瘦 白樂天の詩、病瘦形如鶴と、【六】鵬鷺 李太白の詩、一屈雖千里、鵬鷺望三台と、

【題義】仲天貺と親戚の王元直の二人、蜀の眉山より來りて、公の任地杭州の錢塘に滯留半歲にして歸るに及んで、此の五絶句を作り之を送る、

【詩意】仲君は愷悌にして而かも多學の人である、王子は清修にして而かも寡言の人である、病後の吾は自分ながら鶴の如く瘦せたるに驚く、時には二君の如き會心の人に逢うて或は鵬鷺の如くなる元氣が出る、

【一】

【二】

古今體詩 仲天貺王元直自眉山來見余錢塘留半歲既行作絶句五首送之

【字解】【一】豈弟「毛詩」に、豈弟君子、民之父母と、やはらぎたのしむ、愷悌と同じ、【二】多學「論語衛靈公篇」に、賜也、女以予爲多學而識之者一與と、【三】清修 陸倕の詩、任君本達識、張子復

海角煩君遠訪。

海角君の遠く訪ふを煩はす、

江源與我同來。

江源我と同じく來る、

剩作數詩相送。

剩へ數詩を作りて相送る、

莫教萬里空回。

萬里空しく回らしむる莫し、

【字解】〔一〕海角 白樂天の詩、
海角天涯通始休と、〔二〕江源 郭
景純江賦に、惟岷山之導江、初
發源乎濫觴と、

【詩意】此の南方海角に二君の遠訪を煩はせしが、江源は我が來りし路と同一路を取り來らる、剩へ數詩を作りて君の歸國を送る、此の詩がミヤゲの代りとして萬里空回でなきこととする、

〔三〕

三人一旦同行。

三人一旦同じく行く、

〔二〕

【自注】二子與秦少章、同寓高齋。復同舟北行。

留下高齋月明。

留下す高齋の月明に、

遙想扁舟京口。

遙に想ふ扁舟京口に、

尙餘孤枕潮聲。

尙ほ孤枕潮聲を餘す、

【字解】〔一〕三人 公の自注に
二子秦少章と、同じく高齋に寓し、
復た同舟にして北行す、〔二〕高齋
郡齋の名である、嚴維の詩、登高有
遲客、高齋瞰浙江と、〔三〕京口
京江の口、今日の江蘇省丹徒縣治で
ある、

【詩意】仲と王と秦の三人は一旦同行して來り、此の高齋の月明に留宿せられた、遙に通過せられて

〔四〕

更欲留君久住。

更に君を留めて久しく住めんと欲す、

念君去國彌年。

念ふ君が國を去つて年を彌るを、

空使犀顛玉頰。

空しく犀顛玉頰をして、

長懷髯舅淒然。

長く髯舅を懷うて淒然たらしめん、

【字解】〔一〕犀顛 國語に、
鄭史伯曰、今王惡角犀豐盈と、犀
は水牛に似たる一角の獸、顛はカシ
ラの骨、〔二〕玉頰 戴叔倫の詩、
玉頰啼紅夢初醒と、頰は顔面の横部、
ホホである、公の諸子を謂ふ、〔三〕

扁舟京口の狀を想うて、尙ほ孤枕に京口の潮聲を餘すかと、

〔四〕

〔五〕

爲余遠致殷勤。

余が爲に遠く殷勤を致す、

瑞艸橋邊老人。

瑞艸橋邊の老人、

紅帶雅宜華髮。

紅帶の雅華髮に宜し、

白醪光泛新春。

白醪の光新春に泛ぶ、

【字解】〔一〕老人 公の自注に
王慶源とある、〔二〕紅帶 詩文發
源に、王慶源、以恩勝得官、
居於青神、來從東坡、求紅帶、坡
作長篇、并帶贈之と、〔三〕白醪
醪は濁酒、

【詩意】更に君等の今暫く滯留を勧めたいが、君等の心を察すれば半歳郷を離れたる寂しさがある、家に在る犀顛玉頰の兒輩が、長く髯舅が道中を案じて淒然であらう、

【詩意】長者を敬稱するに髯の字を以てす、元直は公の夫人の弟であれば、兒輩より言へば舅である、

【詩意】余が爲に遠く殷勤の情を致さるるは、其の人は誰である瑞艸橋邊の老人である、余は老人に紅帯を呈する老人の白髪に調和するからである、これを著け白醪酒を飲めば其の光彩が新春に浮ぶのである、

贈善相程傑

相を善くする程傑に贈る

心傳異學不謀身

心傳の異學身を謀るならず、

自要清時閱摺紳

自ら要す清時摺紳を閱するを、

火色上騰雖有數

火色上騰數ありと雖も、

急流勇退豈無人

急流勇退豈人無からんや、

書中苦覓原非訣

書中の苦覓原と訣にあらず、

醉裏微言却近眞

醉裏の微言却つて眞に近し、

我似樂天君記取

我は樂天に似たり君記取せよ、

華顛賞徧洛陽春

華顛賞徧す洛陽の春、

馬君鷹肩火色、騰上必速、恐不_レ能_レ久と、【六】有數 二義あり、一は無數の反對にて少しくある、一は術、「莊子」に、有_レ數存_レ焉於

其間と、今の句は前者に屬す、【七】急流 「聞見前錄」に、錢若水、爲_レ舉子一時、見_レ陳希夷於華山、希夷曰、明日當_レ再來、若水如_レ期往、有_レ一老僧、與_レ希夷、擁_レ地爐坐、僧熟_レ視若水久之、不_レ語以_レ火箸_レ畫_レ灰、作_レ做不得三字、徐曰、急流中勇退人也、若水辭去、希夷不_レ復留、後若水登科、爲_レ樞密副使、年才四十致_レ政、希夷初謂、若水有_レ仙風道骨、意未_レ決、命_レ老僧者_レ觀_レ之、僧云_レ做不得、故不_レ復留、然急流中勇退、去_レ神仙不_レ遠矣、老僧麻衣道者也、希夷素所_レ尊禮云と、【八】苦覓 辛苦して覓_レ得_レた術、【九】微言 「漢書藝文志」に、仲尼沒而微言絶と、微妙の言辭、【一〇】洛陽春 白樂天の詩、看_レ雪尋_レ花瓶_レ風月、洛陽城裏七年間と、

【題義】人相を觀て其の人の吉凶を知るに善く通じたる程傑と云ふ者に贈る詩である、

【詩意】心傳の異學を研究して榮達の爲の學を爲し身を謀ることはしない、自ら要とする清時摺紳と爲つて出世する人の相を檢閲するが志である、昔火色上騰するを觀て其の人を卜知する善相者があつた、又急流勇退すると言うて亦人を卜知した善相者があつた、此等の事は書中に苦覓して自知すること、決して秘訣などはない、又醉裏に吐く微言も醒めて言ふ以上に眞に近きものがある、我は樂天に似て居るが君は記取するや否や、老人の僻に少年と同じく洛陽の春を賞徧することを、

【餘論】唯人相を觀て運命を判することは古來よりある、是を一家の學の如く爲したるは宋代理學の影響と思はる、公が異學と稱する所以である、紀曰く、五六是到骨宋詩、然是眞語と、五六のみでない、全體到骨宋詩である、

參寥惠楊梅

參寥楊梅を惠む

新居未換一根椽

新居未だ換へず一根椽、

【字解】【一】一根椽 根は根本、

只有楊梅不直錢

只楊梅あるも錢に直せず、

莫共金家鬪甘苦

金家と共に甘苦を鬪はす莫し、

參寥不是老婆禪

參寥は是れ老婆禪ならず、

椽は椽柄、タルキ、【三】楊梅、マモモ、「南方艸木狀」に、楊梅其子如彈丸、正赤、五月中熟、熟時其味甘酸と、李太白の詩、江南楊梅熟と、【三】不直錢、「史記」に、灌夫無所

發怒、乃罵臨汝侯曰、生平毀程不識、不直一錢と、【四】金家、「咸淳臨安志」に、南山下有老嫗、姓金、其家楊梅甚盛、俗稱楊梅塢、所謂金婆楊梅是也と、【五】老婆禪、老婆は慈悲太だ過ぎ、却つて兒孫を毒す、禪機は峻烈なるを貴ぶ、殷勤丁寧なるは良器を作ることが出来ない、「大悲書」に、忠國師、拖泥帶水、説老婆禪と、「傳燈錄」に、黃檗恁麼老婆心切と、

【詩意】

新居は新居なるが舊面目なる一根椽即ち心の置き處は換へない、只恵まれたる楊梅のみ有りて是は金錢以上である、金家の老婆の如く多く徒らに植ゑてあるものと競争することはしない、參寥は丈夫であるから我も自覺する人であると知つて居る、

【餘論】

紀曰く、此真惡札、撫一時打譚之作、編之集中、東坡之受累多矣と、金剛經の半枚、楞嚴經の一枚も讀んだことのない紀では、是は何の詩であると云ふことは判らない、公の靈が此の評を讀めば必ず言ふであらう、我は汝の評の爲に受累多しと、

次韻林子中蒜山亭見寄

林子中が蒜山亭より寄せらるるに次韻す

奇逸多聞老敬通

奇逸多聞老敬通、

【字解】【一】奇逸、「後漢孔融

何人慷慨解憐翁

何人か慷慨憐翁を解する、

十年簿領催衰白

十年簿領衰白を催し、

一笑江山發醉紅

一笑江山醉紅を發す、

聞道賦詩臨北固

聞く道らく詩を賦して北固に臨むと、

未應舉扇向西風

未だ應に扇を舉げて西風に向ふべからず、

叩頭莫喚無家客

叩頭して喚ぶこと莫かれ無家の客、

歸掃岷峨一畝宮

歸りて掃ふ岷峨一畝の宮、

是春と、鄭谷の詩、愁顔酒借紅と、【七】北固、山の名、江蘇丹徒縣北一里、山は江に斗入し、三面、水に臨む、梁の武帝は改めて北顧と曰ふ、京口に於ける第一壯觀、文選に謝靈運の長詩がある、【八】舉扇、「晉王導傳」に、時庾亮、雖居外鎮、而執朝廷之權、趨向者多歸之、王導内不能平、嘗遇西風塵起、舉扇自蔽、徐曰、元規汗人、亮字元規と、【九】叩頭、「漢趙廣漢傳」に、二人下堂叩頭と、【一〇】無家客、杜子美の詩、此身那得更無家と、【一一】岷峨、張平子、「周天大象賦」に、關岷峨之沃壤と、岷と峨眉山は共に蜀中の名山、【一二】一畝宮、「禮儒行」に、一畝之宮、環堵之室、葺門圭竇、蓬戶甕牖と、六尺を一步と曰ひ、步百を一畝と曰ふ、

【題義】

林子中が蒜山亭に遊び寄せらるる詩に次韻する、

【詩意】

奇逸にして而かも學に多聞なる老敬通は不遇である、其の不遇を見て何人か國家の爲め慷慨

して此の翁に憐情を寄せることを解するや、一官十年帳簿を記録して衰白を催すまでに至る、偶ま壯年の如く面紅なるは江山に遊んで酒を飲みしが爲であると知らば一笑する、聞く君は詩を賦して北固に臨眺せしと、されど未だ扇を擧げて西風に向つて不平を吐く王導の如きことはしない、叩頭して無家余の如き客を喚ぶことはしないがよい、それよりは歸りて岷峨の下に在る一畝の宮を掃除し玉ふがよい、

【餘論】 紀曰く、六句仍有不平之氣、叩頭二字未詳と、一笑と一畝は例の病か、

再和并答楊次公

再和、并に楊次公に答ふ

毘盧海上妙高峯

毘盧海上の妙高峯

【字解】 〔一〕 毘盧海、「華嚴經」に、毘盧遮那、十身集海と、毘盧遮那は毘樓舍那とも書す、梵語にて譯稱を遍一切處と言ふ、〔二〕 妙高峯「華嚴經」に、文殊師利、告善財童子言、南方有二國土、名爲勝樂、其國有山、名曰妙高峯と、須彌山と同じ、〔三〕 二老、林子仲と元長老、〔四〕 此翁、楊次公を言ふ、

二老遙知說此翁

二老遙に知る此の翁を説くことを、

聊復艤舟尋紫翠

聊か復た舟を艤して紫翠を尋ぬ、

不妨持節散陳紅

妨げず節を持して陳紅を散ずるを、

高懷却有雲門興

高懷却つて雲門の興あり、

好句眞傳雪竇風

好句眞に傳ふ雪竇の風、

唱我三人無譜曲

唱ふ我が三人無譜の曲、

馮夷亦合舞幽宮

馮夷も亦合に幽宮に舞ふべし、

【五】 紫翠、杜牧之の詩、千峯橫紫翠、雙闕凭欄干と、〔六〕 散陳紅「漢書食貨志」に、武帝之初、太倉之粟、陳陳相因と、「漢賈捐之傳」に、孝武元狩六年、太倉之粟、紅腐而不可食と、〔七〕 雲門興、「南史」に、何胤隱居若耶山雲門寺と、杜子美の若耶溪雲門寺と、此の二人は越州の雲門寺、今の紹州の雲門ではない、紹州は雲門山靈樹寺、宋初、文僊と云ふ高僧此處に住し、雲門禪宗を鼓吹したのである、〔八〕 雪竇風、雪竇、名は重顯、字は隱之、宋の興國五年、四月八日に生る、幼にして出家し、教相を究め、南游して師を求め、紫微峯に住し、晩に雪竇山に住し、大に雲門宗を振ふ、名を江浙の間に馳す、侍中賈公、朝に奏して號を明覺と賜ふ、皇祐五年、七月七日、遺囑せず、亦偈を説かず、北首して滅す、「雪竇頌古」、「祖英集」を著はす、次公は頌古の序を製す、〔九〕 無譜曲、無譜は人間が作爲せしに預からざる妙譜を言ふ、曲は雲門宗旨を妙音曲に喩ふ、〔一〇〕 馮夷、水神、「莊子」に、馮夷得之、以游大川と、公は「後赤壁賦」に、俯馮夷之幽宮と、「司馬相如大人賦」に、使靈媧鼓瑟而舞馮夷と、〔一一〕 幽宮、「江文通恨賦」に、慚幽宮之琴瑟と、幽冥界宮である、

【題義】 再び前韻を和して楊次公に答ふる、次公は姓は楊名は傑、無爲子と號す、官は禮部員外郎と爲る、博學殊に梵典に精通し、一時の高僧は皆交游す、公の詩梵典の深義を以てするは、能く其の人を知るからである、

【詩意】 毘盧海上の妙高峯に在つて、林元の二老は遙に此の翁の事を説いて居るであらう、さらば聊か復た舟を艤装して妙高山の紫翠を尋ぬるがよい、一方は妨げない節を持して人間の陳紅を散じ去るを、高懷は却つて雲門の興にも勝るであらう、又好句は眞に雪竇の風格を傳ふるであらう、若しや楊王元の三人が此の無譜の曲を唱ふれば、水神も相和して水底の幽宮内に舞ふであらう、